軽　海　遺　跡

県営公害防除特別土地改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1986

石川県立埋蔵文化財センター

軽　海　遺　跡

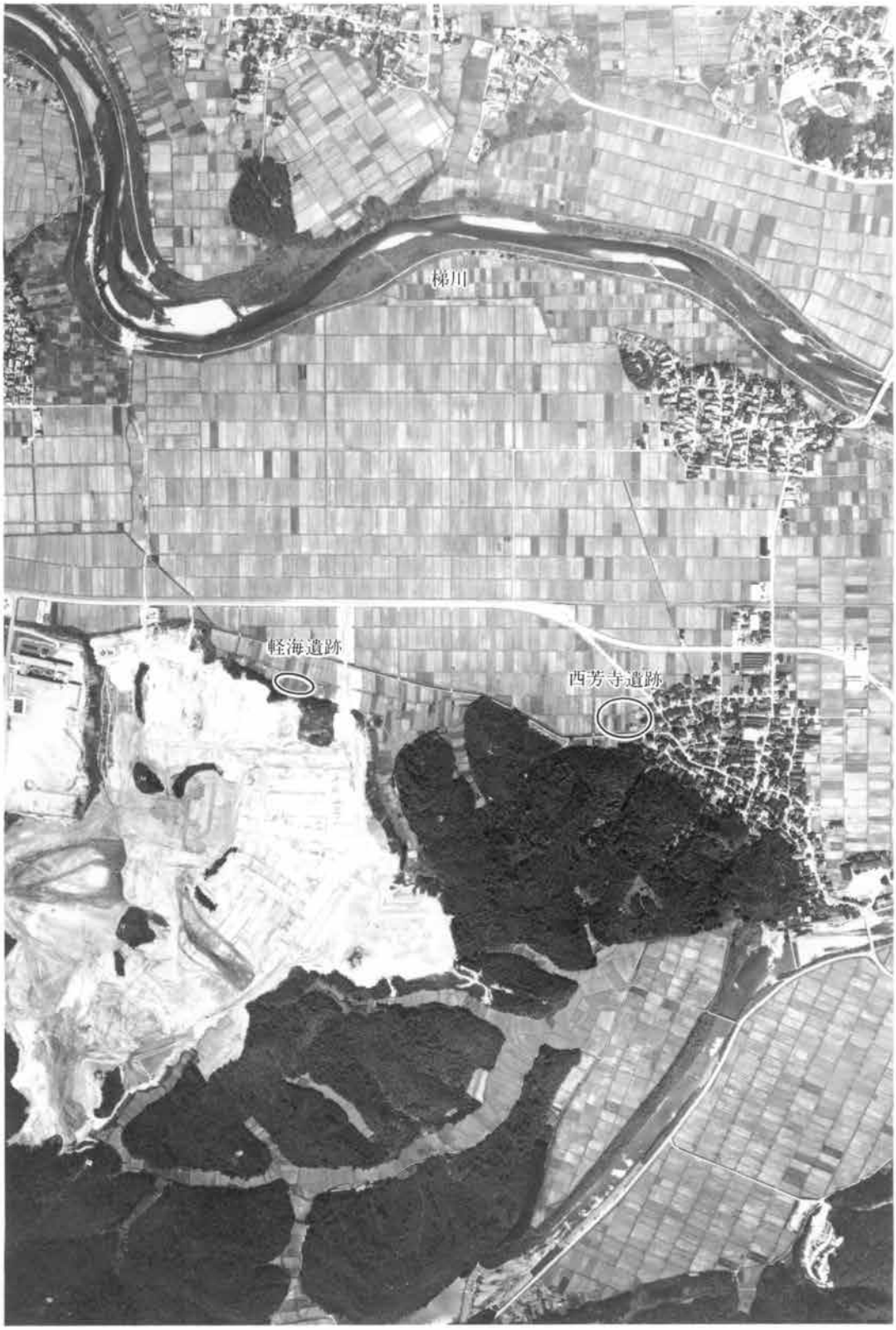
県営公害防除特別土地改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1986

石川県立埋蔵文化財センター

軽海遺跡全景(南より)

軽海遺跡樹木出土状況(東より)



遺跡周辺の航空写真①(1/10,000)　　(昭和45年 8 月23日撮影)

図版3

遺跡周辺の航空写真②(1/10,000)　　(昭和59年10月27日撮影)

例　　言

1．本書は、石川県小松市軽海地内に所在する軽海遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施行の県営公害防除特別土地改良事業(梯川流域地区軽海工区）に係るもので、同課の依頼により昭和60年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施した。また、昭和54年度に同事業により実施した同軽海地内に所在する西芳寺遺跡の発掘調査報告も本書に併載した。

3．両遺跡の調査期間、面積及び発掘担当者は次の通りである。

西芳寺遺跡　昭和54年６月８日～昭和54年７月20日　面積500m²

石川県立埋蔵文化財センター　田嶋明人（主事）、浅田耕治（主事）、戸澗幹夫（嘱託）

軽海遺跡　昭和60年４月23日～昭和60年７月５日　面積1500m²

石川県立埋蔵文化財センター　藤田邦雄（主事）

4．昭和54年度調査は、その費用の農家負担分について文化庁の補助を受け、昭和60年度調査は、全額耕地整備課が負担した。

5．軽海遺跡の発掘調査及び出土遺物の検討にあたっては次の方々の御教示、御協力を受けた。新城えり子、本由美子、横山貴広、本田秀生、宮下栄仁（以上埋蔵文化財センター調査員）、田嶋明人、湯尻修平、三浦純夫、山本直人、垣内光次郎、久田正弘（以上同センター職員）、清水哲広、軽海、荒木田、麦口、白江、千木野、漆町有志、小松土地改良事務所。

6．両遺跡出土の遺物整理作業は、村沢仁雄、前田すみ子、小野澄江〈遺物洗浄〉、吉村純子、北洋子、川端敦子〈遺物記名・分類・接合・復元・実測・トレース、遺構トレース〉（以上社団法人石川県埋蔵文化財整理協会）、宮下栄仁、横山貴広、本由美子、久田正弘、戸澗幹夫、藤田邦雄〈遺物・遺構実測・トレース、図版作製〉が行った。

7．本書の執筆はⅢを戸澗幹夫、Ⅳ－３－(3)を横山貴広、他を藤田邦雄が担当した。

8．本書の編集は執筆者、センター職員各位の助言、指導を受けて藤田が担当した。

9．本書中で扱う方位は磁北を示しており、レベルの数値は絶対高である。

10．本書における註・参考文献は巻末に掲げた。

11．両調査によって得られた資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保存管理に当たっている。

目　　次

例　言

頁

Ⅰ　遺跡の位置と環境 ……（藤田　邦雄）…… 1

1．位置と地理的環境 …… 1

2．歴史的環境 …… 2

Ⅱ　調査に至る経緯と経過 ……（藤　田）…… 7

1．調査に至る経緯 …… 7

2．調査の経過（日誌抄） …… 8

Ⅲ　西芳寺遺跡の遺構と遺物 ……（戸澗　幹夫）…… 12

1．調査地点と調査の概要 …… 12

2．遺構と遺物 …… 13

Ⅳ　軽海遺跡の遺構と遺物 ……（藤　田）…… 18

1．概　要 …… 18

2．遺　構 …… 24

(1)　溝状遺構 …… 24

(2)　掘立柱建物 …… 26

3．遺　物 …… 29

(1)　中近世の遺物…… 29

(2)　須恵器 …… 34

(3)　弥生式土器および古墳時代の土師器 ……（横山　貴広）…… 36

(4)　土錘、砥石、瓦、銭貨 …… 44

(5)　植物遺体 …… 46

Ⅴ　ま と め ……（藤　田）…… 54

挿　図　目　次

頁

第１図　軽海町の位置 …… 1

第２図　西軽海団地造成前の略図（『軽海町史』より　一部加筆） …… 3

第３図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000） …… 4

第４図　軽海地区試掘調査結果(1) …… 7

第５図　軽海地区試掘調査結果(2) …… 7

第６図　遺構、グリッド配置図（Ｓ＝1/400） …… 11

第７図　調査地点とトレンチの配置（Ｓ＝1/2,000） …… 12

第８図　西芳寺遺跡遺構平面図および土層断面図 …… 15・16

第９図　西芳寺遺跡出土遺物実測図（Ｓ＝1/3） …… 17

第10図　調査区土層断面図（Ｓ＝1/60） …… 19・20

第11図　軽海遺跡遺構全体図（Ｓ＝1/160） …… 21・22

第12図　軽海遺跡周辺図（Ｓ＝1/2,500） …… 23

第13図　１号溝実測図（Ｓ＝1/50） …… 24

第14図　２号溝実測図（Ｓ＝1/125） …… 24

第15図　３号溝実測図（Ｓ＝1/100） …… 25

第16図　４号溝、落ち込み模式図 …… 26

第17図　４号溝最深レベル値模式図 …… 27

第18図　４号溝実測図（Ｓ＝1/400） …… 27

第19図　落ち込み実測図（Ｓ＝1/400） …… 28

第20図　掘立柱建物実測図（Ｓ＝1/50） …… 28

第21図　珠洲、越前、加賀実測図（Ｓ＝1/3） …… 30

第22図　青磁、白磁、瀬戸・美濃、土師質土器、肥前陶磁他実測図（Ｓ＝1/3） …… 33

第23図　須恵器実測図（Ｓ＝1/3） …… 35

第24図　３号溝最下層出土土器実測図（Ｓ＝1/3） …… 36

第25図　落ち込み下層出土土器実測図（Ｓ＝1/3） …… 42

第26図　落ち込み下層、上層、及び包含層出土土器実測図（Ｓ＝1/3） …… 43

第27図　土錘、砥石、瓦、銭貨実測図（Ｓ＝1/3、銭貨2/3） …… 45

第28図　トチノキ、オニグルミの果実・核法量分布図 …… 51

第29図　落ち込み埋没過程予想図（第１期→第２期途中→第２期～第４期） …… 55

表　目　次

頁
第１表　周辺遺跡地名表 …… 5・6
第２表　土錘計測表（ａ≧ｂ） …… 45
第３表　採集樹木一覧表 …… 49・50
第４表　採集種子一覧表 …… 52・53

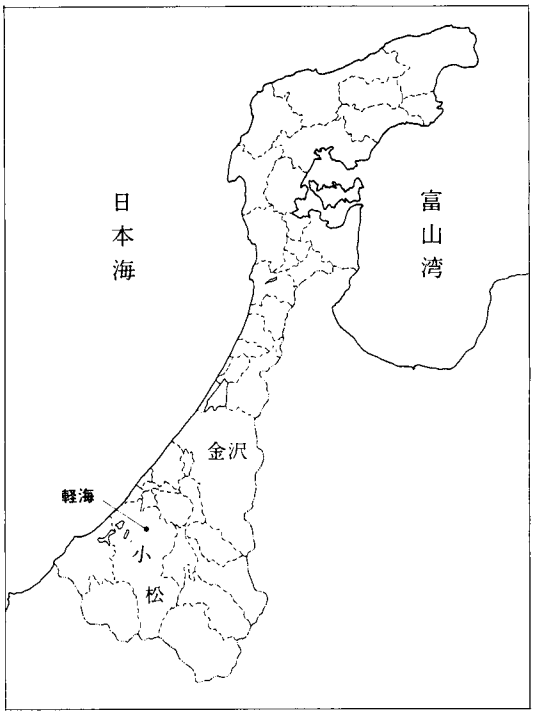
図　版　目　次

図版 1　軽海遺跡全景（上）　軽海遺跡樹木出土状況（下）
図版 2　遺跡周辺の航空写真①（昭和45年８月23日撮影）
図版 3　遺跡周辺の航空写真②（昭和59年10月27日撮影）
図版 4　ＥＷ第１トレンチ土層断面（上）　ＮＳ第３トレンチ検出遺構（下）
図版 5　ＥＷ第３トレンチ、ＥＷ第３トレンチ２・３・４号溝
図版 6　出土土器（第９図）　出土瓦片（第９図）
図版 7　調査前全景（上）　掘立柱建物（下）
図版 8　１号溝、２号溝、３号溝、４号溝樹木（クリ）出土状況
図版 9　２号溝土層断面（上）　３号溝土層断面（中）　４号溝土層断面（下）
図版10　手捏ね土器、甑形土器、甕形土器、須恵器出土状況
図版11　４号溝樹木出土状況（上）　種子（下）
図版12　出土土器（第21・22図）
図版13　出土土器（第22図）
図版14　出土土器（第23図）
図版15　出土土器、石器、銭貨（第23・27図）　ａ・緑釉陶器、ｂ・ｃ・フイゴ羽口
図版16　出土土器（第24・25図）
図版17　出土土器（第25・26図）
図版18　出土土器（第26図）
図版19～24　樹木試料顕微鏡写真

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1．位置と地理的環境

軽海遺跡は小松市北部に位置する新興住宅団地、小松市西軽海町地内に所在する。北部には、北陸鉄道小松線、主要地方道小松下吉野線が並行して走り、軽海町と西軽海町の中間付近で、南下してきた加賀産業開発道路と接続する。また遺跡北には梯川を取り入れ口とする軽海用水が西流し、南には雇用促進住宅団地２棟が並び建つ。昭和45年には、西軽海団地の宅地造成事業が始まるが年を同じくして、尾小屋鉱山の廃坑から流出したカドミウムによる土壌汚染問題が、三谷川、郷谷川、梯川流域地区において深刻化してきている。小松市東部の尾小屋鉱山の鉱石採掘は、安永元年（1772年）加賀藩管轄下の金平金山において本格的に始まる。続いて明治14年に横山鉱業部、昭和７年に日本鉱業に継承され、一時活況を呈したこともあったが、同47年３月あとを受けた北陸鉱山の手によって鉱業権が放棄されている。その後、昭和52年度より本遺跡の調査原因ともなる県を主体とした土地改良事業が実施されている。



第１図　軽海町の位置

さて軽海遺跡を考える上での地理的要因としては、(1)梯川、(2)能美・江沼丘陵、(3)小松・江沼平野の３点が挙げられよう。大日山のふもと二ノ原山に端を発した梯川は、加賀山地、能美山地、能美・江沼丘陵を北上する。そして中海町北端の軽海新橋近くで滓上川と合流し、軽海町、荒木田町、西軽海町を内側に抱き込むような形で大きく西に進路を変える。流路を西にとった梯川は速度を落としながら千代町で鍋谷川と合流し、小松平野、海岸砂丘をぬけて安宅町で日本海に注ぎ、約50kmの流程を終える。また遺跡の背後に連なる100m～200mの緩やかな山々は第四紀更新世中期に火山活動を伴った土地の隆起、浸蝕によって形成された砂礫質の能美・江沼丘陵であり、山代、那谷から八幡、軽海を経て辰口、鶴来へと続いている。完新世（沖積世）になると海面水準は現在より５m近くも上昇し（縄文海進期）、軽海をはじめとする低地部分は、沖合いで発達した沿岸砂丘と、能美・江沼丘陵とに挟まれた入江状の潟湖を形成する。川は土砂を運び、潟湖は次第に浅くなる。そして県下第１の手取川は典型的な扇状地を形作り、その南では当軽海遺跡の立地する潟埋積平野としての小松・江沼平野が梯川によって形成されていった。河北潟、加賀三湖（今江潟、木場潟、柴山潟）などは当時の潟湖の名残りである。

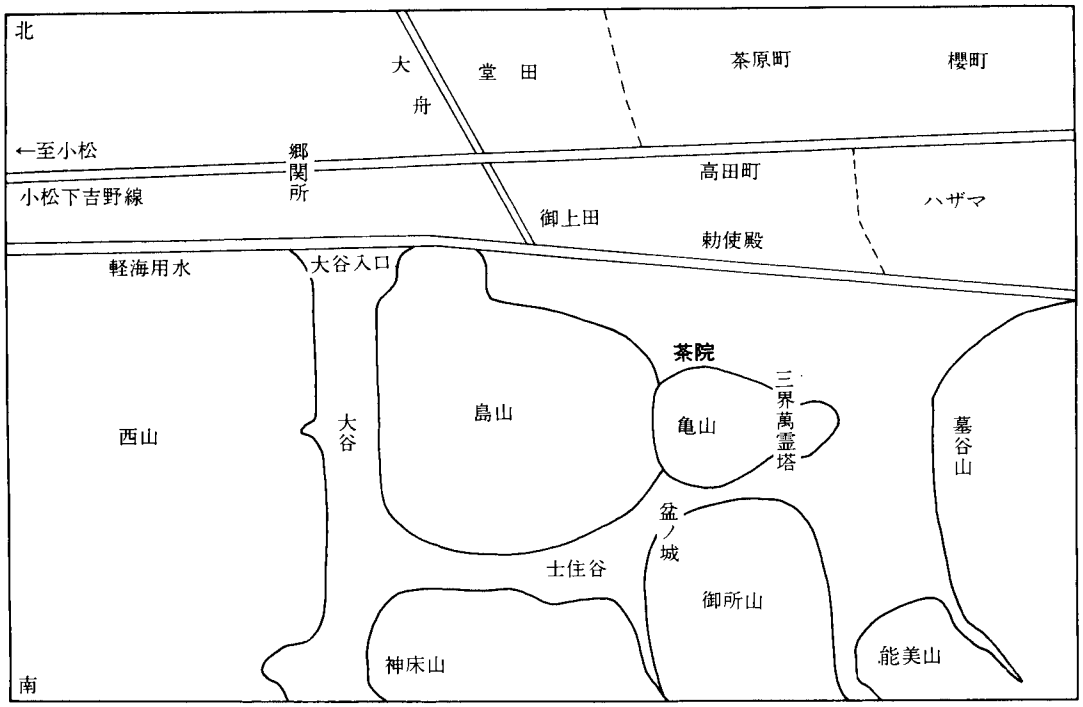
2．歴史的環境

本遺跡は前述の通り、完新世の潟埋積平野上に立地しており、周辺の遺跡も、能美丘陵ぞいと梯川中・下流域に集中している。

軽海地区周辺に人が住み始めるのは、縄文中期頃からであり、まず本遺跡東0.2kmに位置する軽海西芳寺遺跡(第3図・第1表8一以下番号のみ)を挙げることができる。丘陵裾部には石組炉を持つ竪穴住居址1棟の他、土坑多数が検出されており、墓地跡と推定されている。出土遺物は、縄文時代中期後葉に位置づけられる。滓上川の右岸には同じ縄文時代中期後葉の大杉谷式土器を主体とする中海遺跡(15)が所在する。中でも調査区中央で検出された幅11m、深さ1mの大型溝は注目されるもので、居住区区画のための溝と考えられている。

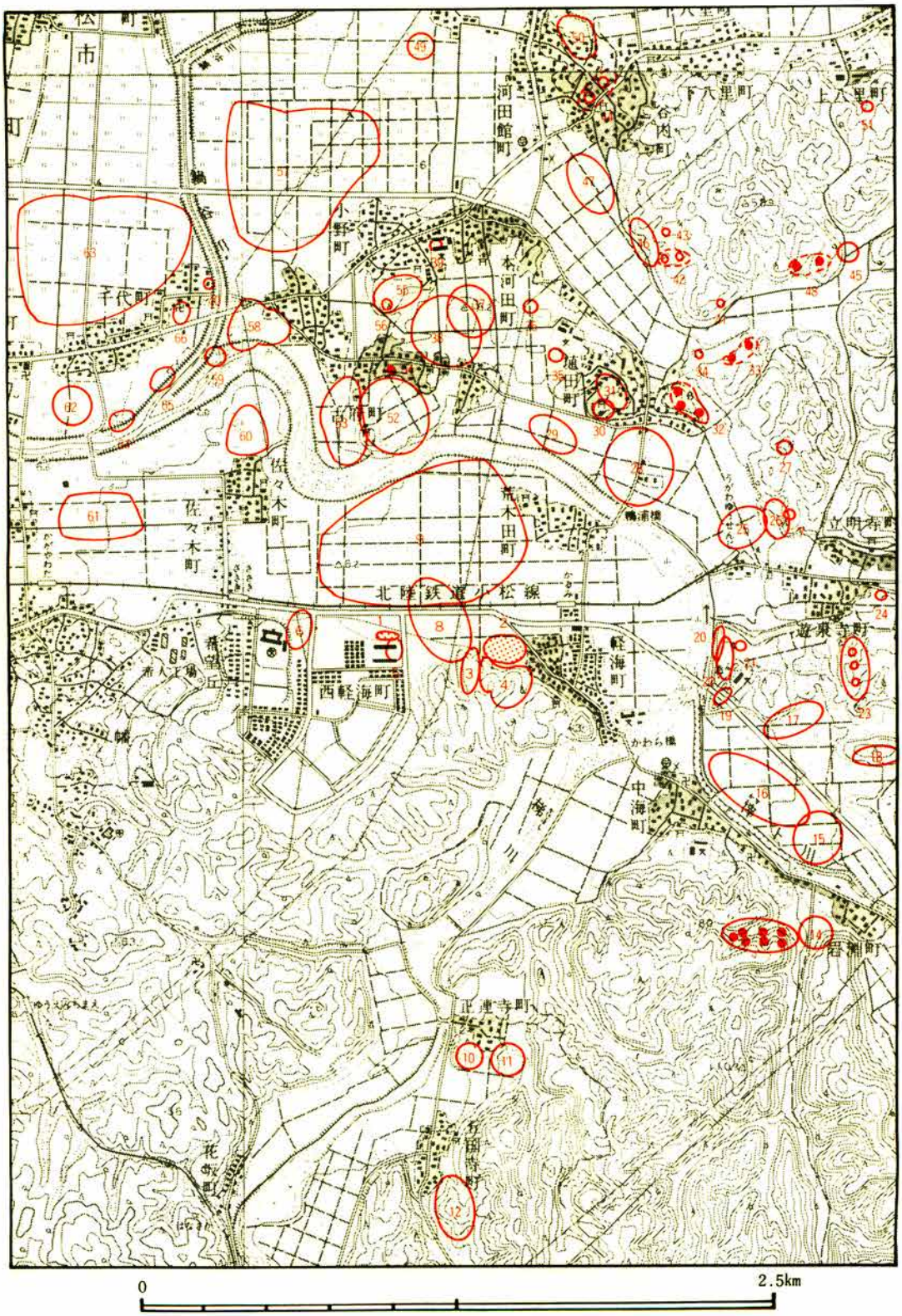
本遺跡背後には、通称「ガメ山」と呼ばれる亀の形をした小丘がある。明治42年の耕地整理に伴う土取り作業の際、亀の首に当たる部分より人骨が発見されており、現在はその場所に三界萬霊塔と刻まれた石碑が供養のために建てられている。大正3年にはシジミ貝等が掘り出された記録もあるが[1]、貝塚としての確認はされていない。昭和46年には、「ガメ山」の胴体部で亀山玉造遺跡(5)の発掘調査が小松市立博物館によって行われている。これは軽海団地造成工事に伴うもので、古墳時代前期（4世紀～5世紀）の住居跡数基が確認されている。遺跡からは玉の原石が多量に出土しており、県内でも数少ない玉造り遺跡として現在では、亀山史跡児童公園として復元保存されている。この「ガメ山」は地元では前方後円墳として認識されており、高さ26cmほどのカマド形土器もここから見つかっている[2]。また西0.4kmには、亀山玉造遺跡と同じように、軽海団地造成の際調査された大谷口遺跡(6)がある。時期は弥生時代後期であり、トチ、クルミが多量に出土している。

平安時代にはいると軽海周辺は集落跡、寺院跡が目立って増えてくる。本遺跡北2kmの古府台地を中心として加賀国府、国分寺が所在していたとされており、漆町遺跡、シノマチ遺跡(57)からは、数多くの墨書土器、緑・灰釉陶器が出土している。軽海の名はこのころより、古文書等に登場するようになり、承平5年(935年）源順によって著された『和名類聚抄』には、軽海（加流美、加留美）は加賀国能美郡五郷の1つとして記されている。（五郷とは軽海、野身、山上、山下、兎橋)。また平安時代も終わりの12世紀に成立したとされる『白山之記』によると軽海郷は加賀馬場に設けられた中宮三社（中宮、佐羅、別宮）内の中宮の支配下にあり、中宮の末寺であるいわゆる中宮八院（護国寺、昌隆寺、松谷寺、蓮華寺、善興寺、長寛寺、隆明寺、涌泉寺）のうちの7か寺が郷内に建てられていたとされる。本遺跡周辺には、東に西芳寺遺跡(2)、軽海廃寺跡(4)、仏生寺跡(22)、隆明寺跡(7)、涌泉寺跡(24)、南に善興寺跡、護国寺跡(11)、松谷寺跡(12)が所在し、その面影を残している。当時の白山宮衆徒の結束は固く、平安末期には中央政界も巻き込む安元事件を起こしている。安元2年（1176年)、中宮八院の1つ涌泉寺を舞台にした加賀守近藤師高の目代である弟の近藤師経と僧兵たちとの抗争は、延暦寺をも加えた加賀馬場中宮三社衆徒の京都への大強訴へと引き継がれ、遂には、師高、師経を屈服させている。この白山宮徒の力を見せつけた事件は『平家物語』、『源平盛衰記』の中にも語られている。



第２図　西軽海団地造成前の略図（『軽海町史』より　一部加筆）

中世での軽海郷は、武蔵国金沢称名寺領として知られている。称名寺は現在の横浜市金沢地区にあり、文永６年（1269年）、北条実時によって建立されている。境内には金沢文庫があり、軽海郷に関しての文書も数多く残っている。軽海郷が称名寺領であったのは嘉暦４年（1329年）から康暦２年（1380年）までの約50年間であるが、その間も領地境の問題などで白山宮との対立抗争が続いている。これは白山宮内の武士団勢力の動きを反映しているものであり、白山勢力の顕著な弱体化を見てとることができる。さて、本遺跡東0.3㎞に位置する軽海中世墓址群(3)は、その築造年代が、軽海郷が称名寺領となった時期に大変近いとされる興味深い遺跡である。墓地は斜面をテラス状に切り込んで構築されており、その上に数基の墓址が確認されている。墓址は河原石を並べて形作られ、埋納された火葬骨も見つかっている。遺物は、珠洲、加賀、青磁、土師質土器、そして石造遺物としての五輪塔が出土しており、鎌倉末期～室町前期頃に年代の中心が置かれている。なお、その地は現在も墓谷山と呼ばれている。その他周辺の中世墓としては、長寛寺中世墓地(18)、仏生寺塚(21)、埴田塚(27)、十九堂山中世墓跡群(56)などが挙げられる。その後軽海郷は称名寺の手から離れ、問注所刑部少輔長康領、正親町三条家領を経て、大永３年（1523年）、朝延の禁裏御料所となっている。地元にはその名残りであろうか、御所山、茶院、勅使殿、郷関所などの字名が多く目立ち、第２図によると、本遺跡は丁度茶院上に立地していることになる。



第３図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）

第1表　周辺遺跡地名表

No.	枝No.	名称	所在地(通称)	権利	時代	備考
1		**軽海遺跡**	小松市西軽海町	包含地	弥生～近世	昭和60年県教委調査
2		**西芳寺遺跡**	〃　軽海町　(サイホウジ)	寺院跡	平安～近世	昭和54年県教委調査
3		軽海中世墓址群	〃　〃第2号用水山12-5 (墓谷)	墳墓	鎌倉末期～室町初期	範囲2,800㎡
4		軽海廃寺跡	〃　〃　ツ104	寺院跡	平安後期	
5		亀山玉造遺跡	〃　〃　4号1　(ガメ山)	集落跡	古墳前期	昭和46年調査
6		大谷口遺跡	〃　〃　ツ104　(大谷口)	包含地	弥生後期	昭和45年調査
7		隆明寺跡	〃　〃	寺院跡	中世	
8		軽海西芳寺遺跡	小松市軽海町・荒木田町	包含地	縄文～中世	昭和58.59年県教委一部調査
9		荒木田遺跡	小松市荒木田町	〃	〃	
10		椎の木山遺跡	小松市五国寺町　(椎の木山)	〃	縄文	範囲50m×50m
11		護国寺跡	〃　〃　4	寺院跡	平安末期	範囲100m×100m　耕地整理のため破壊
12		松谷寺跡	〃　〃	〃	不詳	
13	1	松の木谷1号古墳	小松市中海町	古墳	古墳	
	2	〃　2号〃	〃　〃	〃	〃	
	3	〃　3号〃	〃　〃	〃	〃	
	4	〃　4号〃	〃　〃	〃	〃	
	5	〃　5号〃	〃　〃	〃	〃	
	6	〃　6号〃	〃　〃	〃	〃	
14		赤穂谷口遺跡	〃　〃　(赤穂谷口)	包含地	縄文	
15		中海遺跡	〃　〃	〃	〃	範囲400m×400m
16		中海B遺跡	〃　〃	〃	古墳～中世	
17		中海C遺跡	〃　〃	〃	平安～中世	
18		長寛寺中世墓跡	〃　〃	墳墓	室町	
19	1	ブッショウジヤマ1号古墳	〃　〃　(ブッショウジヤマ)	古墳	古墳	
	2	〃　2号〃	〃　〃　(　〃　)	〃	〃	
	3	〃　3号〃	〃　〃　(　〃　)	〃	〃	
20		遊泉寺遺跡	小松市遊泉寺町	包含地	縄文	
21		仏生寺塚	〃　〃　(仏生寺跡)	経塚	中世	
22		仏生寺跡	〃　〃	寺院跡	〃	
23	1	宮の奥1号経塚	〃　〃　(宮の奥)	経塚	平安～鎌倉	径6m、高0.48m
	2	〃　2号〃	〃　〃　(　〃　)	〃	〃	径7m、高0.67m
	3	〃　3号〃	〃　〃　(　〃　)	〃	〃	径7m、高0.67m
24		涌泉寺跡	〃　〃　(寺屋敷)	寺院跡	平安初期	
25		涌泉寺クボタA遺跡	〃　〃　(クボタ)	包含地	平安～中世	
26		涌泉寺クボタB遺跡	〃　〃　(　〃　)	〃	〃	
27		埴田塚	小松市埴田町	塚	中世？	径11.0m、高0.5m
28		埴田遺跡	〃　〃	包含地	奈良～平安	
29		埴田ウラムキ遺跡	〃　〃　(ウラムキ)	〃	平安～中世	
30		埴田フルカワ遺跡	〃　〃　(フルカワ)	〃	古墳	古墳？
31		宮谷寺屋敷跡	〃　〃　H03　(宮谷)	〃	縄文・室町	範囲6,000㎡
32	1	後山明神1号古墳	〃　〃　ト103　(　〃　)	古墳	古墳	円墳、農道造成のため破壊
	2	後山明神2号古墳	〃　〃　(　〃　)	〃	〃	円墳
	3	埴田ムジョウドウ古墳	〃　〃　(ムジョウドウ)	〃	〃	円墳、粘土槨の施設を伴う 昭和57年市教委調査

No.	枝No.	名称	所在地（通称）	種別	時代	備考
33	1	埴田山1号古墳	小松市埴田町（埴田山）	古墳	古墳	円墳
	2	〃 2号 〃	〃 〃（〃）	〃	〃	〃
34		御菩提所古墳	〃ト415 417 418 425（オボダイジョ）	〃	〃	円墳、径10m、高さ3m
35		埴田ミヤンタン遺跡	〃 〃（ミヤンタン）	包含地	不詳	
36		埴田ミヤノケ遺跡	〃 〃（ミヤノケ）	〃	〃	
37		小野スギノキ遺跡	小松市小野町（スギノキ）	〃	平安～中世	
38		小野遺跡	〃 〃	〃	平安	
39		小野窯跡	〃 〃 成312	窯跡	江戸	範囲8m×20m、近世窯跡、明治9年徳緒（小野）小学校設立のき破壊
40		小野町遺跡	〃 〃	包含地	古墳	
41	1	河田山1号古墳	小松市河田谷内町（河田山）	古墳	〃	前方後方墳
	2	〃 2号 〃	〃 〃（〃）	〃	〃	円墳
	3	〃 3号 〃	〃 〃（〃）	〃	〃	〃
42	1	河田1号横穴	〃 〃	〃	不詳	
	2	〃 2号 〃	〃 〃ワの部（阿古宮）	〃	古墳	墓数等不詳
	3	〃 3号 〃	〃 〃	〃	〃	
43		阿古宮跡	〃 〃ソの部（阿古宮）	寺院跡	不詳	範囲12m×12m
44		谷内横穴	〃 〃チ176	古墳	古墳	高1.8m、奥行2.3m、巾2.0m
45		河田山窯跡	小松市河田町	窯跡	不詳	窯体断面露出
46		河田B遺跡	〃 〃	包含地	奈良	範囲80m×400m
47		河田C遺跡	〃 〃	〃	不詳	
48	1	河田山6号古墳	〃 〃	古墳	古墳	横穴の可能性あり、7世紀初頭
	2	〃 7号 〃	〃 里川町	〃	〃	円墳？
49		下出地割遺跡	小松市河田館町下出（地割）	包含地	縄文中期～中世	
50		河田館遺跡	〃 〃	〃	縄文中期～中世	
51		穴場横穴	小松市上八里町	古墳	古墳	
52	1	南野台遺跡	小松市古府町（南野台）	包含地	縄文中期	範囲10,000m²、耕地整理の際破壊
	2	〃	〃 〃（〃）	〃	古墳	範囲200m×300m
	3	南野台B遺跡	〃 〃	〃	〃	範囲200m×300m
	4	〃	〃 〃（額山）	〃	不詳	範囲200m×300m
53		古府シマ遺跡	〃 〃（シマ）	〃	平安～中世	
54		古府横穴	〃 〃（にか山）	古墳	古墳	
55		十九堂山遺跡	〃 〃（十九堂山）	寺院跡	平安初期	範囲8,000m²
56		十九堂山中世墓跡群	〃 〃（〃）	墳墓	中世	遺構一部消滅
57		シノマチ遺跡	〃 〃	包含地	平安	
58		古府遺跡	〃 〃	〃	平安中期	範囲150m×100m
59		フドンド遺跡	〃 〃（フドンド）	集落跡・経塚	平安	範囲約600m²、白銅鏡は市立博物館に委託保管
60		佐々木A遺跡	小松市佐々木町（アサバタケ）	包含地	弥生～中世	昭和59・60年県教委調査
61		佐々木遺跡	〃 〃	集落跡	平安	
62		千代マエダ遺跡	小松市千代町（マエダ）	包含地	古墳～平安	
63		千代オオキダ遺跡	〃 〃（オオキダ）	〃	奈良～中世	
64		本村遺跡	〃 〃（ドードウ）	〃	古墳	
65		横地遺跡	〃 〃（コマジ）	〃	縄文	
66		千代城跡	〃 〃	城跡	室町	東西36m、南北54m

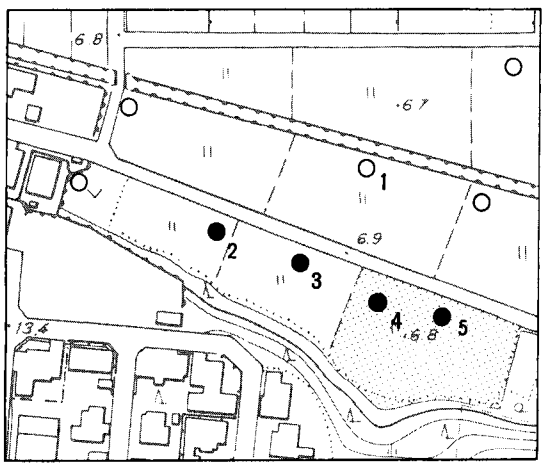
II　調査に至る経緯と経過

1.　調査に至る経緯

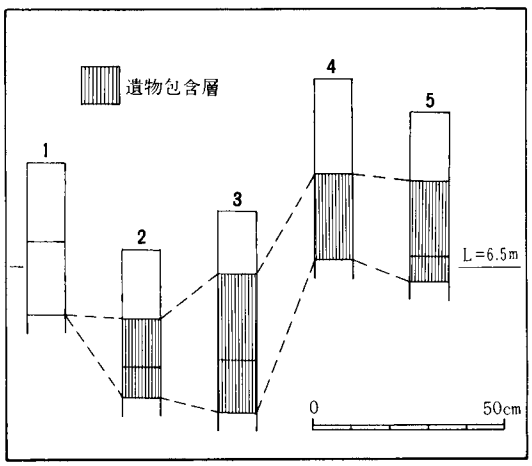
石川県内では、昭和52年度から小松市梯川流域地区において、県農林水産部耕地整備課施行による公害防除特別土地改良事業が実施されている。事業は『鉱山活動の排水に含有された特定有害物質（カドミウム、銅）により、農用地土壌が汚染され、人の健康をそこなう恐れがある農作物が生産され、又はそれらの恐れが著しいと認められる農用地及び農作物の生育阻害の恐れが著しいと認められる農用地に対し、客土を行い、カドミウム汚染米の生産を阻止し、銅地域については減産防止を図り、農家の生産に対する不安解消及び農業生産性の維持を図る。[(3)]』を目的とし、梯川流域の459.7ｈａを対象としている。西芳寺遺跡、軽海遺跡の位置する区域は、区画整理方式、カドミウム対策地区に含まれている。

西芳寺遺跡の試掘調査は、昭和52年９月19日～23日にかけて実施された。この調査は昭和52年８月８日付けで耕地整備課長より出された、埋蔵文化財包蔵地（小松市カドミ関連遺跡）試掘調査依頼を受けて行われたもので、文化財保護課が中心となって実行された。その結果、当該箇所の用排水路部分についてのみ埋蔵文化財に影響があるので、発掘調査を必要とするという結論が得られた。

軽海遺跡の試掘調査は、昭和59年４月23日に実施された。この調査は昭和59年４月16日付けで耕地整備課長より出された、県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区施行予定区域内の埋蔵文化財分布調査依頼を受けて行われたもので、石川県立埋蔵文化財センターが中心となって実行された。調査はカドミ関連事業予定地にバックホーで計17ヶ所の試掘孔を設ける形で行われ、予定地の南側台地縁辺部の水田で遺跡が確認された。遺物包含層は耕土直下から存在し、遺跡の所在する水田の大半が基盤切盛工法（切面レベル約6.5m）であるため発掘調査の必要性が認められた。（第４、５図参照）その後当センターと小松土地改良事務所との協議の結果、遺物包含層、遺構面が工事によって削平される水田一筆の発掘調査を昭和60年度に実施する運びとなった。



第４図　軽海地区試掘調査結果(1)



第５図　軽海地区試掘調査結果(2)

2. 調査の経過（日誌抄）

4月23日(火)　晴

センターで発掘機材の準備を行う。

4月24日(水)　曇時々雨

ツボ掘りによる試掘調査を行う。土は粘土質で水はけは悪い。須恵器等数点の遺物を表採。

4月25日(木)　晴

バックホーによる表土除去作業。表土より採集した遺物は、ほとんどが摩滅している。

4月26日(金)　晴

10m方眼でグリッドを設定し、杭打ち作業を行う。

5月1日(水)　晴

プレハブ設置。包含層、地山を再確認するため数ヶ所のツボ掘りを行う。結局調査区中央部付近での地山面は確認されず。

5月8日(水)　晴

本日より作業員が参加して発掘調査を開始する。A2～D5区まで計19ヶ所のグリッドを設け、中央にベルトコンベアーを配する。上層の灰色包含層から掘削を始めるが遺物の量は少ない。

5月10日(金)　晴

臨時電話設置。A3、B3区より杭列出土。（近代か？）遺物は土師質土器、須恵器が多数を占める。

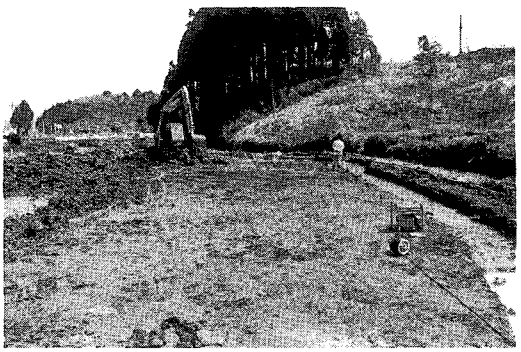
5月13日(月)　曇のち雨

B2、D2区の暗灰褐色土掘り下げ。銅銭、白磁、青磁の破片出土。調査区中央に幅の広い落ち込みを確認する。

5月16日(木)　快晴

久し振りの快晴。排水作業と並行して各グリッドの掘り下げを行う。A3区からB3区の落ち込みに向けて南北方向に溝状の遺構（1号溝）、またC2区からD2区にかけて北西

4/24　試掘調査



4/25　表土除去作業

5/1　プレハブ設置

5/8　発掘作業開始

～南東方向の溝状遺構（３号溝）を検出する。

５月17日(金)　快晴

Ａ２～４区、Ｄ２～４区等の調査区南北端側は地山面まで浅く出土遺物も雑多である。Ｂ４区より緑釉陶器の細破片出土。

５月22日(水)　曇のち晴

Ｃ４区灰色包含層、暗灰褐色包含層の掘り下げ作業。中海中学校の生徒達が見学に来跡。

５月23日(木)　晴

Ｃ５、Ｄ５区地山面までの掘り下げ作業。Ｃ５区からＣ４区落ち込みへ向かう東西方向の溝状遺構（２号溝）を検出する。

５月24日(金)　曇のち雨

Ｄ２～５区遺構検出作業。Ｄ５区セクションベルト取りはずしの際、地山直上より墨書土器（「尚」と読める）出土。

５月27日(月)～28日(火)　晴

Ａ２～４区、Ｂ２～４区遺構検出作業。バックホーとダンプカーによって６区全域の排土処理及び表土除去作業を行う。

６月１日(土)　晴

午前中、近くの東陵小学校６年１組の生徒達また午後は寺井町郷土史会会員８名が見学のため来跡。

６月３日(月)　晴

Ｂ３、Ｃ３区落ち込み掘り下げ作業。落ち込み中央部に蛇行した溝状遺構（４号溝）が確認される。

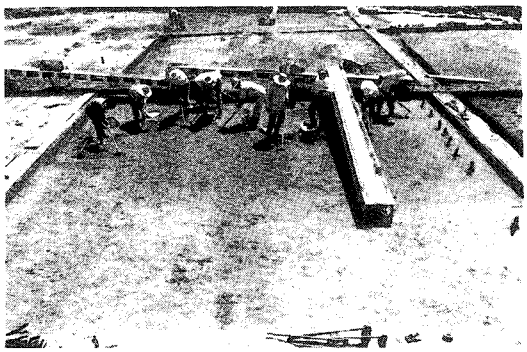
６月４日(火)　晴

４号溝の上層より完形に近い須恵器坏蓋出土。写真撮影及び1/10で実測行う。

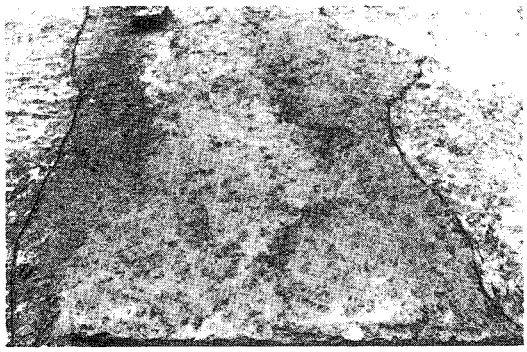
６月５日(水)　晴

Ｂ４区、Ｃ４、５区落ち込み掘り下げ作業。４号溝の輪郭が徐々に見えてくる。Ｂ４区南側より墨書土器（「大」と読める）出土。

６月７日(金)　曇時々晴

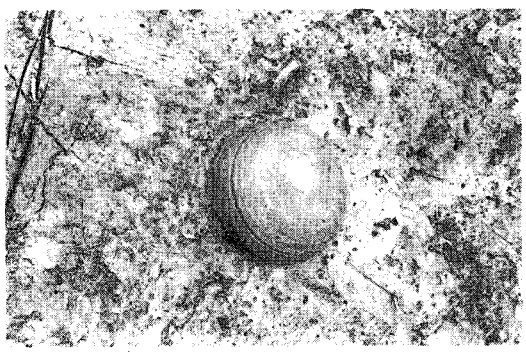


5/16　１号溝、落ち込み検出作業



5/24　３号溝平面プラン

5/28　排土、表土除去作業



6/4　坏蓋出土状況

Ｂ４、５区、Ｃ４区落ち込み、４号溝上層の掘り下げ作業。４号溝の上面には大型植物遺体がほぼ南北方向に溝の流れを止める形で多量に横たわっている。全景写真撮影

６月10日(月)　晴

各セクションの断面実測及び色調記入の継続（調査終了時まで続く)。Ｂ５区４号溝の上層より古墳時代の土師器と思われる遺物が比較的多く出土する。

６月14日(金)　曇時々雨

Ｃ６区で待望の柱穴を検出。本調査初出。

６月17日(月)～18日(火)　晴時々曇

バックホーとダンプカーで６区の排土除去作業を行う。平面実測作業の準備を始める。

６月19日(水)　曇

調査区南側丘陵にローリングタワー設置。

６月25日(火)　雨

昨夜の小松の降雨量は149㎜で、調査区はプール状態。必死に排水作業を行う。

６月26日(水)　曇

久し振りに雨が上がり、1/50で平面実測作業を開始する。並行して断面図実測、セクション取りはずしも行う。

６月29日(土)　晴のち雨

全体写真撮影のための調査区清掃作業。午後、ローリングタワー、雇用促進住宅屋上より全景を撮影する。

７月１日(月)　曇時々雨

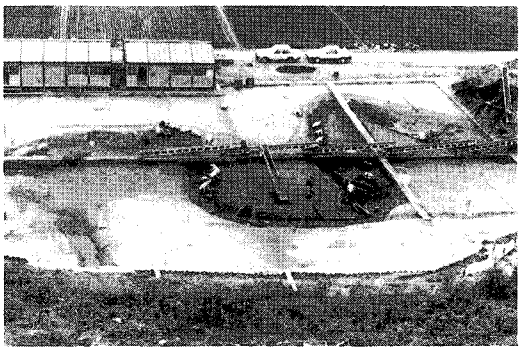
１～４号溝、掘立柱建物等の個別写真を撮影。また一括遺物の写真撮影及び実測、取り上げを行う。

７月４日(木)　雨時々曇

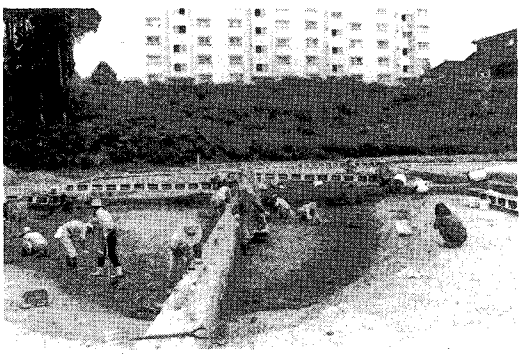
平面実測、レベル記入作業終了。

７月５日(金)　雨のち晴

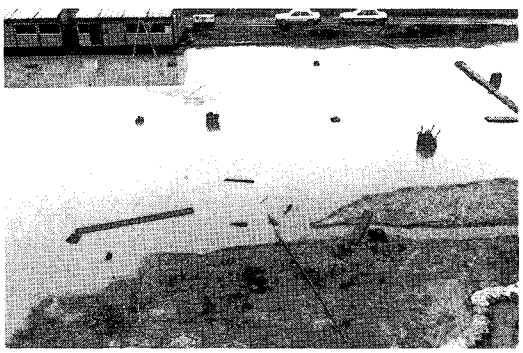
植物遺体のサンプル取り上げ作業。午後発掘機材撤収。本日をもって現地調査を終了する。



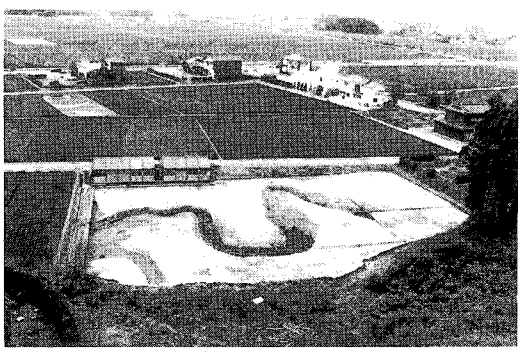
6/7　　４号溝上層発掘作業



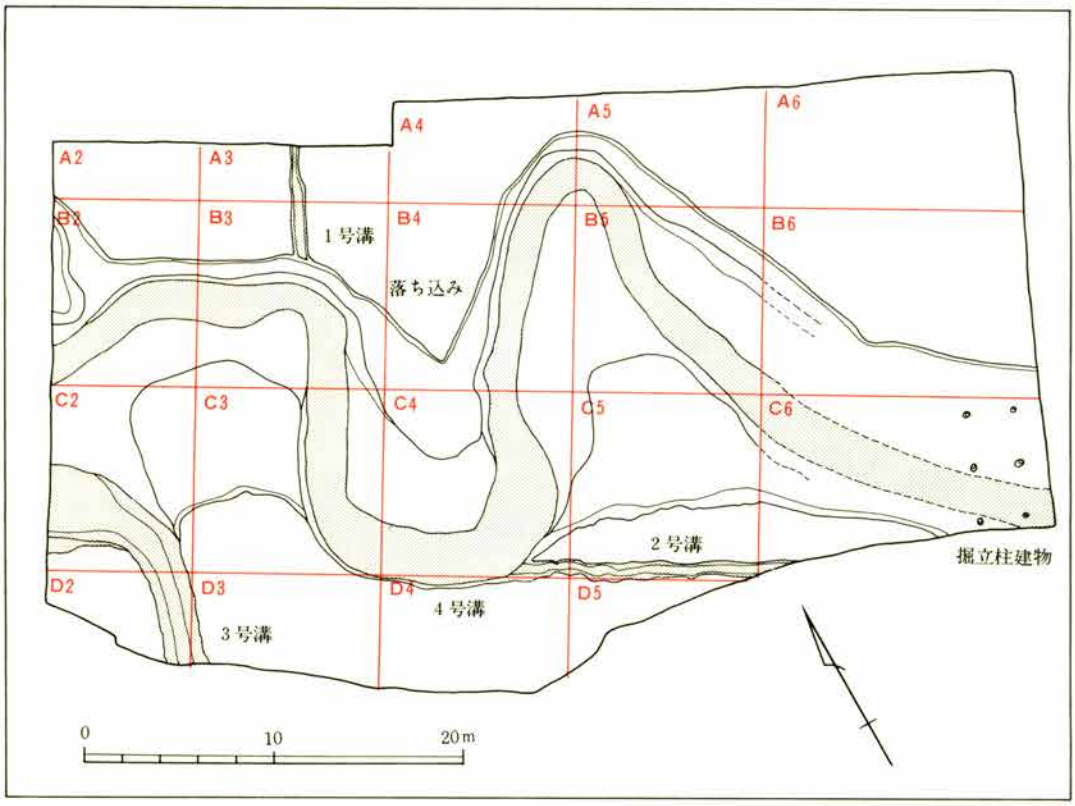
6/10　断面観察作業



6/25　　プール状態



6/29　全　　景



第6図　遺構、グリッド配置図(S＝1/400)

軽海遺跡の発掘調査を進めるにあたって、次の方々の御協力を得た。

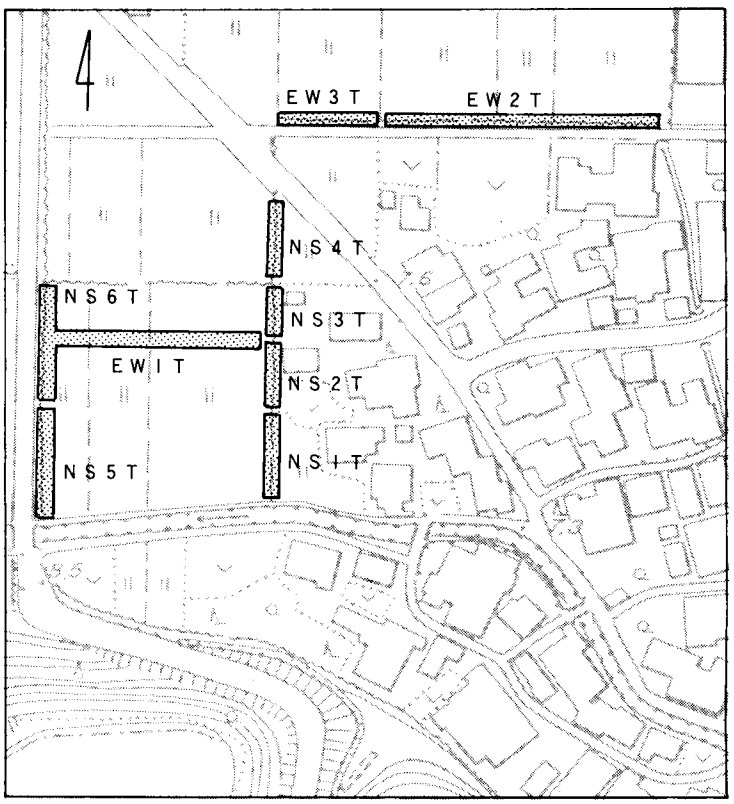
小松市軽海町　・岡本義雄、岡本茂雄、亀田松雄、大田定治、山下定雄、若本裕美子、山内志津子
小松市荒木田町・南他作、南マス子、南俊子、川崎芳子、中田みか、西木戸みか、東出喜美枝
小松市麦口町　・入口利一、田中正三、中西みか、中西寿美子、太田みさを、中村重子
小松市白江町　・加藤久太郎、坂下義男、村田喜作
小松市千木野町・岡本歳雄、山口義隆、長瀬あい子
小松市漆町　　・村中初枝、河南敏子

III　西芳寺遺跡の遺構と遺物

1.　調査地点と調査の概要

昭和54年度の調査対象となった地点は、軽海集落の西方に接する水田地帯である。県道小松・吉野線から分岐して集落の西方間口に通じる道路と、中海中学校の通学路に挟まれた所であり、南方背後には低丘陵が迫り、その裾部には軽海用水が流れている。ちょうど、二辺をなす二本の道路と軽海用水に画された三角形をなす水田域である。調査は、前年度の分布調査の結果と工事設計との検討にもとづき、遺物包含層および遺構の破壊が回避できないと判断された用・排水路敷について実施した。幅２ｍ前後のトレンチを９条設定し、南北軸のものをＮＳトレンチとし、東西軸のものをＥＷトレンチとそれぞれ呼称した。(第７図)

トレンチの大部分では、耕土下約20cmには土器片を含む暗黄褐色粘質土もしくは茶灰色土が認められ、対象区域の広範囲にわたって前代の圃場整備にともなう客土が被覆していた。客土下には、暗灰色を呈する20cm前後の旧耕土が存在し、その直下に黄褐色粘質土の地山をみる部分も少なくない。すなわち、遺物包含層の存在は極めて希薄であって、ＥＷ第１トレンチの東方部と同第３トレンチおよびＮＳ第３トレンチの一部で遺物包含層が残存していたにすぎず、集落方に偏在していることが判明した。遺構については、ＮＳ第３トレンチで土坑４基と溝状遺構１条、ＥＷ第３トレンチで溝状遺構４条を検出した。軽海用水に接するＮＳ第１トレンチおよび同第５トレンチの一部では、客土下約 1.5ｍを掘り下げても青灰色粘質土や近世陶磁器片を含む暗灰色粘質土または黄灰色砂層などが互層しており、特に黄灰色砂層の堆積が50cm以上と著しく、河川流路の様相を呈するものであった。近世・近代にかけて利用された旧軽海用水の流路であろう。この他、ＮＳ第２トレンチでは家屋の建築による攪乱がはなはだしく、Ｎ



第７図　調査地点とトレンチの配置（Ｓ＝1/2,000）

Ｓ第４トレンチでは、はさ木の貯木穴があり、ＥＷ第２トレンチではみるものはなかった。以下、遺構および遺物包含層が確認されたトレンチについて述べることにする。

2.　遺構と遺物

(1)　ＮＳ第３トレンチ

遺構（第８図１　図版４）

トレンチの南方に偏して土坑４基と溝状遺構１条（第１号溝）を検出した。第１号土坑は、全体のプランは不明な深さ10cmの不整形なものであり、第２号土坑は、深さ15～20cmの楕円形プランになると推定されるものである。両土坑は、いずれも黒灰色粘質土を覆土として重複しており切り合い関係も判然としなかった。第３・４土坑は第１号溝の溝底面に検出された土坑である。第３号土坑は、南北軸が約１ｍを測る長方形プランをなすとみられる土坑である。上端から緩やかに落ち込んで坑底面が広く、深さは第１号溝の溝底面から約10cmを測る浅いものである。出土土師器より平安期のものとみられる。第４号土坑は、第３号土坑の東約30cmを隔てて接しており南北軸が1.75ｍで中央坑底面の深さ約20cmを測る。断面形状は緩やかなＵ字状を呈する。第１号溝は、上端の最大幅が1.98ｍを測る深さ約20cmの南北溝である。溝底面と北側の上端は土坑との重複などで不整形であるが、断面形状は緩やかなＵ字状を呈する。

出土遺物（第９図１～４　図版６）

２は１号土坑の覆土より出土した坏とみられる須恵器である。やや厚味の底部は直径８cmを測り、体部へ直線的に立ち上がり、底部と胴部の境は明瞭である。胴部外面にはヘラ削り調整が施されている。３は３号土坑の覆土より出土した土師器無台坏の小片である。底部には糸切り痕を残し、胴部は埦状を呈して内外面とも回転によるナデ調整がされている。胎土は精選されて砂粒を含まない。１と４は包含層中からの出土である。１は甕形土器の口縁部の小片であり、推定口径約53cmを測る。４は底径 6.1cmを測る土師器の有台坏である。磨耗により調整は不明瞭であり胎土は小砂粒を含んでいる。

(2)　ＥＷ第３トレンチ

遺構（第８図２　図版５）

ＥＷ第３トレンチは調査区域の北に設定されたもので、４条の溝状遺構が検出された。本トレンチ東側では、２号溝と３号溝が重複して検出された。２号溝は、上幅約１ｍを測る近代溝であり、３号溝の西半を切って構築されている。断面形状は、上端から緩やかに斜行して比較的ひらたい溝底面に至るＵ字状を呈し、深さは26cmを測る。溝床面からは近代の陶磁器片が出土していることや、包含層を切って客土下に検出されたことから、耕地整理以前の旧水田に伴う用・排水施設と考えられた。３号溝は、先述のように法量は不明である。包含層と同質の暗茶褐色砂質層を覆土としており正確な上端は捉え難いが、断面形状は、溝底面が平たい逆台形を呈し、溝底面からの立ち上がりが明瞭である。溝底レベルは、地形の傾斜にそって北から南へと低くなっている。出土遺物はなかった。４号溝は、トレンチ中央から西側寄りに検出された。上幅 3.4ｍを測るのに対し深さは35cmを測り、比較的浅い大型溝である。黄褐色粗砂層の単純層を覆土としてお

り、比較的流れの早い流路で短期間のうちに堆積したものと思われる。断面形状は、上端から彎曲気味に斜行して溝底面に至る緩やかなU字状を呈し、溝底面からの立ち上がりが明瞭でない。時期については、2号溝と同様の近代のものと考えられた。5号溝は、トレンチの最も西側に検出された南北溝であり、上幅 1.3m、深さ約25cmを測る。断面形状は緩やかに落ち込むU字状を呈し、溝底には約25cm幅の面を有している。溝底レベルより、北から南への地形にそった流路が考えられた。時期比定につながる遺物の出土は、平安後期と推定される土師器や須恵器の小片が若干あったが、図示できるものではなかった。

出土遺物（第9図5　図版6）

EW第3トレンチで、遺構に伴う遺物は微量であり、また小片であることから図示できる資料は得られなかった。5に示した有台坏は、耕土中より出土したものである。底径 7.4cmを測る堅緻なつくりであり、内外面回転によるナデ調整がなされている。奈良期に遡るものではなかろうか。

(3)　EW第1トレンチ

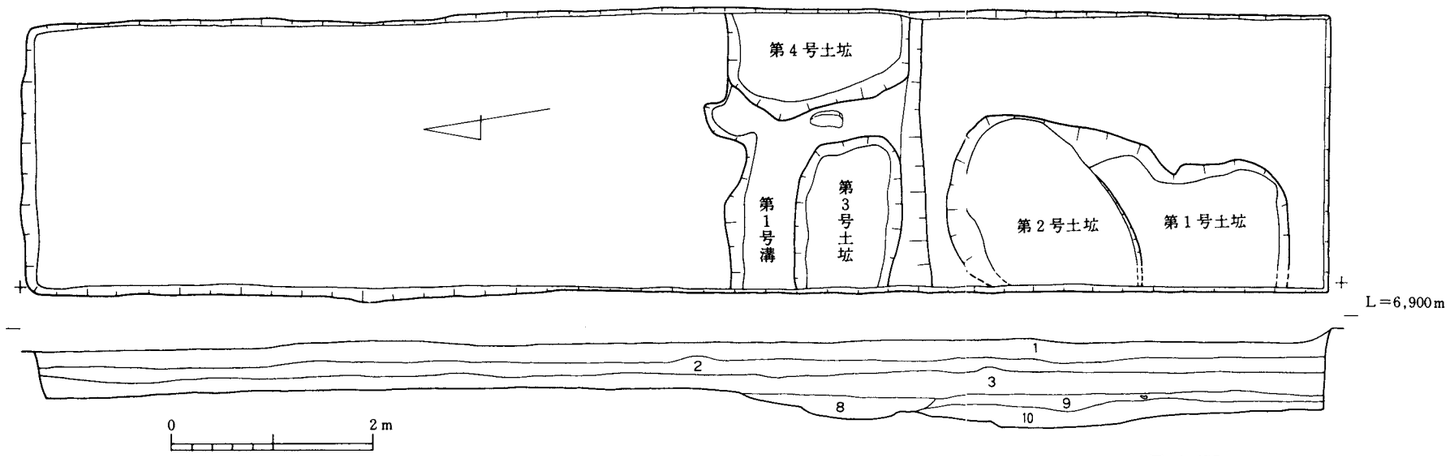
層序（第8図3　図版4）

EW第1トレンチは、調査区域の中央部に設けられた最も長いトレンチであったが、遺構については全く検出されなかった。そこで、本調査区の遺跡状況を適確に把握する参考として、層序について概述しておくことにする。先述のように、耕土下には暗黄褐色を基調とする客土が広く被覆しており、瓦片などの遺物はこの層中より出土したものである。地元古老の話では、その客土は中海中学校から北西に舌状に張り出した丘陵裾部（現在一部墓地）からのものだという。ところで、この東西セクションから、地形が東から西に傾斜していることが判り、東端から約35m付近で地山が急激に下降して変換線を形成している。客土の厚さが西へゆくに従って厚くなるのはその為である。包含層は、東側に確認できたものの遺物含有量は少なく、約5m程で解消してしまった。従って、本調査区は現集落ないしその北側に広がりを有する遺跡の西端付近にあたるものとみられ、また、西に占地にする加賀産業道路付近の遺構群とも鞍部をもって画される可能性が高いといえる。

出土遺物（第9図6～13　図版6）

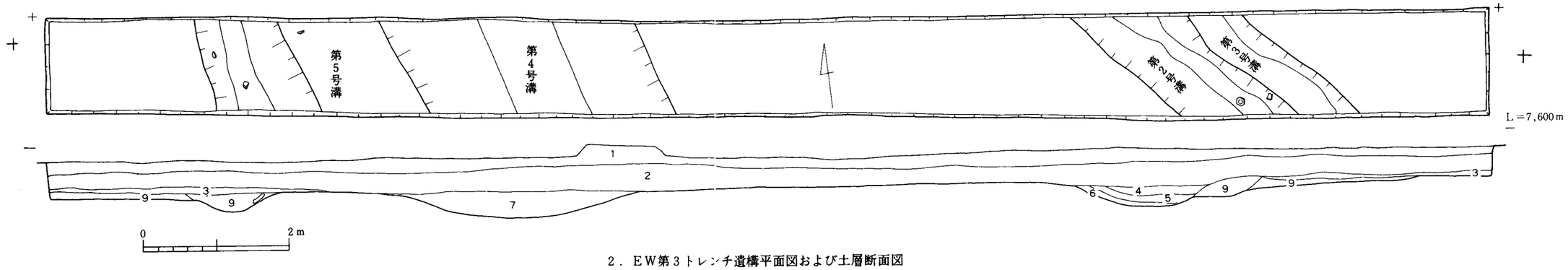
6は底径 6.6cmを測る有台坏である。高台は比較的下方に突き出て安定感があり、体部は内彎気味で埦形をなしており、土師器への形態的同化が窺える。内外面とも回転によるナデが施されている。戸津4号窯の坏・埦類にみる平安後期の所産であろう。7・8は無台坏である。7は口径13.1cm、8は口径11.7cm、器高 7.8cmを測る。いずれも比較的器壁が薄く、器面の凹凸もみられる。6と同様の平安後期のものであろう。9は、底径10.4cmの瓶の底部である。底部からの立ち上がり部分の外面約 1.5cm幅にヘラ削りがなされている。

10・11は丸瓦片である。凹面には荒い布目痕を残し、凸面はナデ調整がなされているものの、縦方向の荒い条線がわずかに残っている。側面は平滑に仕上げられている。12・13は平瓦片である。凹面では丸瓦片に比して目の細かい布目痕を残している。12の凸面は磨耗しているが、縦方向の条線を残しており、13の凸面は荒いハケ状具で斜行する調整痕を残している。

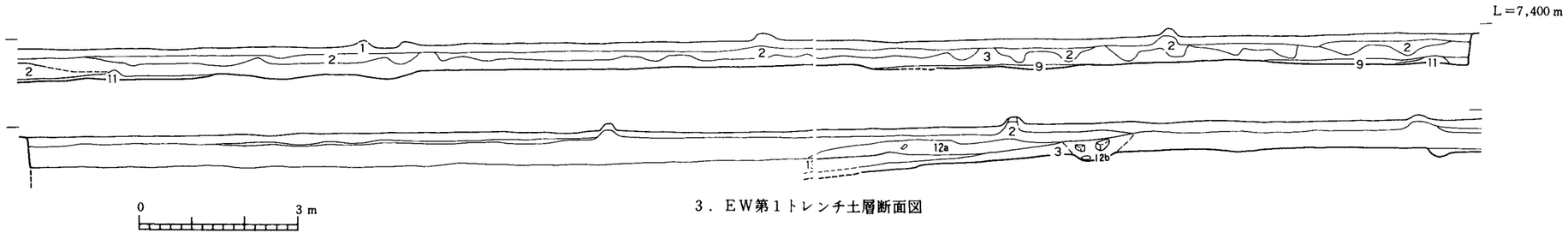


１．ＮＳ第３トレンチ遺構平面図および土層断面図

① 耕　土
② 暗黄褐色粘質土（客土）
③ 暗灰褐色土（旧耕土）
④ 黒灰褐色砂層（②層ブロック含）
⑤ 灰色粗砂層
⑥ 黄褐色砂層
⑦ 黄褐色粗砂層
⑧ 黒色粘質土
⑨ 暗茶褐色土（包含層）
⑩ 黒灰色粘質土
⑪ 黒灰褐色砂質土層
⑫a 暗灰褐色粘土層
⑫b 〃　（有機物含）
⑬ 黄褐色砂質土

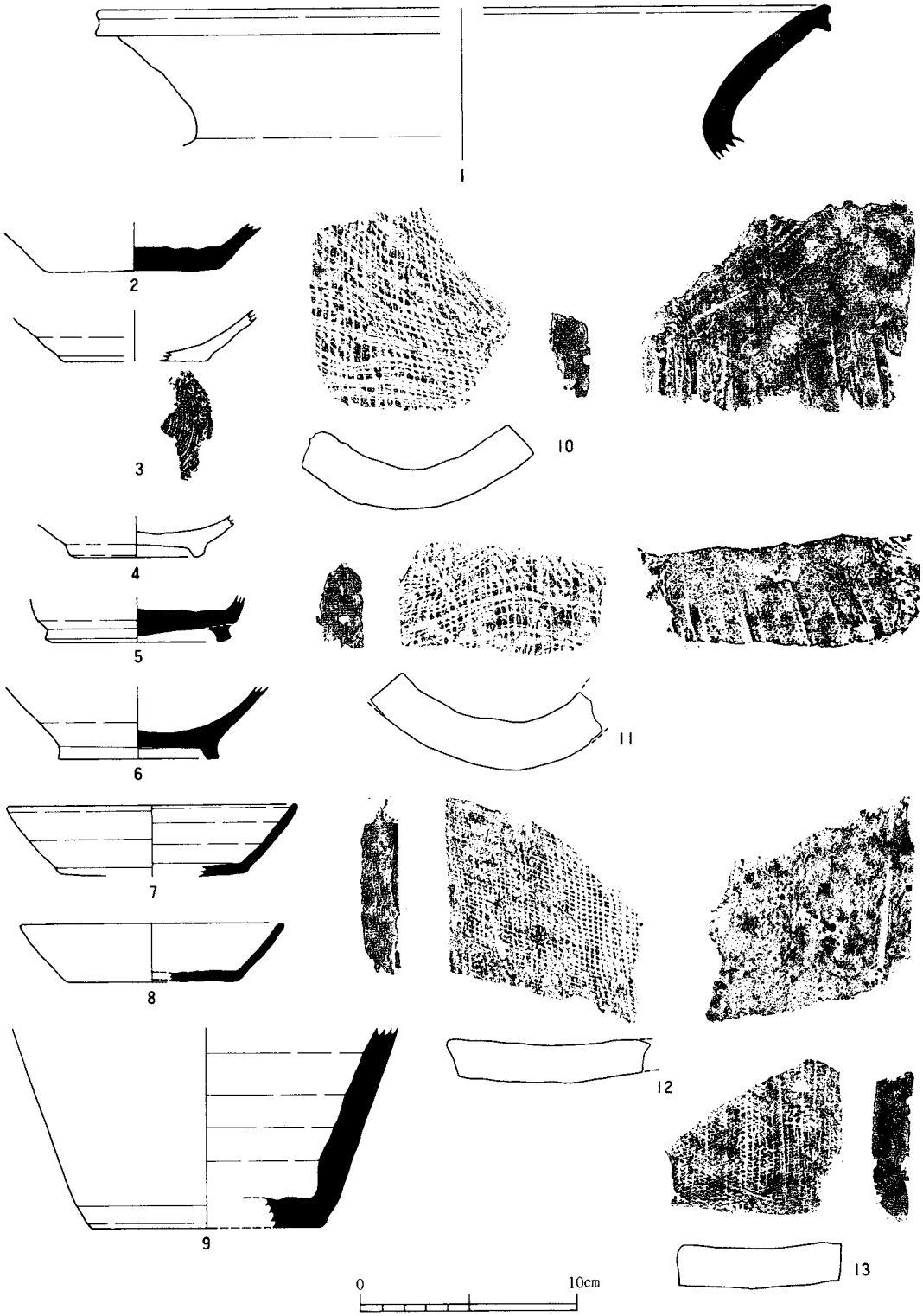


２．ＥＷ第３トレンチ遺構平面図および土層断面図



３．ＥＷ第１トレンチ土層断面図

第８図　西芳寺遺跡遺構平面図および土層断面図



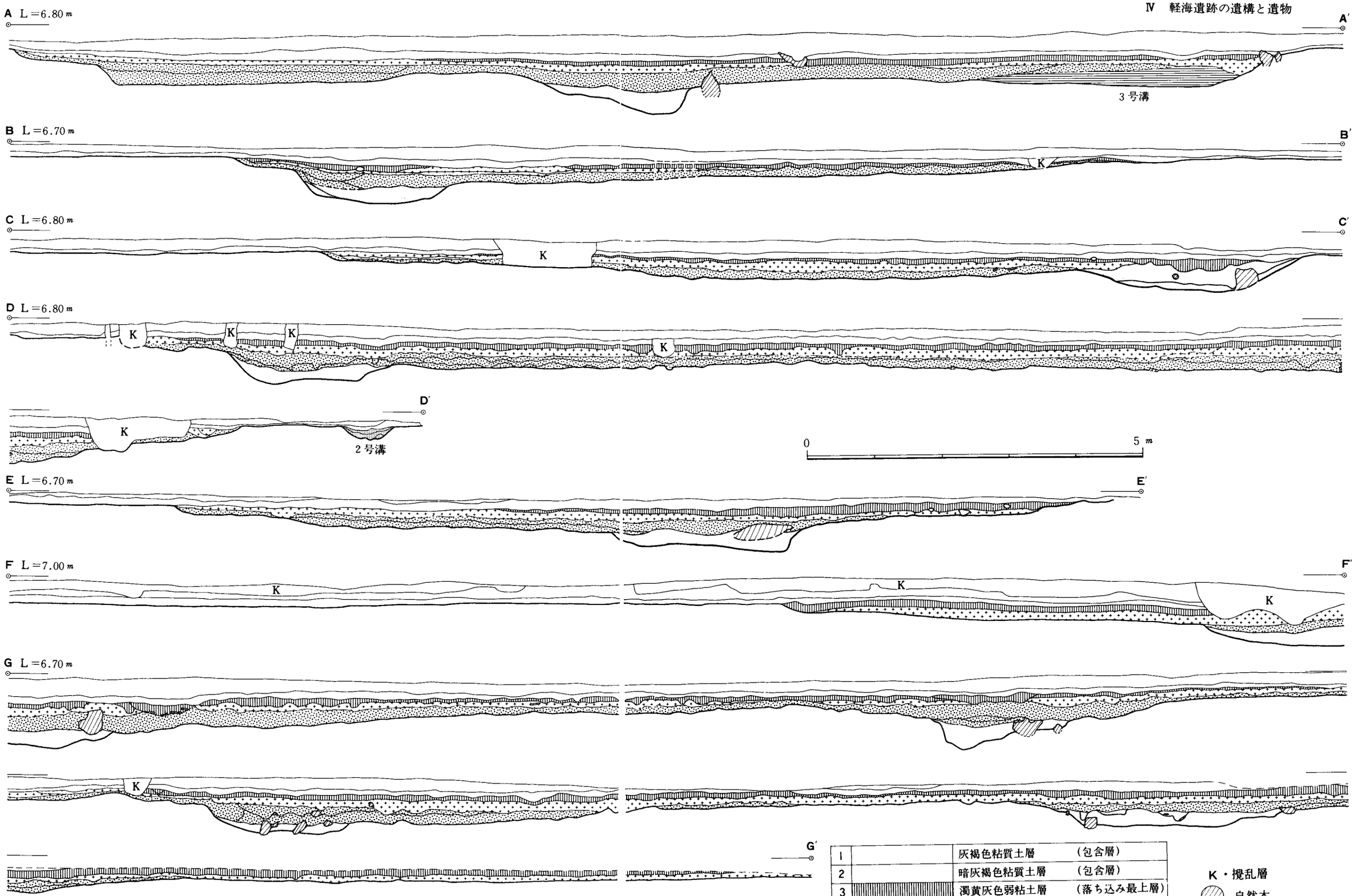
第９図　西芳寺遺跡出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

Ⅳ　軽海遺跡の遺構と遺物

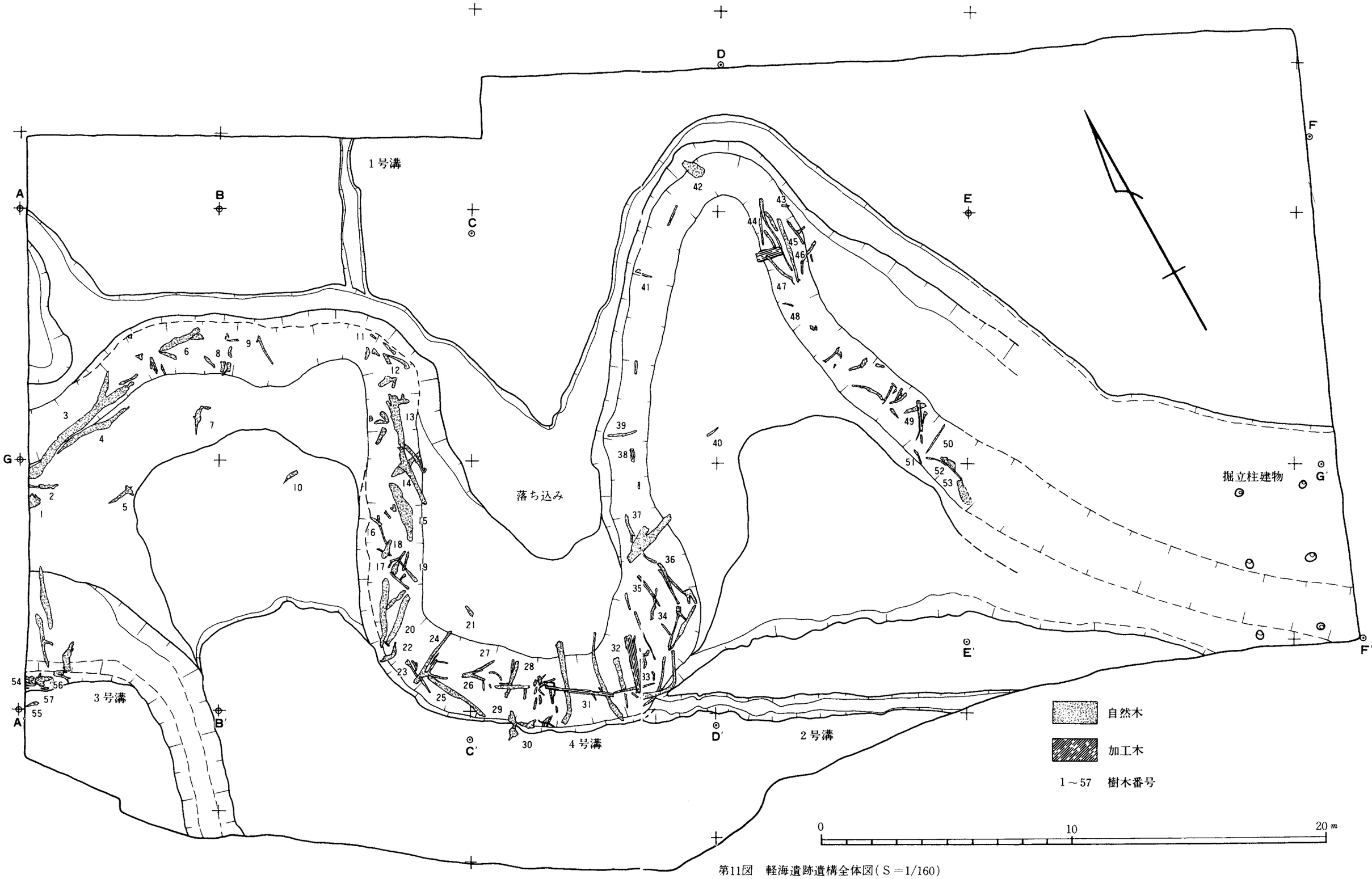
1．概　　要

軽海遺跡の発掘調査は昭和60年４月23日～７月５日にかけて行われた。調査区域の水田は上部10cm～20cmの耕土一部すき取りが終了していたため、バックホーによる20cm前後の表土除去作業によって間もなく包含層を検出することができた。掘り下げに伴う排土は調査区東側の６区に集め、後にダンプカーによって海岸近くの埋めたて用地に運び出す方法を取った。10m四方のメッシュを組んだ調査グリッドは調査区北側を走る農道脇の側溝を基準にしており、Ａ２区～Ｄ６区まで大小19ヶ所を設けた。調査総面積は約1500m²である。また以前水田として利用されていた調査区は緩やかに西に傾斜している他は特別な起伏も見当たらない標高約6.8m前後の平坦地である。

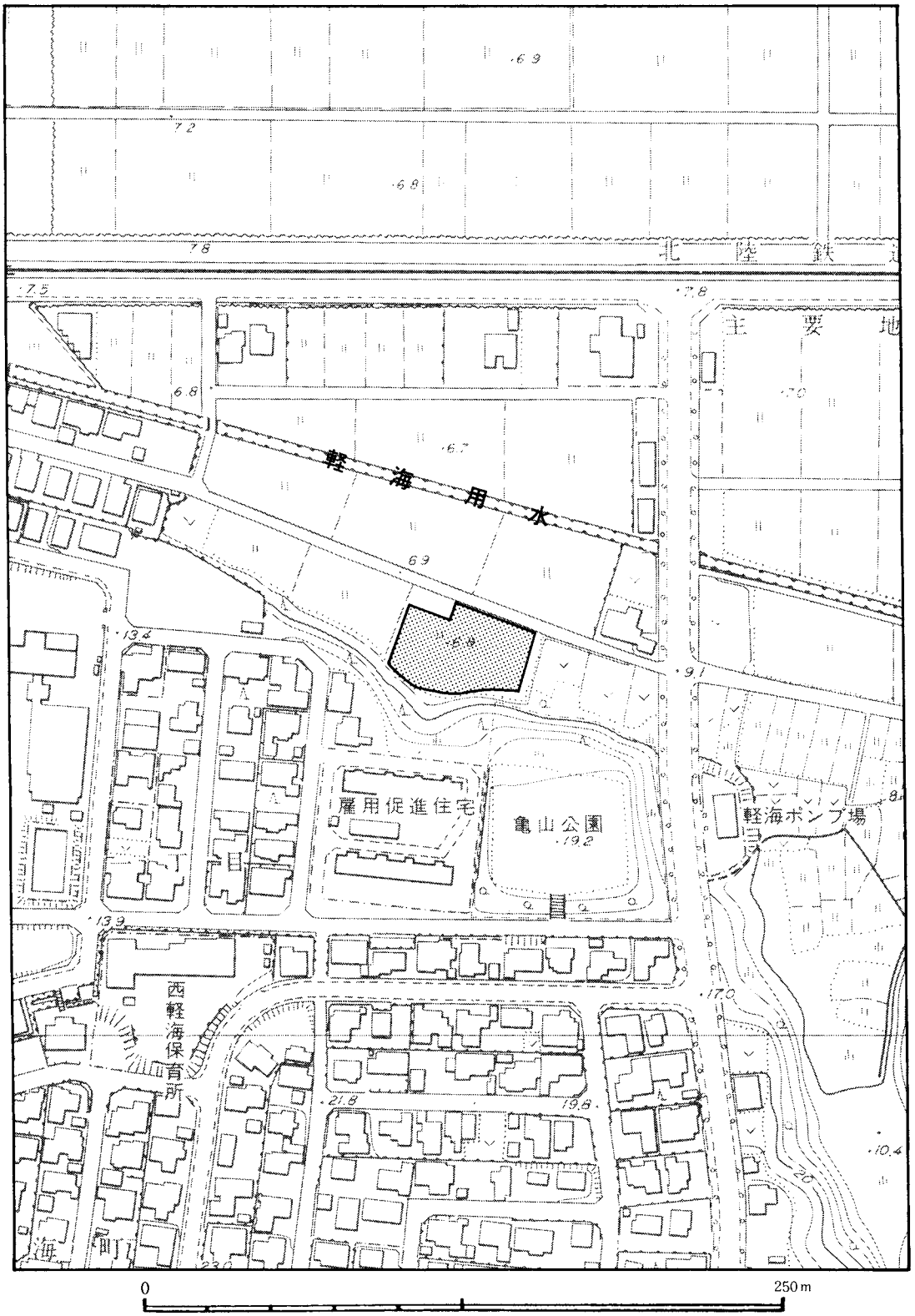
本遺跡の層序は大きく６層に分けられる。１、２層は昭和59年の分布調査の際確認されている包含層で、灰褐色粘質土（１層）、暗灰褐色粘質土（２層）である。土は乾燥すれば移植ゴテの歯もたたず、雨が降ればぬかるんで足を取られるような水はけの悪い土で、遺物の遺存状態は良くない。包含層から出土する遺物は、古式土師器、土師器、須恵器、珠洲、越前、加賀、瀬戸・美濃、中国製青磁・白磁、土師質土器、唐津、染付、瓦、土錘、砥石、銭貨等種々雑多ではあるが、鎌倉、室町時代の中世遺物が中心を占めている。しかし土師質土器等軟質なものは細片が多く、摩耗も著しい。包含層をはずすと、調査区全体を東西に走る幅10m～20mの落ち込みが見えてくる。その落ち込みの最上層に時には途切れながら薄く堆積しているのが３層の濁黄灰色弱粘土である。落ち込み内においては面的な拡がりを持っており、輪郭の不明確な遺構らしきものも検出されている。中世遺物を若干包含するが、３層より下層の４、５、６層からは中世の遺物は確認されておらず、そのため３層は中世の遺構面の一部になる可能性も考えられる。４層は落ち込みの上層である。細分される箇所もあるが、全体に出土する遺物の少ない暗褐色系の粘質土層である。５層は落ち込みの下層である。大きく２層に分かれ古墳時代の遺物を多く出土する。遺物はほとんどが落ち込み北側に集まっており、５世紀～６世紀頃の土師器、須恵器数点を完形品に復元することができた。最後の６層は落ち込み内の最下層で、調査区を大きく南北に蛇行しながら流れる４号溝である。公特事業の切面レベルにかからないため４号溝は上端を確認しただけで完掘はしなかったが、上面からは多量の樹木が検出され、当センターの清水哲広氏によって樹種鑑定が行われた。また４号溝自体も植物遺体の堆積した粘土質のピート層であり、12ヶ所設けたトレンチ内からは遺物の出土はなかった。その他の遺構としては、落ち込みに流れ込むような形でＡ３区、Ｂ３区に１号溝、Ｃ４区～６区、Ｄ４区～６区に２号溝、Ｃ１区、２区、Ｄ２区、３区に３号溝と３本の溝状遺構を確認している。またＣ６区東側には落ち込み全体が埋まった後に建てられたと思われる掘立柱建物１棟が存在する。１～３号溝からの遺物は大変少ないが、３号溝最下層からは法仏期～月影期の資料が数点出土している。掘立柱建物を検出した面は上面がある程度削平されている様子で、ピットは浅く、ピット内からの遺物の出土もない。なお軽海遺跡出土の遺物総量はパンケースに10箱であった。



第10図　調査区土層断面図（S＝1/60）



第11図　軽海遺跡遺構全体図（S＝1/160）



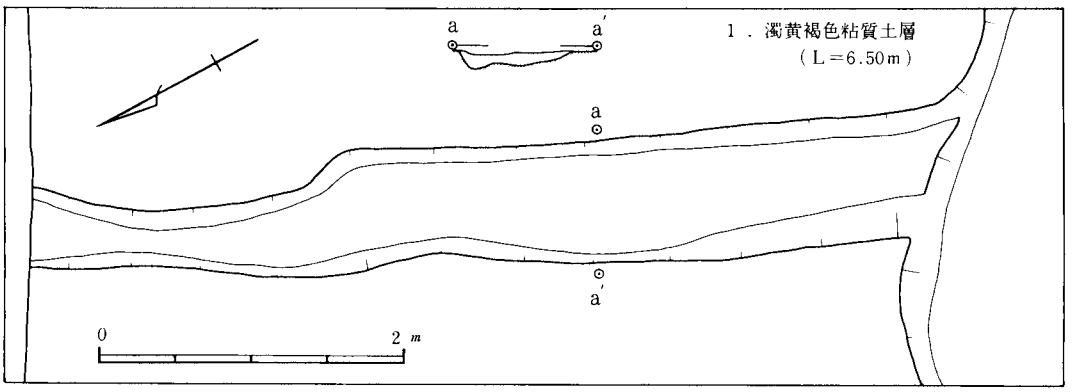
第12図　軽海遺跡周辺図（S＝1/2,500）

2. 遺　　構

(1) 溝状遺構

1号溝（第13図　図版８）

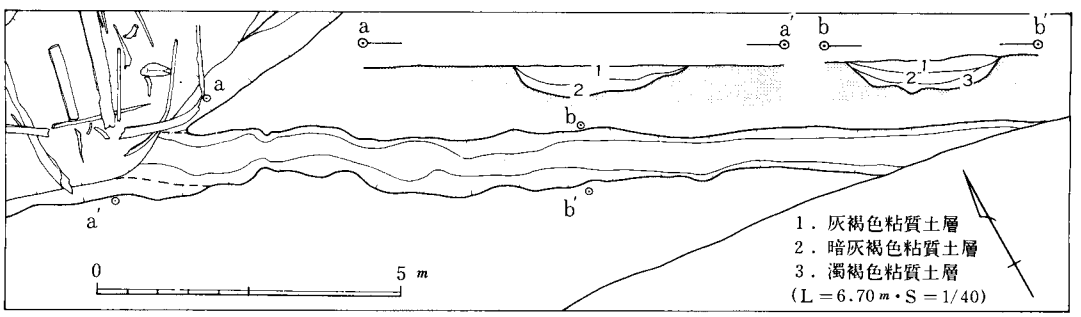
調査区北側から南方へ伸びて、落ち込みと接続する幅70cm、深さ10cm前後の浅い溝状遺構である。覆土は単一の粘土質層で濁黄褐色を呈する。この層が落ち込み最上層の濁黄灰色弱粘土層と酷似している為、落ち込みとの切り合い関係の判定は難しく、落ち込み最上層が埋没した時同時に１号溝もその機能を失ったとも十分に考えられる。またその時は１号溝最深部のレベルが南側に僅かに低い為、落ち込みへ流れ込む形で機能していたのであろう。遺物は摩耗した古式土師器の細片が数点出土している。



第13図　１号溝実測図（S＝1/50）

2号溝（第14図　図版８）

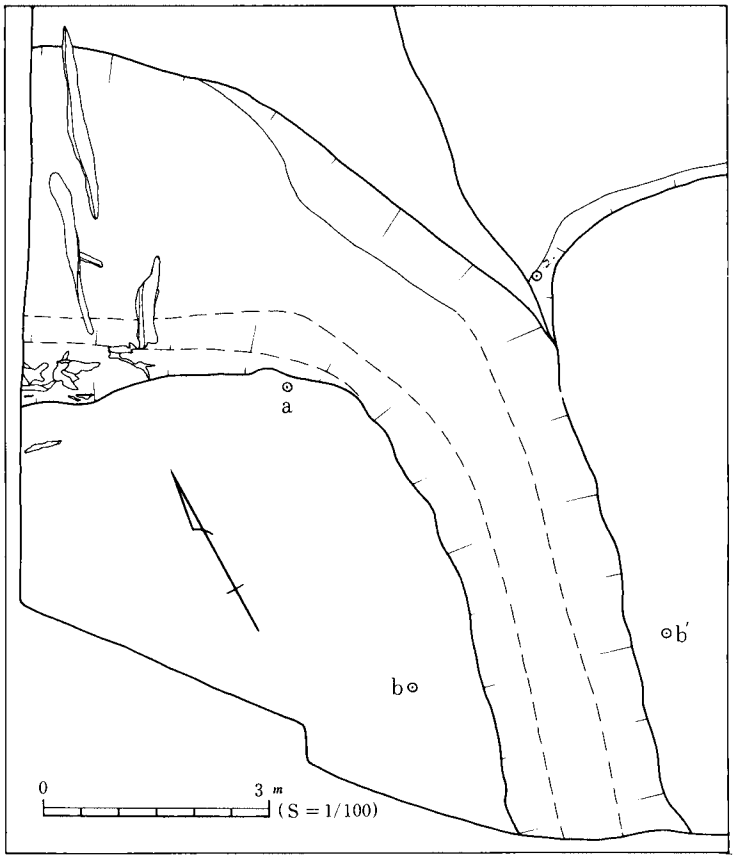
調査区南側を落ち込みに平行する形で東西に走る溝状遺構である。幅70～80cm、深さ10～20cmを測り、西に伸びて行く途中で落ち込みと接続する。覆土は灰褐色系の粘土質である為、落ち込みの上面を西側に伸びて行く３号溝の平面プランはある程度観察できる。上端は落ち込み南側の上端を再利用する形で続いているが、Ｄ４区西側付近で平面プランは途切れ、断面観察でも３号溝のそれ以上の伸びは確認できなかった。最深部のレベルはかなり起伏があるものの西側が僅かに低く３号溝の東から西への流れを推察できる。遺物は摩耗した古式土師器の細片に混じって、加賀の破片が出土しているのが注目される。

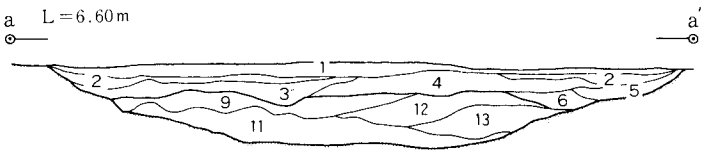


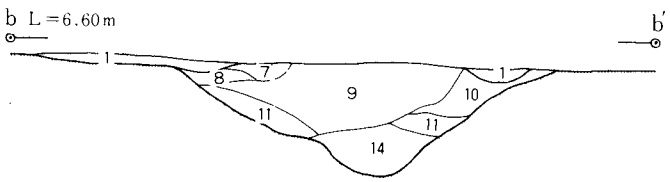
第14図　２号溝実測図（S＝1/125）

3号溝（第15図　図版８）

調査区南西の山際から緩く西にカーブしながら落ち込み方向へ伸びる溝状遺構である。幅は南側で約２ｍ、北へ行くほど徐々に拡がり最大幅で約４ｍを測る。正確な深さは最下層がピート層と砂層の連続層であるため明確に捉える事はできなかったが、結果的に掘り下た深さは50cm～60cmを測る。平面プランは落ち込みにかからない南側は包含層を除去した段階ですぐに検出されたが、北側のプランは落ち込み上層、下層を掘り下げて初めて確認できた。覆土は全体にしまりの弱い砂層であり、北側の落ち込み内では砂が拡散状態を呈している。これは恐らく遺跡後方の山合をぬって流れて来た３号溝が平坦地へ出て拡がったためで、溝の性格を沢的なものと解釈する根拠ともなっている。遺物は西側の溝上面付近に大型樹木が確認でき、溝上層からは摩耗した土器片数点が出土している。また最下層からは法仏期～月影期の比較的まとまった資料が何点か出土しているが、３号溝より下層の別の遺物包含層に付く可能性も考えられる。







0　2 m
(S＝1/40)

1.暗灰褐色粘質土層（包含層）
2.濁黄灰色弱粘土層（落ち込み最上層）
3.褐色粘質土層（全体に砂粒混入）
4.灰黄褐色粘質砂層
5.褐色粘質土層
6.灰褐色粘質土層（全体に砂粒混入）
7.濁灰褐色粘質砂層
8.濁褐色粘質土層
9.濁黄灰色砂層（しまり大変弱い）
10.暗褐色粘質土層
11.濁灰褐色粘質土層（植物遺体混入）
12.青灰砂層（しまり弱い）
13.暗青灰砂層（しまり弱い）
14.濁青灰褐色砂質土層（しまり大変弱い）

７～14　３号溝覆土

第15図　３号溝実測図

4号溝（第17・18図　図版１）

調査区西側の落ち込みを掘り下げていくと幅２ｍ～３ｍの暗褐色の溝状遺構が検出される。その溝はさらに東へ伸び、やがて落ち込み内を南北に大きく屈曲しながら東西に走る４号溝となる。覆土は原則として植物遺体の堆積した粘土質のピート層であり、上面には多量の樹木が散在する。４号溝内での倒木、流木数は調査区南の山際が最も多く、４号溝を塞ぐような形で、ほとんどが根元を南に向けて倒れている。これは山側から何らかの力を受けたためであろう。また本調査は公害防除特別土地改良事業に係るため、事業の切面レベル以下の掘り下げは行わず、従って４号溝も全体の上端を検出するに止め、溝の堆積状況及び流れ等は東西12ヶ所に設けたトレンチの断面観察を行うことによって補った。12ヶ所（ａ～ｌ）で観察した４号溝の最深レベルを結んで模式化したのが第17図である。ａとｌの高低差は約42cmであり、４号溝は現在の軽海地区を流れる川と同じく東から西に向かって流れていたことがわかる。しかし高低差は大きくなく、倒木の多いｅ等はレベルも高く、流れも一段と弱かったのであろう。12ヶ所のトレンチからは種子等の植物遺体は出土するが、土器は確認されていない。

落ち込み（第19図　図版１）

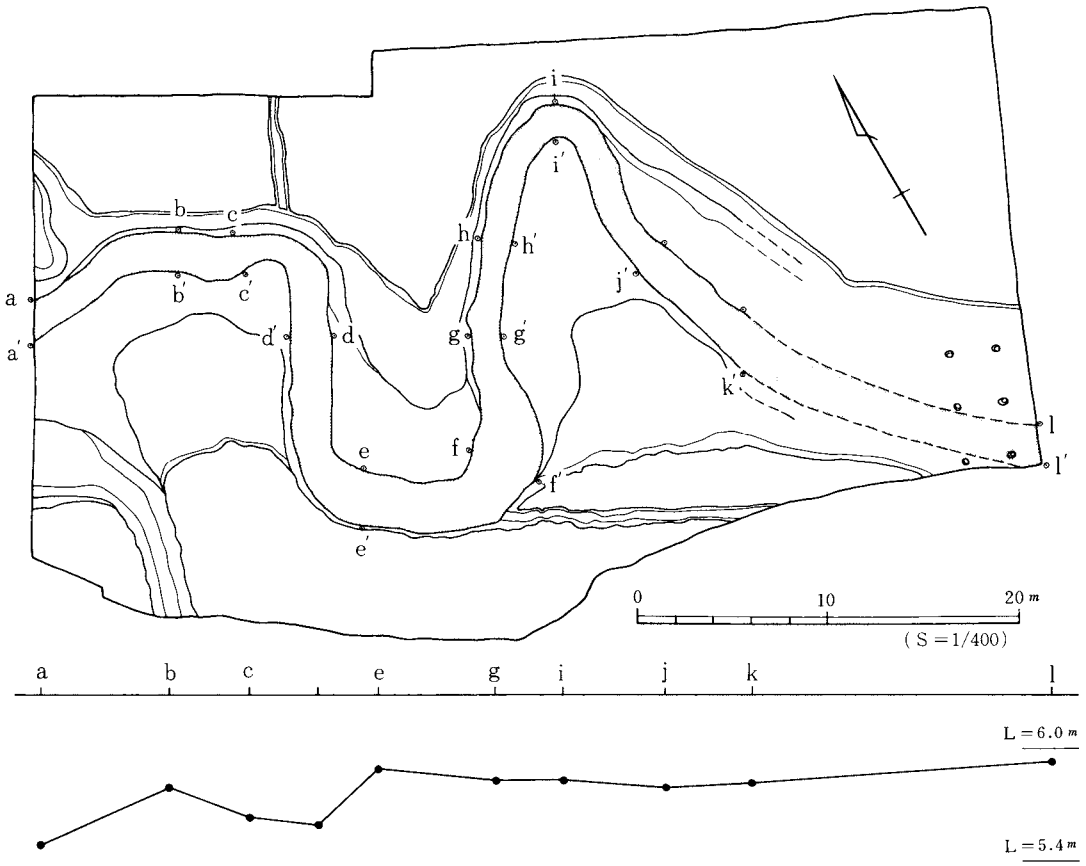
幅10ｍ～20ｍで東西に走る。層序は基本的に３層に分かれ、落ち込み最上層、上層、そして下層となる。最上層は濁黄灰色弱粘土層で５cm～20cmの厚みを持ち落ち込み全体に拡がりを持つ。遺物は珠洲、加賀、土師質土器を出土するが包含量は少ない。この層は厚みにむらが目立つところから、おそらく後世に何らかの原因で上面を削除された残欠層ではないかと見ている。次の上層は灰褐色または暗灰褐色の粘土質から成り、遺物量はやはり少ない。落ち込み全体に拡がり、北側上端付近では細かな植物遺体を含むことが多い。遺物は古式土師器、奈良・平安の須恵器を出土する。下層は４号溝の上層に位置し、２層に分けられる。下層①は濁オリーブ褐色弱粘土層、下層②は淡褐色粘土層であり、特に①層と②層の境からの遺物の出土が目立つ。遺物は古墳時代の土師器、須恵器が主で、ほとんどが落ち込みの北側から出ている。また最深部レベルは４号溝と同じく西側に低く高低差は30cm～40cm程度である。山際を緩やかに、東から西へと流れてれたのであろう。

最　上　層	（濁黄灰色弱粘土層）
上　　層	（暗、灰褐色粘質土層）
下　　層①	（濁オリーヴ褐色弱粘土層）
下　　層②	（淡褐色粘土層）
４　号　溝	（ピート層）

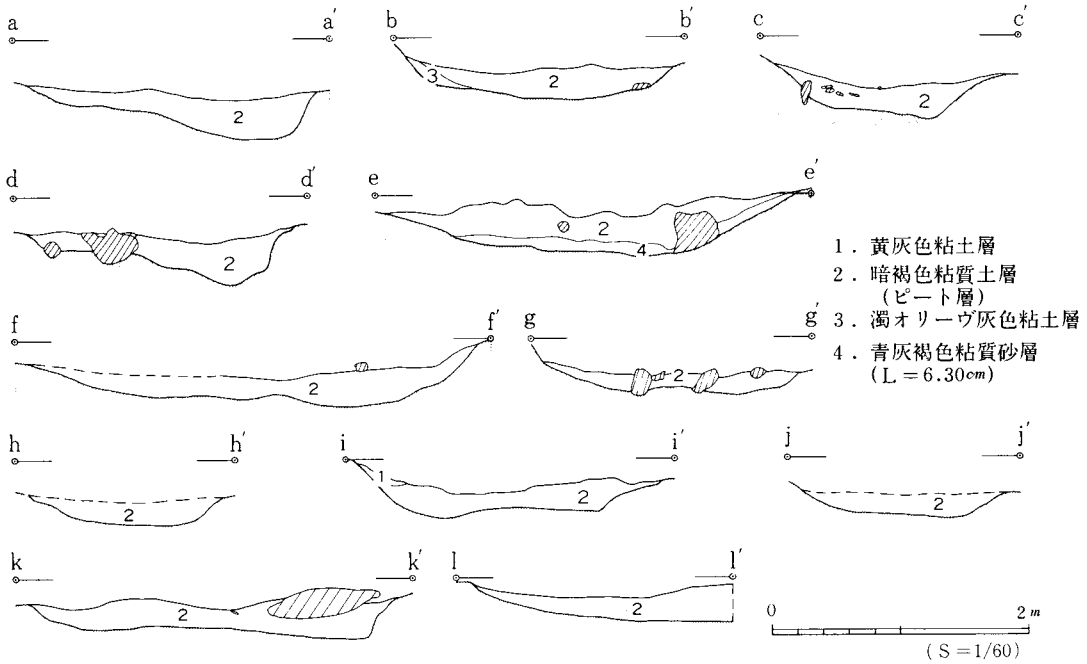
第16図　４号溝、落ち込み模式図

(2)　掘立柱建物（第20図　図版７）

Ｃ６区で検出された本遺跡唯一の柱穴が１棟の掘立柱建物を形作っている。東側と西側が調査区外に伸びている可能性は十分に考えられるが、一応２間×１間の建物として説明を加えていく。掘り方はやや歪んだ円形であり、棟方向はＮ－21.5°－Ｅでほぼ南北方向を向いている。柱間寸法は桁行2.7ｍ～2.9ｍ、梁行2.4ｍ～2.5ｍと若干ばらつきがあり床面積は約14.5m²になる。掘り方の径は30cm～45cmを測り中央には10cm～15cmの柱穴を持つ。深さは10cm～20cmで柱穴及び掘り方からは遺物は出土していない。なおこの建物は落ち込みが埋まった後に建てられたものであり、覆土は灰褐色系の粘土質を呈する。

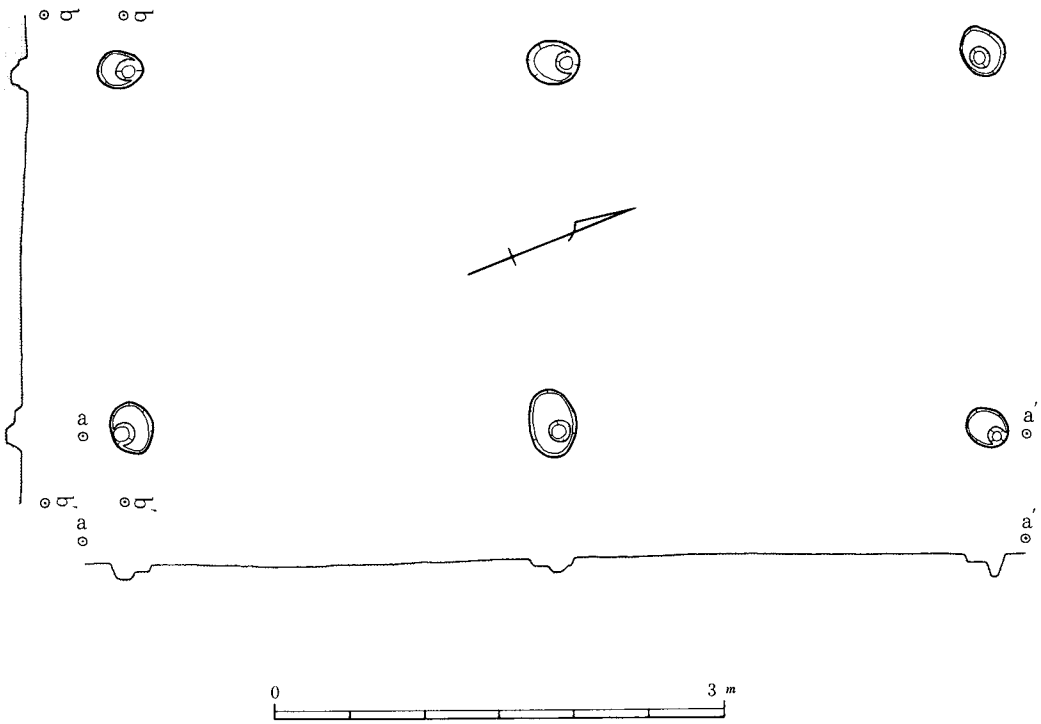


第17図　4号溝最深レベル値模式図



第18図　4号溝実測図

第19図　落ち込み実測図(スクリーントーン部分)(S＝1/400)



第20図　掘立柱建物実測図(S＝1/50)

3. 遺　　物

(1) 中近世の遺物

中近世の遺物は包含層からの出土が最も多く、落ち込み最上層からも数点の出土があった。しかし遺構にともなう遺物はなく、時期的にもある程度の幅がある。順次珠洲、越前、加賀、青磁、白磁、瀬戸・美濃、土師質土器、肥前陶磁と記述していく。

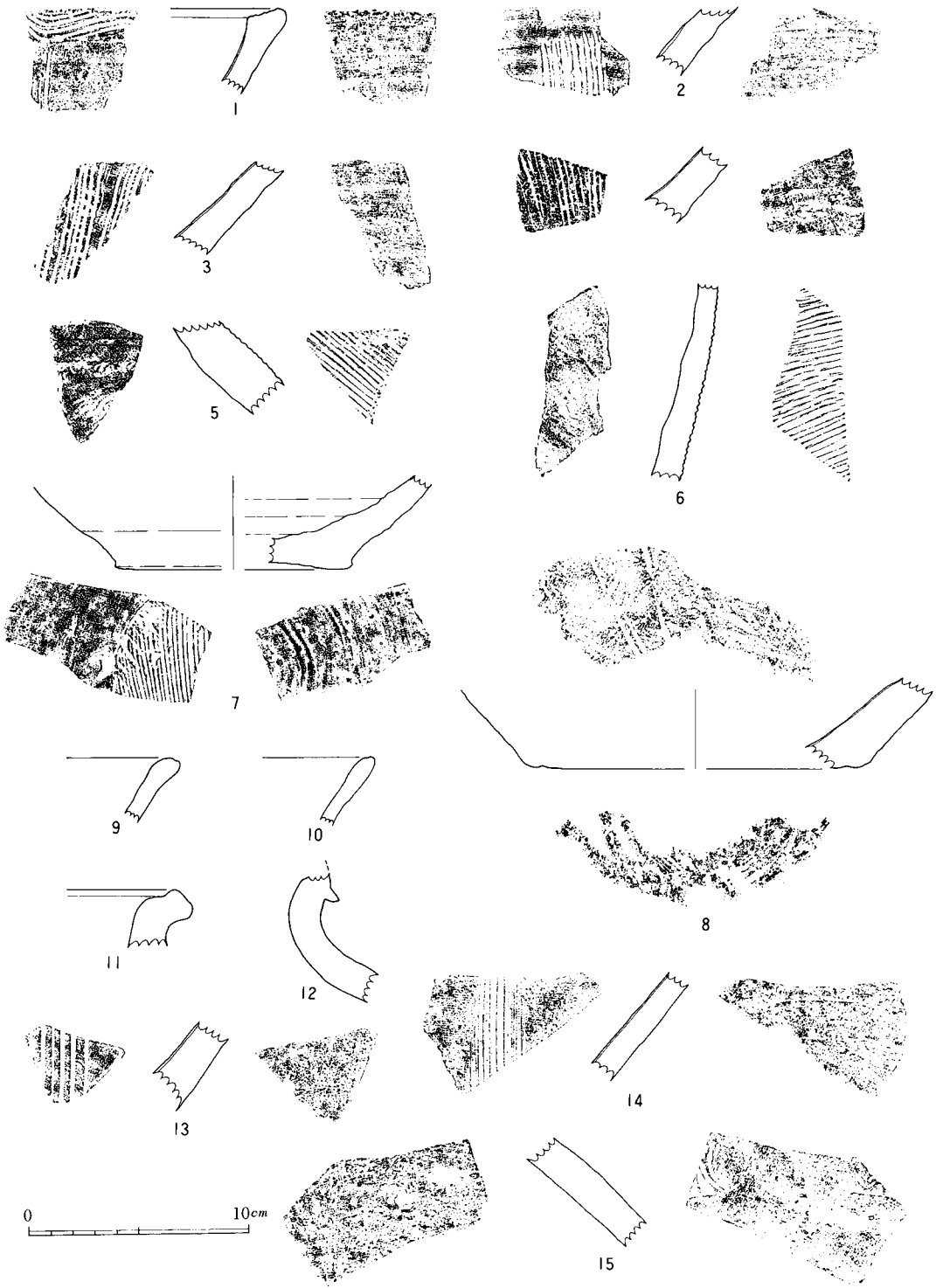
珠洲（第21図１～８　図版12）

１～４は擂鉢片である。１は口唇部に波状文を持つ。胎土は淡灰色を呈し砂粒を少量含む。２は幅2.6cmで6本の深くしっかりとしたおろし目を持つ。胎土は白灰色を呈し焼成は良好である。３、４はやや密におろし目がはいる。胎土はそれぞれ淡灰色、白灰色を呈し焼成は甘く砂粒の含みが多い。５は甕の頸部片であろうか。外面には比較的細かいタタキ、また内面には頸部と口頸部の接合痕をヨコナデによって消した跡が見られる。胎土は灰白色であるが内面は暗灰褐色を呈する。６は外面にタタキ、内面に押圧痕が見られる体部片である。胎土は白灰色を呈し焼成は甘く砂粒を含む。７、８は擂鉢の底部片である。７は底部に糸切り痕、内面上部には僅かにおろし目の一部が見られる。胎土は白灰色を呈し焼成は良好である。８は使用頻度が高いためか内面のおろし目はほとんど摩滅している。胎土は灰白色で焼成は甘く砂粒の含みは多い。５は落ち込み最上層、残りは包含層からの出土である。

越前、加賀（第21図９～15　図版12）

９，10は鉢の口縁部分である。９は口縁部が緩く外反し、口唇部には浅い凹線を持つ。胎土は暗赤褐色を呈し砂粒を多く含む。10も口唇部に極く浅い凹線を持つ。胎土は淡橙灰色を呈し焼成は良好である。11、12は甕の口縁部片である。11は口縁端部を軽くつまみ上げており、そのための凹線が内面に残る。端部は緩く面取りされ、胎土は淡灰色を呈する。12はＮ字状口縁に近い形になると思われ、縁帯下端は断面三角形を成す。釉色はオリーヴ灰色を呈し、素地は淡灰白色で黒い細粒を含み堅緻である。13、14は擂鉢体部片である。13は６本の整然としたおろし目が刻まれている。胎土は淡白灰色、外面は暗灰色を呈する。14は2.5cmに7本の浅いヘラ状具によるおろし目を持つ。外面下方には左斜め下方向へのケズリ調整が認められ、胎土は淡灰黄色を呈する。15は甕の肩部片であり、破片の外面両端には円孤文状の押印が一部認められる。釉はオリーヴ緑色でむらがあり、素地は灰白色で全体に黒い細粒の含みが見られる。９、10は越前、11～15は加賀と思われる。なお13は落ち込み最上層、残りは包含層からの出土である。

当遺跡の中世古陶は細片が多く図示し得たものは15点であった。総破片数は50点を数えるが、内訳は加賀31点（62%）、越前10点（20%）、珠洲９点（18%）である。その中で特に目に付くのが鉢の割合である。珠洲では６点と大半を占めているのに対して、越前では２点、加賀に至っては鉢と確認されたものは、僅かに３点であり、器種構成の傾向性をある程度窺うことができる。珠洲の時期は、鉢口唇部の形状や、灰白色の甘い焼きが見られることなどから、珠洲第Ⅳ期に、また加賀は12の縁帯下端部、13、14のおろし目の特徴などから加賀第Ⅲ期～第Ⅳ期に中心を求めることができよう。



第21図　珠洲、越前、加賀実測図（S＝1/3）

青磁（第22図１～６　図版12）

１～３は体部外面に蓮弁文を削り出した青磁碗の口縁部片である。１は２、３に較べ鎬が明瞭に彫られており幅広の蓮弁を有する。釉色はオリーヴ緑色で透明度は低く、素地は灰白色を呈する。口唇部には顕著な擦痕が認められる。２は扁平化した蓮弁文を持ち、釉色は緑灰色を呈する。素地は灰色で堅緻である。３も厚みの少ない蓮弁文を片切彫で表現している。釉色は青緑色を呈し内面には釉垂れの痕跡が認められる。内外面に貫入を持ち、口唇部は二次加熱のためか白色に変色している。素地は灰白色で１、２に較べ軟質な感じを受ける。４は高台径4.5㎝を測る無文の碗の底部である。釉色は蓮色、素地は灰白色を呈する。釉は高台内面途中までかかり、体部と高台部ではむらがある。内面見込み部分には一条の界線が巡り、底部割れ口には漆による補修痕が認められる。５、６はそれぞれ盤の口縁部と底部である。５は口縁部を一度「く」の字状に外反させ更にその先端部を上方に引き上げたものである。釉色は深みのある青色を呈し、釉の厚みは口端部付近では２㎜近くになる。素地は灰白色で内面に貫入がはいる。６は三角高台を持つ底部片であり、釉は畳付を除いた内外面総てにかけられている。釉色は緑青色で畳付の露胎部との境は赤褐色を呈する。素地は灰白色で内外面に若干の貫入が認められる。１は落ち込み最上層。２～６はいずれも包含層からの出土である。

白磁（第22図７～12　図版12）

７、８は玉縁状口縁を持つ白磁碗の口縁部片である。７は断面三角形の小さい玉縁状口縁を持つ。釉色、素地とも灰白色を呈し内外面には細かな貫入が見られる。８は断面半円形の玉縁状口縁を持つ。釉色はやや黄色味を帯びた白色で、素地は軟質な印象を受ける白色を呈する。また７と同様内外面に細かな貫入がはいる。９は多角坏の体部片である。釉色は黄色味を帯びた白色で釉調にはややむらがある。素地は軟質な黄白色を呈し、内外面に細かな貫入がはいる。10は断面台形の高台を持つ碗の底部片であり高台径は5.2cmを測る。高台外面は直線的に、内面は斜めに削り出されている。釉は内面見込み部分にのみ認められ、黄色味を帯びた白色を呈する。素地は底部断面上部が灰色、下部が黄白色を示し焼成にむらがあったことを窺わせる。11は10よりも高台を浅く削り出した碗の底部であり、高台径は６cmを測る。釉は内面見込み部分と外面高台外側にまでかけられ、釉色はやや緑色を帯びた灰白色を呈する。素地は灰白色で見込み部分には細かい擦痕が数多く見られる。12は把手と長い注口を持つ水注の口縁部片と思われ、口径は10.6cmを測る。口頸部の端部は外側へ折り返すようにして形作られ、把手はその下に密着する形で貼付されている。釉色は緑灰色を呈し、全体にガラス質で光沢のある釉調を持つ。素地は灰白色で堅緻である。なお７～12は全て包含層からの出土遺物である。

瀬戸・美濃（第22図13～18　図版13）

13～16は天目茶碗である。13は口縁端部内面の張り出しの強さを特徴とする。釉色は内外面とも暗褐色系で光沢がある。素地は灰色を呈し堅緻であり、割れ口には漆による補修痕が認められる。なおこの１点は船載品の可能性もある。14は口経10.7cmを測るやや小ぶりで外傾度の大きい天目である。釉は体部途中までかかり口縁部は褐色、体部は黒褐色を呈する。素地は灰白色で体部内外面には細かい貫入が見られる。また割れ口には漆による補修痕も見られる。15は内外面と

も褐色系を呈する口縁部片であるが全体に二次加熱を受けているため光沢はほとんど失われている。また素地は淡橙色を呈する。16はロクロ目をはっきりと残す体部片で釉色は黒褐色、素地は灰白色を呈する。17は皿の底部であろうか。内面見込みには灰緑色の釉が施され、目痕が1ヶ所認められる。外底部は露胎で糸切り痕を留める。素地はくすんだ白色で少量の砂粒を混入し、釉には貫入がはいる。18はおろし皿の底部である。内外面露胎で内面にはヘラ先によるおろし目が不規則につけられ、外底部には糸切り痕が見られる。素地は17と同様、砂粒を含む乾いた白色を呈する。13～18は包含層からの出土である。

土師質土器（第22図19～30　図版13）

本遺跡出土の土師質土器は細片で摩耗したものが多い。多少無理をして口径を復元したものもあるが、成形技法等の差異からA～D類に分類した。

A類（19、20）　外底面に糸切り痕を留めるものである。19は口径10.7cmを測り、口径に較べてやや小さい平底の底部を持つと思われる。体部は内弯しながら立ち上がり口縁部分を直立させるように緩く2段階のヨコナデ調整を行う。胎土は淡橙色を呈し砂粒の含みは少い。20は口径12cm器高3.6cmを測る。器形は外側に大きく開くが19と同様の特徴を備え、内面にはロクロ調整による段を残す。胎土は淡黄橙色を呈し若干の砂粒を含む。

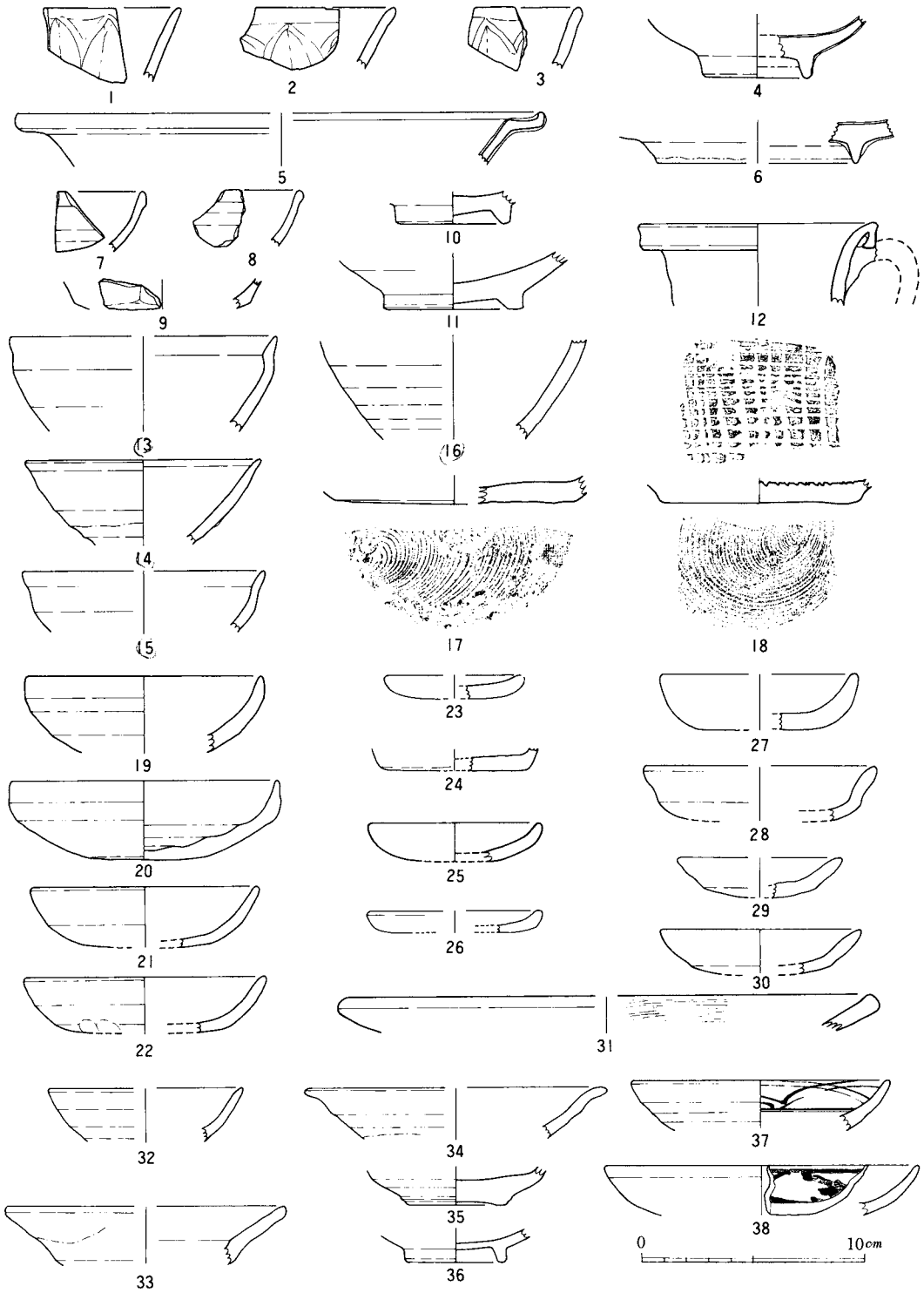
B類（21、22）　平底で全体に均一な薄い器壁を持つものである。21は口径10.2cmを測り、口縁部は皮か布状のものではさむようにして軽くヨコナデされている。胎土は淡黄褐色を呈するが内外面、割れ口には暗褐色の付着物が見られる。22は口径11cmを測る。やはり口縁部内外面にはヨコナデを示す筋状の跡が見られ、体部と底部の境目には指頭圧痕が残る。胎土は淡黄褐色を呈し焼成は良好。

C類（23～27）　1枚の粘土盤の周辺を内側に折り曲げるようにして口縁部を形作るものである。23はほんの少し口縁部を持ち上げただけのもので胎土は淡黄褐色を呈する。24は底径 6.4cmを測り、口縁部はやや急角度で立ち上がる。内面のナデは雑で胎土は淡橙色を呈する。25は 7.8cmの口径を持つやや深めの小皿である。胎土は淡褐色を呈し焼成は極めて良好である。26は24と同様の成形で胎土は二次加熱を受け口縁部は橙色、底部内外面は灰褐色を呈する。27は全体に厚みのある器壁を持つ中皿である。平底で胎土は淡黄褐色を呈する。

D類（28～30）　口縁部が外反し、ヨコナデによる稜を体部下端に持つものである。28は平底タイプであるが口縁部と底部の境が明瞭でなく丸く成形されている。胎土は淡黄褐色を呈し、砂粒の含みはほとんどない。29、30は丸底タイプである。それぞれ淡褐色、淡黄褐色を呈し、30は口径9cmを測る。20～22、25は落ち込み最上層、残りは包含層からの出土である。

31は鍋の口縁部片である。口唇部は緩く面取りされ、内面にはハケ調整が見られる。胎土は淡黄褐色を呈し砂粒を多く含む。包含層出土の土師器である。

近年、石川県内からの土師質土器の出土量は、陶磁器類と共伴する一括資料も含め次第に増加してきている。能登、加賀でもそれぞれ編年試案が出されている[(4)]がそれらを参考にして当遺跡出土の土師質土器の年代を考えてみると、A類は12世紀末～13世紀初、B類は13世紀代、C類は14世紀代、D類は15世紀前半を中心とする頃に位置づけられよう。



第22図　青磁、白磁、瀬戸・美濃、土師質土器、肥前陶磁他実測図（S＝1/3）

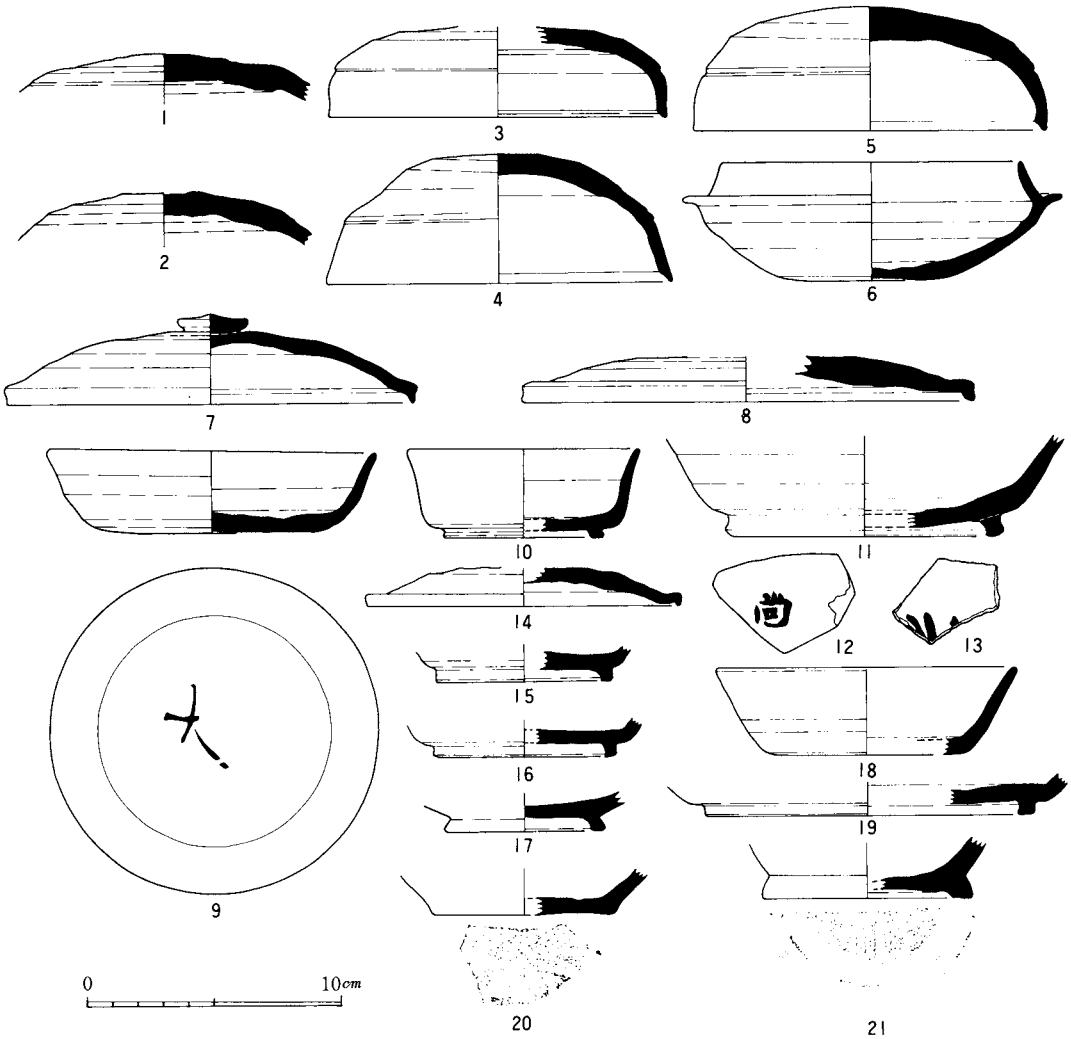
肥前陶磁他（第22図32～38　図版13）

32～35は唐津系の製品である。32は釉色、素地ともに白色を呈し、釉調にはむらがある。33は土灰釉平縁皿の口縁部片であり、胴部に屈曲をつけるタイプである。釉色は淡緑灰色、素地は濁灰色を呈する。外面の釉は体部途中で止まり、内面口端部には一条の線文がはいる。34は口縁端部が外反するタイプの皿である。釉色は淡灰褐色、素地は乾いた淡褐色を呈し内外面に貫入が見られる。35は外面体部下半を露胎とする皿の底部であろうか。高台は浅く削り出され、内面見込みには目痕が認められる。釉色は淡緑灰色、素地は淡灰色を呈し高台径は4.4cmを測る。36は瀬戸系の碗の底部である。数ヶ所の目痕が見られる畳付を除いた全体に釉がかけられており、底部は薄く高台径は4.4cmを測る。釉色はオリーヴ緑色、素地は淡黄橙色を呈する。37、38は肥前系の染付皿である。37は内面見込みに２本の円圏を、口縁部には略化した草文をややくすんだ呉須で描いている。釉色、素地とも灰色がかった白色を呈し口径は11.6cmを測る。38は内面に発色の良い呉須で草花文を描いている。釉色は青味のかかった白色を呈し光沢がある。素地は白色で堅緻、口径は14cmを測る。33～35は17世紀前半～中葉、37、38の染付はそれより後出の製品であろう。

(2)　須恵器（第23図１～21　図版14、15）

１は天井部と口縁部の境に僅かに凹線が認められる。天井部は粗いヘラケズリの後に軽いナデ調整、天井部内面には同心円叩き文の痕跡が見られる。胎土は白灰色を呈し全体に細かい砂粒を含む。２も１と同様、天井部にはナデ調整、内面には同心円叩き文が施される。３は口径10.4cmを測る器高のやや低い蓋である。天井部と口縁部の境には凹線を巡らし、ヘラケズリは天井部の2/3程度に施す。口縁端部は内傾するが稜線は鋭さに欠ける。胎土は白灰色、焼成は普通。４は口径13.7cm、器高5.2cmを測り、天井部はドーム状に丸く仕上げる。天井部と口縁部を分ける稜は僅かに外方へ突出する。口縁端部は急角度で内傾するが稜は鈍い。胎土は淡灰色を呈し全体に黒い細粒を含む。５は口径13.6cm、器高 4.9cmを測る。天井部全域にヘラケズリが見られ、口縁端部の稜は鋭い。外面は暗灰色、内面は淡赤灰色を呈し焼成は良好。全体にどっしりとして重量感がある。６は口径11.6cm、底径4.5cm、器高4.8cmを測る坏である。立ち上がり、受部共に先端は丸くおさめており、外面は重ね焼きのため半分だけに緑灰色の降灰が見られる。胎土は淡灰色で全体に黒い細粒を多量に含み、作りは薄く華奢である。なおヘラケズリの方向は１～６全て逆時計まわりである。１、３、４は包含層、２、５、６は落ち込み下層からの出土である。

７は口径16cm、器高3.6cmを測る。扁平化した宝珠形つまみを持ち天井部を粗くヘラケズリ、また天井部内面中央には仕上げナデを施す。口縁部は断面逆三角形を成し胎土は淡灰色を呈する。８は口径17.7cmを測り、天井部のヘラケズリは1/2程度施される。口縁部近くに平担面を持ち、端部内面は緩く面取りされる。胎土は灰白色を呈し焼成は良好である。９は口径12.8cm、底径 6.8cm、器高3.4cmを測る。底部と体部の境はやや不明瞭。胴部は緩くふくらむようにして立ち上がり、口縁部はやや外反する。また粘土紐巻き上げ痕の残る底部には「大」と読める墨書が認められる。胎土は暗灰色を呈し焼成は良好である。10は口径9.1cm、器高3.5cmを測る。立ち上がりは急で口縁部は緩く外反する。高台は低く、下端部を外側に僅かにつまみ出す。胎土は淡白灰色で焼成は良好。11は高台径10cmを測る坏の底部である。高台は方形で外側にふんばる。胎土は淡橙灰色を



第23図　須恵器実測図（S＝1/3）

呈し細かい砂粒を全体に含む。12、13は墨書土器片である。12は「尚」と読め、13は部分のため判読できない。14は口径12.4cmを測る。天井部と口縁部近くに平担面を持ち、端部は下方に鋭く屈曲する。また天井部内面には×のヘラ記号が見られる。15～17は坏の底部片である。15、16は方形の高台を持ち、高台下端部を内側に僅かにつまみ出す。17は外方へ張り出した高台を持ち、胎土は淡橙灰色を呈する。高台径はそれぞれ7cm、7.3cm、6.2cmを測る。18は口径11.8cmを測り、体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。内面には右斜め下方向へのヨコナデが見られる。19は盤の底部であろうか。高台径は12.8cmを測る。20、21は糸切り底を持つ。20は底径7cmを測り外面には自然釉がかかる。21は高台径8cmを測る瓶の底部である。胎土は灰色を呈し焼成は良好。7は落ち込み最上層、9、19は落ち込み上層、残りは包含層からの出土遺物である。

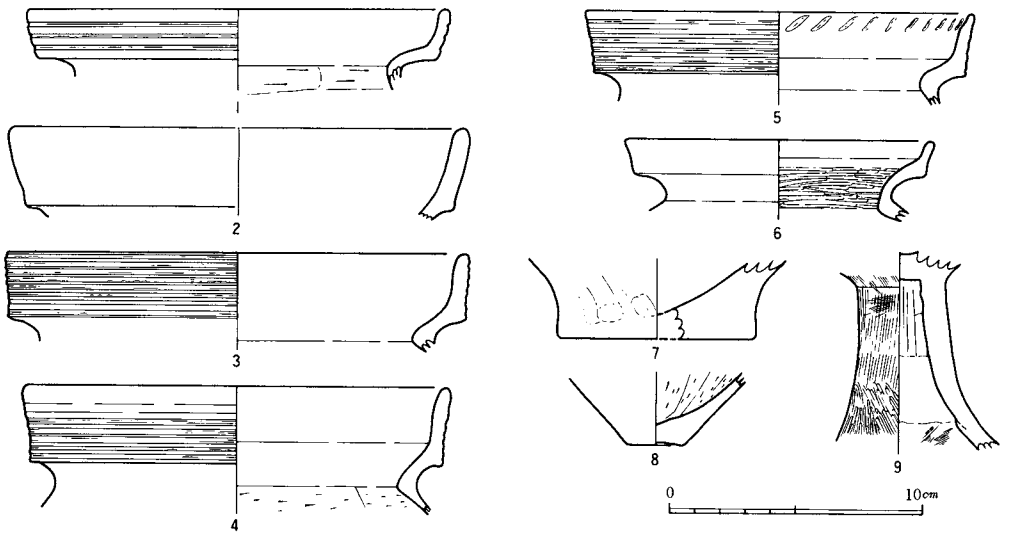
須恵器の年代はほぼ3期に分けられる。Ⅰ期（1～6）は陶邑田辺編年[(5)]のMT15型式～TK10型式に比定され、特に5、6はB3区4号溝直上層（落ち込み下層）からほぼ完形で出土している。Ⅱ期（7～11）は8世紀中葉、Ⅲ期（14～21）は9世紀前半頃に属する製品であろう。

(3) 弥生式土器および古墳時代の土師器

中近世の遺物と並んで出土量が多く、3号溝、落ち込み上層、下層および包含層からの出土が確認されている。

3号溝最下層出土土器（第24図1～9　図版16）

3号溝から出土した土器は、小片を混じえて数点あるが、実測し得たものは最下層より出土した9点のみである。



第24図　3号溝最下層出土土器実測図(S＝1/3)

甕形土器（1～5）

全て有段口縁をなす口縁部片である。1は口径17.2cmを測る。口縁はやや外傾し3条の擬凹線を施す。端部は丸縁であり口縁帯は幅約2cmを測る。内外面をヨコナデで仕上げ、内面頸部以下は横位ヘラケズリを施す。外面全体に煤が付着しており、口縁部には一部炭化物の付着も見られる。胎土、焼成共に並であり淡褐色を呈する。2は擬凹線を持たないものであり口縁はやや外傾する。端部は厚めの丸縁であり、口縁帯下端を強いナデにより突出させる。内外面共にヨコナデと思われるが、摩耗が激しく不明瞭である。色調は、内外面ともに淡茶褐色を呈する。3は口径18cmを測り、直立した口縁には8条の擬凹線を持つ。外面はヨコナデを施すが、内面は摩耗が激しく不明である。外面全体に煤が付着し、頸部には炭化物の付着も認められる。内面は暗灰茶褐色を呈する。4は口径17.2cmを測り、7条の擬凹線を有するものと思われるが、摩耗のため上2条は不鮮明である。端部は丸縁であるが、3に比較してやや薄くナデ上げる。内面頸部以下に横位ヘラケズリを施すが、全体に摩耗しており詳しくは不明である。内外面共に淡茶褐色である。5は口径15.5cmを測る。直立した口縁には6条の擬凹線を施し器壁は4よりもさらに薄い。端部は先細りの丸縁で口縁内側に連続指頭圧痕が見られる。外面はヨコナデを施し、全体に煤が付着している。内面は頸部以下を横位ヘラケズリ、口縁部をヨコナデで調整する。内面の色調は淡茶褐色を呈する。

壺形土器（６）

実測し得たものは１点のみである。口径約12cmを測る小形の有段口縁壺である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸縁を呈す。外面をヨコナデで仕上げ、内面は段部より頸部にかけて細かなヘラミガキを横位に施す。端部はヨコナデ、頸部以下は摩耗しているがヘラケズリと思われる。胎土・焼成共に良好で淡茶褐色を呈する。

底部（７、８）

７はしっかりとした平底で、底径7.8cmを測る。胎土は細かく、良好であるが焼成は不良でありもろい。外面は一部ユビナデによる指頭痕を残し、ほぼ全面に煤が付着している。内面は摩耗のため不明瞭であり、色調は乳茶褐色を呈する。８は底径2.2cmの平底の甕であり、中央部がやや内側に凹む。内面は縦位のヘラケズリを施し、底をユビナデで整える。外面はナデを施し、全面に煤が付着している。胎土、焼成共に並で、色調は濁淡茶褐色を呈する。

高坏形土器（９）

脚部のみの出土である。柱部より裾部にかけてラッパ状に開くタイプのもので、胎土は良くしまり、焼成も良好である。外面は縦位にハケ調整を施した後、脚下位に丹念なヘラミガキを行う。坏接合部下には数条の横位ハケ調整痕が認められる。内面は上位にしぼり目を有し、下位はハケ調整を施した後、ナデで整える。色調は淡灰茶褐色を呈する。

落ち込み出土土器（第25図１～18、第26図19～36 図版16、17、18）

落ち込み内では、下層と上層からの出土がある。

(a)　落ち込み下層（第25図１～18、第26図19～30）

甕形土器

口縁部形態よりＡ～Ｄの４小形式に分類した。

甕Ａ類（第24図１～３）

有段口縁の甕である。１は口径12～13cm程度の小型甕と思われるが、小片のため明確な径は計測し得ない。口縁帯には５条の擬凹線を施すが、摩耗のため不明瞭である。胎土、焼成共に不良で外面には一部に煤の付着が認められる。２は口径14.7cmを測り外傾する。器壁は薄く、端部は先細りの丸縁である。内外面ともにヨコナデと思われるが、摩耗のため不明瞭。内面肩部以下に横位ヘラケズリを施す。胎土、焼成ともに不良であり、内外面ともに乳白濁色を呈す。外面は口縁帯の幅1.8cmを測る有段口縁であるが、内面は「くの字」化が進行し、段がほぼ消失している。有段口縁の退化現象の一過程としてとらえられよう。３は口径15.2cmを測る。直立ぎみに立ち上がる口縁には不明瞭な段を持つ。端部は丸縁であり、内外面ともにヨコナデ、内面肩部以下に横位ヘラケズリを施す。胎土・焼成ともに並であり、外面は白濁色、内面は淡橙褐色を呈す。

甕Ｂ類（４、５）

基本的には「くの字」口縁の範疇に入ると思われるものであるが、直立ぎみに外反する広い口縁帯に強い横方向のナデを加え、中央部に突出する稜を持たせて一見有段口縁風に仕上げたもの

である。4は口径19cmを測る口縁帯のみの小片である。胎土には直径1mm～2mmの小礫を多く含み、焼成は甘い。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、稜をはさんだ外面上下に横位のヘラ状工具痕が認められる。5は口径18.6cmを測り、形態から丸く張った胴部を持つタイプのものと推測される。口縁外面はヨコナデを施し、稜上下付近から頸部にかけては幅5mm程度のハケ状工具によるヨコナデが施される。内面は基本的にはヨコナデと思われるが摩耗が激しく不明瞭である。胎土は並であるが焼成は甘い。4、5ともに色調は乳灰白濁色を呈する。

甕C類（6～10、第26図19～21）

いわゆる「くの字」口縁の甕である。6は口径11.6cmを測る小型の甕で、口縁部の器壁は頸部以下に較べて非常に厚く作られている。内面に粘土接合痕が認められ、あたかも粘土紐を貼りつけたかのような印象を受けるが、断面の観察からは判然としない。内外面ともにヨコナデを施すが、内面肩部以下は摩耗のため不明瞭である。胎土は砂粒を若干含むものの概ね良好で焼成は並である。色調は淡茶濁色を呈す。7、10は端部を外転させ、平縁を呈するものである。7は口径12.8cmとやや小振りのタイプで、端部を下方向へつまみだし、ユビナデにより外傾した平縁に仕上げる。外面はヨコナデを施し、端部下にはつまみ出した際の指による圧痕が認められる。内面は摩耗のため不明瞭であり外面に一部煤の付着が見られる。胎土・焼成とも甘く、淡茶濁色を呈する。10は口径20.3cmを測る。強く外反する口縁に続く端部下には、ヨコナデによる稜をもつ。胎土・焼成ともに締まり、色調は白濁色を呈す。内外面ともにヨコナデを施すが、肩部以下は不明である。8・9はともに端部内面が肥厚するもので、布留式土器の範疇に納まるものである。8は口径17.8cmを測る。口縁部は内湾ぎみに外反し、肥厚の明瞭な端部はやや内傾する。内面は口縁から頸部にかけてヨコナデ、肩部以下を横位ヘラケズリにより調整する。外面はヨコナデを施す。胎土・焼成ともに良好で、内外面ともに淡茶褐色を呈す。9は口径17.3cmを測る。やや内湾ぎみに外反する口縁部先端には、わずかに肥厚の認められる端部がやや丸みをもって外傾する。口縁には内外面ともにヨコナデを施し、外面肩部以下は斜方向のハケにより調整する。内面頸部以下は摩耗のため不明瞭である。色調は淡茶褐色を呈し、外面には一部煤の付着が見られる。谷内尾氏の行った布留系甕形土器の分類によれば、8はⅡD類、9はⅡA類にあたるものであろう。[(6)] 19～21はほぼ全体を窺うことができるものである。19は口径14.9cm、器高20.9cmを測る。口縁部は肉厚で、端部は先細りの丸縁である。やや胴長で、丸底を呈する。外面は粗い縦方向のハケ調整を施し、口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部内面は螺旋状のヘラケズリを施した後、頸部より胴部中程にかけてヘラ状具による横位ナデを行う。淡茶濁色を呈し、外面肩部以下より底部付近にかけて煤が付着している。20は口径17cm、器高19.2cmを測る。ほぼ球状の胴部をもち、丸底である。口縁部は緩く外反し、端部は先細りの丸縁である。摩耗が激しく不明瞭であるが、胴部内外面とも一部斜位のハケ調整痕が残る。底部はナデであろう。口縁部には指による圧痕と見られる器壁のゆがみが数ヶ所観察される。色調は淡茶濁色を呈し、外面ほぼ全域及び内面の一部に煤が付着している。21は口径16cm、器高19cmを測る球状胴部を持つ甕で、胴部最大径は21.5cmと器高を上まわる。口縁は強く外反し、器壁も薄い。端部は面取りを施した外傾する平縁である。外面は細かい縦方向のハケ調整を丹念に施す。内面は螺旋状のヘラケズリを施した後、肩部付近

に横位のヘラケズリを行う。口縁部は内外面ともにヨコナデである。色調は明淡茶褐色を呈し、外面肩部付近に黒斑が見られる。

甕Ｄ類（第25図11、12）

外反はするものの、外傾度が弱く全体のラインとしては直立ぎみになる「くの字」口縁の甕である。11は口径15.4cmを測る。直立ぎみに外反する口縁部より緩やかに肩部に続く、なで肩の胴部を持つものと思われる。器壁は厚く、端部は先細りの丸縁である。全体に摩耗が激しく、不明瞭であるが、内面頸部以下には横方向のヘラ状工具痕が数条確認される。内外面ともに淡茶褐色を呈する。12は口径15.7cmを測り、外反の度合いは11よりもやや強い。肩部以下内面には横位ヘラケズリ、外面には縦位ハケ調整を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。色調は淡茶褐色を呈する。

壺形土器（13）

１点のみである。口径13.8cmを測る有段口縁の壺である。内面は粘土接合痕が盛り上がり、一見段を有するような印象を受けるが、基本的には「くの字」である。外面の段も緩く不明瞭である。摩耗が激しく、調整は不明であるが、口縁部内面には連続する指頭痕が認められる。胎土には１mm～２mm大の礫を多数含み、焼成も甘い。淡茶濁色を呈し、外面に赤彩痕を有する。

鉢形土器（14～16）

14は器形的に埦形土器に近いものであり、口径13.2cm、器高５.７cm、底径５.８cmを測る。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾して開口し、端部は真上に向かって先細りする。外面は幅５mm程の細かいハケ調整を入念に施し、底面には同一工具による格子状のハケ調整を行う。内面はナデ、口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。胎土は微砂粒を多く含み、焼成は甘い。淡茶褐色を呈し、外面口縁部には赤彩痕が認められる。15、16はともにいわゆる砲弾形を呈するもので、端部が鍵状に内傾するものである。15は口径23cmを測る大形品である。外面は斜位ハケ調整、内面はナデを施す。口縁部は内外面ともヨコナデで、内面には指による圧痕が残る。16は小片のため口径は不明であるが、15と同程度かそれ以下のものである。外面は横方向のヘラ状工具痕が見られるが、摩耗のため不明瞭。内面はヨコナデ、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。端部の内傾度は15よりもさらに強い。両者とも胎土は微砂粒を含むものの概ね良好で、焼成は並である。色調は15が淡茶濁色、16が淡茶褐色を呈し、前者は外面の一部と内面の口縁下５cm幅一様に煤が付着している。

埦形土器（17、18）

17は口径14.5cm、器高９.６cm、底径６.４cmを測り、端部はややゆがんでいる。底部より内湾して立ち上がる胴部は中程をすぎたあたりで外反して端部に続く。外面は丁寧なナデを施し、体部中程に横方向の単位の大きな磨きを行う。底部および内面はヘラ状工具によるナデを施し、口縁部は内外面ともヨコナデである。胎土は良く精選されているものの、焼成は並である。色調は淡茶濁色を呈する。18は口径15.2cm、底径５.５cmを測る。しっかりとした平底で、内湾する胴部の立ち上がりは鋭く、口縁に続く外反度も強い。17よりも深い身をもつものの、胴部下半を欠いており器高は不明である。外面はヘラ状具による縦方向の強いナデを施した後、ユビナデにより器

面を整える。内面は粗いハケ調整の後丁寧なナデを加える。口縁部は内外面ともにヨコナデ、底面にはヘラ状具ナデつけを施す。胎土、焼成とも良好で、色調は淡茶褐色を呈する。

底部（第26図22～26）

22は底径4.5㎝を測り、ずっしりとした厚手のものである。外面には底面より粘土を盛り上げたような稜をもち、ユビ押さえで整える。体部は摩耗のため調整不明、内面は放射状の細かいハケ調整を施す。胎土には1㎜～2㎜大の礫を多数含み、焼成も不良である。色調は外面淡茶濁色、内面は焼きが甘いため暗灰褐色を呈する。23は底径4.8㎝を測る小振りの底部である。立ち上がりは鋭く、外面にはユビナデによる指頭痕が数ヶ所残る。内面には非常に丁寧なナデを施し、胎土も精良であるが焼成はやや甘い。内外面とも淡茶褐色を呈する。24は底径6.1㎝を測るしっかりとした平底の底部である。外面は残存部下半に縦方向のヘラケズリ痕を残す。上半はヘラケズリの後ハケ→ナデ調整を施されたものであろう。底面にはヘラによるケズリ痕を残し、内面にはナデ上げによる指頭痕が認められる。胎土は砂礫を多く含み、焼成も甘く摩耗が激しい。色調は淡茶褐色を呈する。25は壺形土器の底部であり、底径は2㎝を測る。平底で、底面中央がやや凹む。外面は縦方向の磨きを施し、赤彩痕が残るが摩耗のため不明瞭である。内面も摩耗が激しいがナデと思われる。胎土は精良であり、焼成は並である。淡茶褐色を呈する。26は底径5.2㎝を測り、丸く胴の張った体部に続くものである。底面より約1㎝の所で緩い稜を持ち、上下をユビ押さえで整える。外面には斜位ヘラケズリ痕と粗いハケ調整痕を残す。内面は摩耗と剝離が激しく不明であるが、底部内面に指による圧痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、焼成も不良である。色調は淡茶褐色を呈するが、約半分が黒斑に覆われている。

手捏ね土器（27、28）

ともに丸底のものである。27は口径4.2㎝、器高3.8㎝を測り、口縁の一部を欠いている。内面底部には指2本分の指頭圧痕を残す。28は口径4.7㎝、器高3.8㎝を測る。両者とも内外面をナデで仕上げる。胎土、焼成ともに良好で、色調は乳灰白色を呈する。

高坏形土器（29）

1点出土している。脚部のみの残存であり、柱部が短かく裾がラッパ状に開く。全体に雑な作りであり、摩耗が激しい。柱部内面はヘラケズリと思われるが不明瞭である。裾部および外面の調整は全く不明である。胎土は微砂粒を含み、焼成も甘い。色調は淡茶褐色を呈する。

甑形土器（30）

把手のみ1点の出土である。ほぼ中央断面で直径約4㎝を測る。基部下方に縦方向のハケ調整痕が残るが、把手そのものはユビ押さえとナデにより成形されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は甘い。淡灰茶褐色を呈する。

（b）落ち込み上層（第26図31～36）

甕形土器（31）

有段口縁をなす甕である。口径は小片のため正確には測定し得ないが、22㎝前後を測る大型品であろう。外傾する幅2.8㎝の口縁帯には4条の擬凹線を施す。端部は厚目の丸縁で、内面には

緩やかな段をもつ。調整は内外面ともに摩耗が激しく不明である。胎土には1㎜～2㎜の小礫を多く含み、焼成も甘い。淡茶褐色を呈する。

底部（32～35）

32は底径5.1㎝を測るしっかりとした平底で、器壁も厚い。調整は摩耗が激しく不明である。胎土も小礫を多く含みもろい。焼成は並であり、乳灰濁色を呈する。33は底径5.5㎝を測る平底で、中央が2㎜程凹む。外面にナデを施し、側面を指押さえで整える。内面には細かな螺施状のハケ調整を施すが、全体に摩耗しており不明瞭である。胎土、焼成ともに不良で、外面は乳白濁色、内面は暗灰茶褐色を呈する。34は底部穿孔土器の底部である。底径は1.8㎝を測り、中央に径6㎜の小孔を穿つ。胎土には1㎜～2㎜の小礫を多く含み、焼成も甘い。淡茶灰濁色を呈する。35は底径4.2㎝を測る。底部側面にはユビナデによる幅5㎜程の緩い面をもつ。内外面ともにナデを施し、内面には煤の付着が見られる。色調は淡灰茶褐色を呈する。

高坏形土器（36）

1点のみの出土である。柱部が短かく、裾部にかけてラッパ状に開く。柱部は中空とはならない。大変雑な作りで、摩耗、剥離が激しく調整は不明瞭であるが、一部にハケ調整痕およびミガキ痕らしきものも認められる。胎土、焼成ともに不良で、破断面は暗灰褐色を呈する。器面は淡黄茶褐色である。

包含層出土土器（第26図37～41　図版18）

落ち込み上層と共に出土量は少なく、実測し得たものは5点のみである。

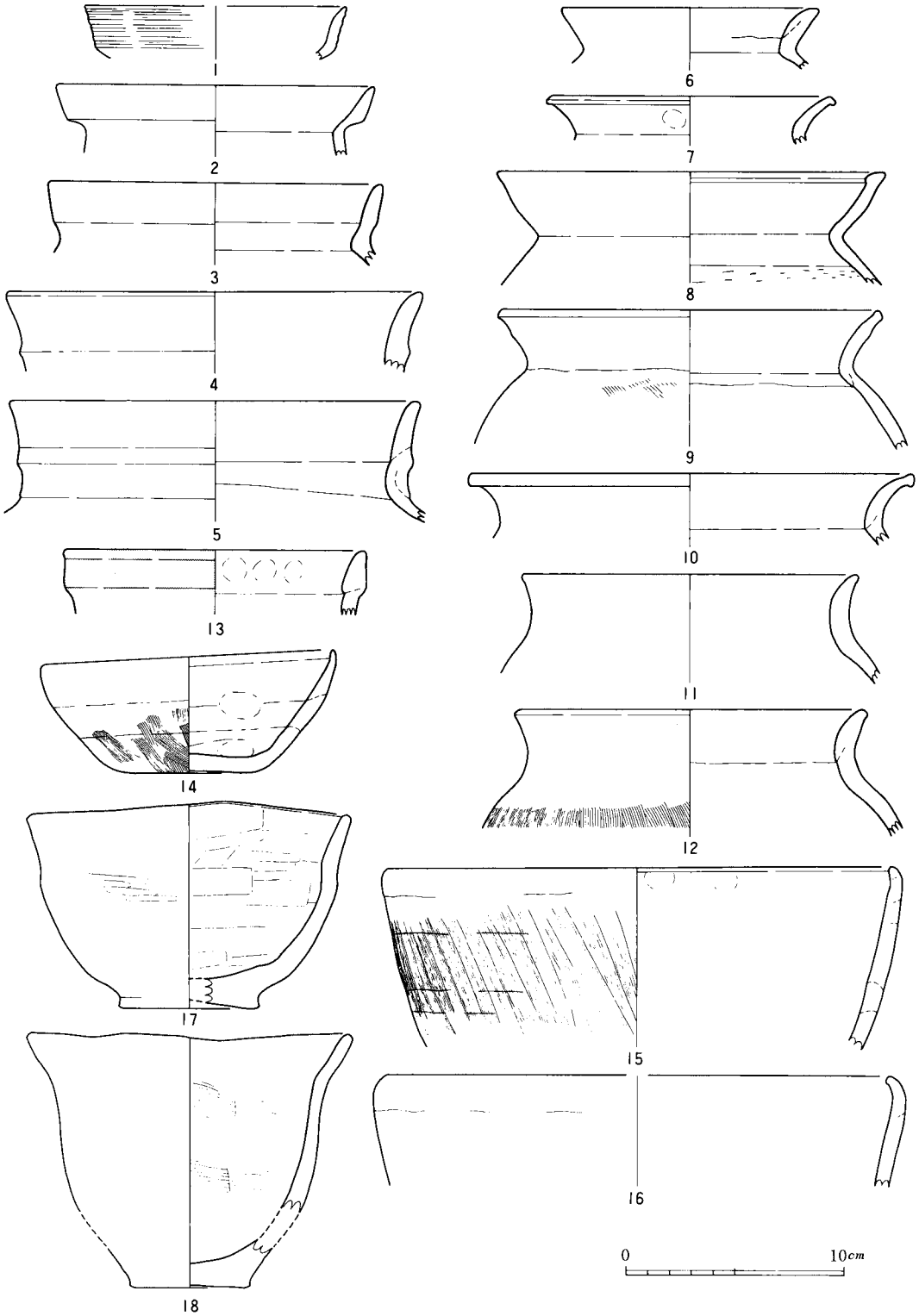
蓋形土器（37）

径4.4㎝を測る、中央を凹ませた紐部である。摩耗と剥離が激しく調整は不明である。胎土は1㎜～2㎜大の小砂礫を多く含み、焼成も甘い。内外面ともに淡橙褐色を呈する。

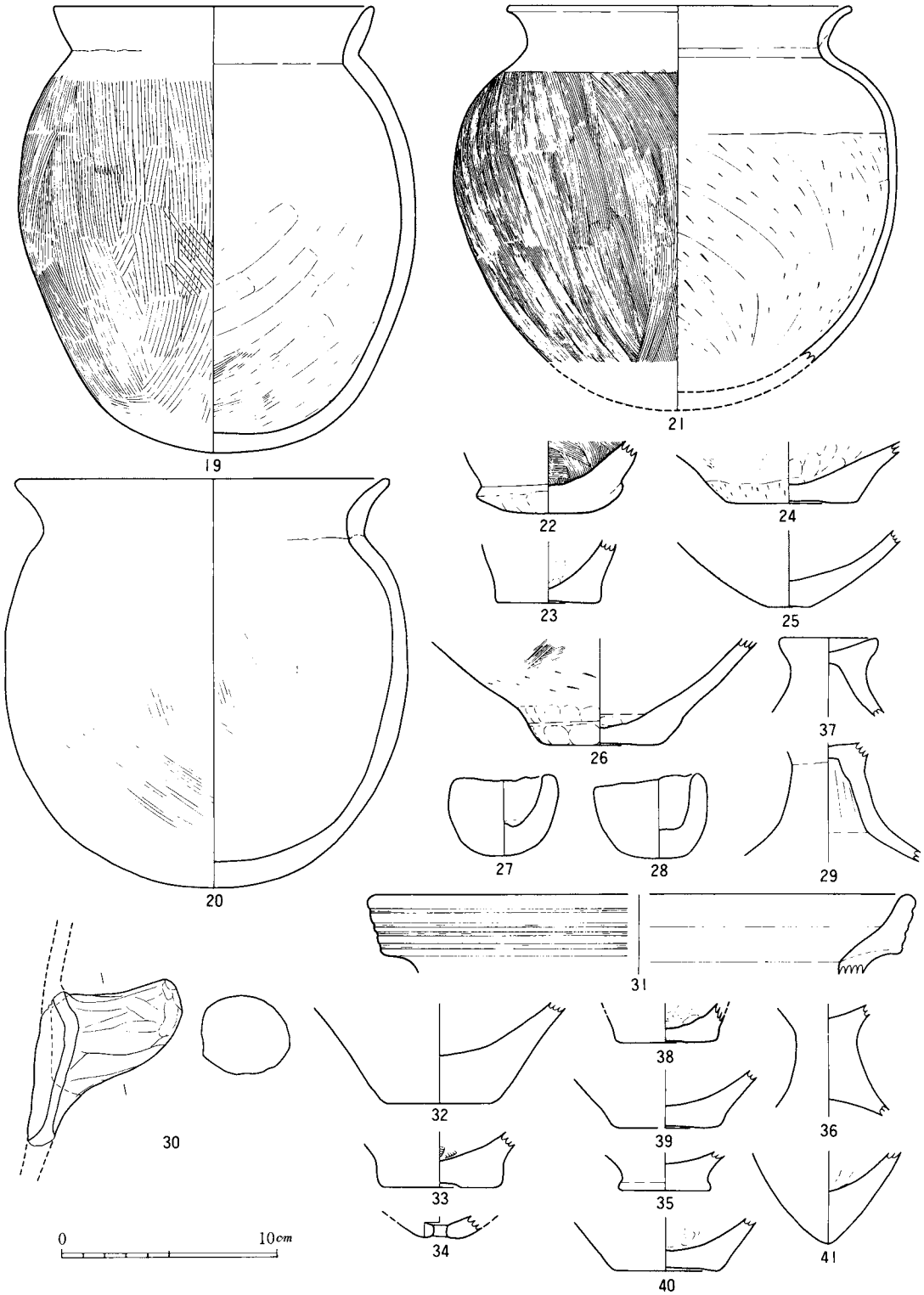
底部（38～41）

38は底径4.6㎝を測り、立ち上がりは鋭い。内面に指頭痕およびナデ上げの痕跡が認められるのみで、他は摩耗が激しく不明である。胎土は並であるが焼成は甘い。全体に淡黄茶褐色を呈する。39は底径4.8㎝を測る。内外面ともに摩耗のため調整は不明瞭であるが、底部およびその週辺に数条の不定方向のヘラ状工具痕が残る。胎度は小砂礫を若干含むものの良好で、焼成は並である。色調は乳灰濁色を呈する。40は底径4.8㎝で、中央部がやや凹む。やはり摩耗が激しく、調整は内面に一部認められる指押さえ痕以外は不明である。胎土中に1㎜～2㎜大の砂礫を多く含むが焼成は並であり、色調は淡茶褐色を呈する。41は小型尖底土器の底部である。内外面とも丁寧なナデで仕上げ胎土も精良である。若干焼成が甘く、破断面は暗灰褐色を呈する。器面は内外面ともに淡灰茶褐色である。

以上、包含層より出土した土器は、その80％を底部が占め、しかもほとんどが小片であるため時期設定は困難である。さらに、41のごとく落ち込み下層出土土器よりも先行するものが含まれていることから、ここでは紹介のみにとどめておく。



第25図　落ち込み下層出土土器実測図（S＝1/3）



第26図　落ち込み下層、上層、及び包含層出土土器実測図(S＝1/3)

今まで説明を加えてきた弥生土器および古墳時代の土師器は、その時期を知り得るものとしては絶対数が少なく、良好な資料とは言い難い。しかし、少ない中にもある程度の時期幅を設定することは可能である。

3号溝最下層出土土器について

1は文中指摘したように、口縁帯が依然未発達の様相を呈し、3も端部はずんぐりとした丸縁でこの手の甕としてはやや古相を示している。以上のことより、谷内尾編年でいう法仏Ⅰ～Ⅱ式期に比定されよう。また4、5は直立する発達した口縁帯をもつもので、端部も先細りの丸縁を呈し、後者は口縁内面に連続する指頭圧痕の出現を見、ほぼ月影Ⅰ式期に比定される。底部8も同一個体かどうかの判別は不可能であるが、このタイプの口縁をもつ甕に付随するものである。

落ち込み出土土器について

落ち込みより出土した土器は下層からの出土が大半を占める。しかし、一概に下層といってもその構成内容を見ると様々なものが含まれている。まず甕形土器1～3に見られる有段口縁の退化とくの字口縁への移行の過程、および同8・9に見られる布留系土器の定着期がⅠ期として考えられる。具体的には前者は月影式期から古府クルビ式期への移行の段階と考えられ、後者は古府クルビ式期に比定されることから、[7] 1つの連続した流れとして捉えられる。Ⅱ期としては手捏ね土器の出現や、他のくの字口縁の甕において布留系要素の払拭が行われる点などからほぼ宮地式期が考えられる。上層に至っては、実測し得た点類がわずかに6点で、そのほとんどが底部という関係上、その時期を知り得るものではなかった。ただ、31のごとく前述の下層における宮地式よりも、明らかに古い要素をもつものも含まれることから、何らかの事情で混じりが生じたものであろう。ただし、下層内部においては幅はあるもののある程度の時期を追えること、また堆積の状況等から考えて、下層堆積後にしばらく安定した時間の存在を見てとれる。したがって、上層堆積時における混じりは、下層との間にワンクッションおいた段階でのことであろう。

(4) 土錘、砥石、瓦、銭貨

土錘（第27図1～8　図版15）

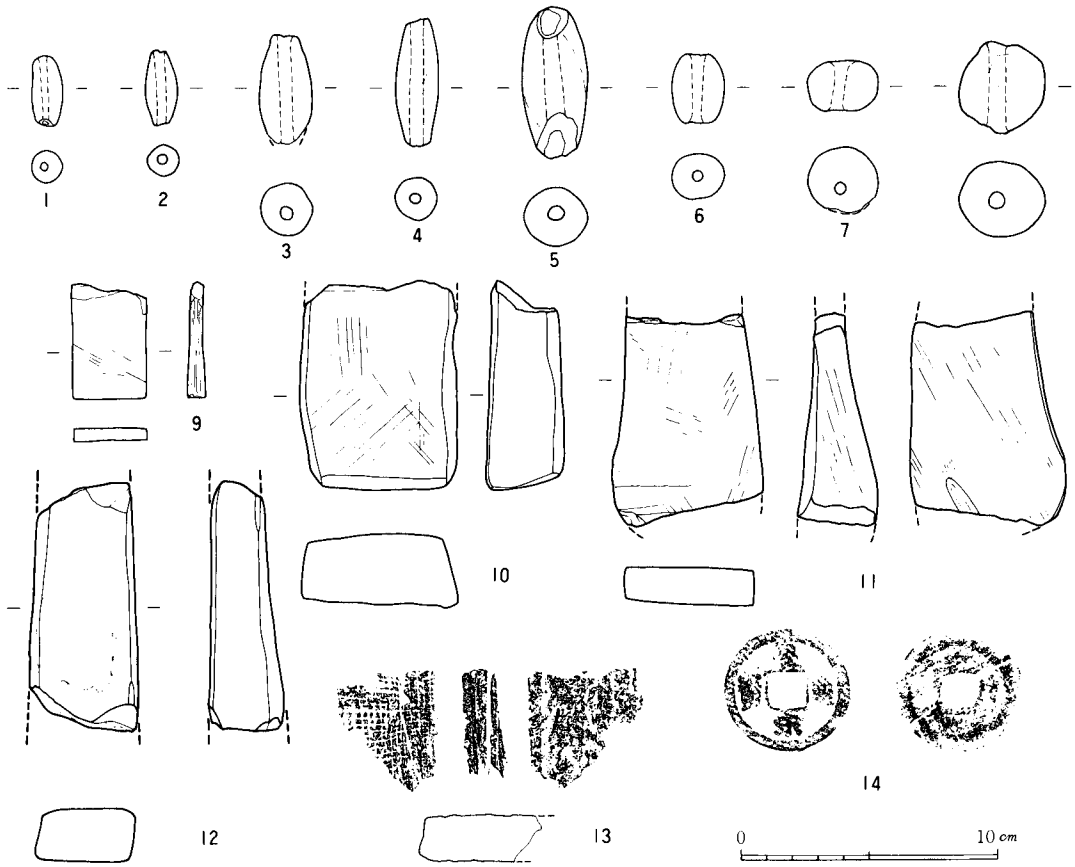
本遺跡から出土した土錘は8点を数え、大きくⅠ、Ⅱ類に分類した。Ⅰ類（1～5）は最大径が土錘中央に求められる紡錘形を成し、長さが最大径の2倍以上ある細長い形のもの、Ⅱ類（6～8）はそれ以外の丸い形のものである。Ⅰ、Ⅱ類とも土師器質であり、8は指おさえの痕が顕著に残る。

砥石（第27図9～12　図版15）

9は裏面以外の四方に研面があり、薄く、断面は長方形を呈す。10、11は大型品で断面は長方形、材質は砂岩質である。12は棒状の製品で、研面には全体に凸凹が目立つ。全て包含層からの出土である。

瓦、銭貨（第26図13、14　図版15）

13は布目痕を持つ平瓦である。暗灰色を呈し、全体に白っぽい細砂粒を多く含む。14は楷書体の皇宋通宝（初鋳年1039年）であり、両方とも包含層からの出土である。またその他に図示し得なかったが、緑釉陶器の細片１点、フイゴの羽口片２点が出土している。



第27図　土錘、砥石、瓦、銭貨実測図（Ｓ＝1/3、銭貨2/3）

遺物No.	出土地点	分類	遺存状態	重さ(g)	孔径 a	孔径 b	長さ(cm)	径 (cm)
1	Ｃ３区　包含層	Ⅰ	一部欠	3.1	0.3	0.2	2.8	1.2
2	Ｂ２区　包含層	Ⅰ	完	3.2	0.4	0.4	3.0	1.3
3	Ｃ４区　落ち込み上層	Ⅰ	一部欠	14.6	0.5	0.5	4.4	2.1
4	〃　〃	Ⅰ	〃	11.4	0.5	0.5	5.1	1.7
5	Ａ６区　包含層	Ⅰ	〃	30.2	0.5	0.5	6.1	2.6
6	Ａ４区　包含層	Ⅱ	〃	8.1	0.3	0.3	2.8	2.1
7	Ｂ６区　包含層	Ⅱ	完	12.2	0.4	0.4	2.0	2.8
8	Ｄ２区　３号溝下層	Ⅱ	完	32.6	0.6	0.6	3.7	3.3

第２表　土錘計測表（ａ≧ｂ）

(5) 植物遺体

樹木（第11図　図版19～24）

本遺跡では、落ち込み内の３、４号溝から多くの樹木が出土しており当時の自然環境を考える上で貴重な資料を提供している。

両溝から採集された試料は85点を数え、当センターの清水哲広氏に樹種鑑定を依頼した。試料についてはカミソリの刃を用いて、横断面（木口）、接線断面（板目）の切片が得られる様に各断面をトリミングしメチレン青、またはアセトカーミンで組織の染色を行った。そして透明剤と封入剤とを兼ねたグリセリンを用いてプレパラートを作製し顕微鏡観察で同定を行った。しかし木材組織の腐朽軟化はかなり進んでおり、類似構造を持つ種の同定は難しく85点中約67％の57点（24種）の樹種鑑定結果が得られた。その内自然木は51点、加工木と判断したものは６点である。

１　クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*　ブナ科　（図版19－１）

北海道西南部、本州、四国、九州と温帯下部から暖帯にかけて日本に広く分布する。樹高17ｍ、胸高直径60～80cmに達する落葉高木でしばしば食用のために栽培される。年輪は極めて明瞭で、孔圏は非常に大きい管孔１～４列によって形作られている。鑑定を受けた試料の中では13点と最も数が多く４号溝西側に集中している。

２　ハゼノキ　*Rhus succedanea L.*　ウルシ科　（図版19－２）

本州（暖地）、四国、九州、中国、タイ等暖帯から熱帯にかけて分布する。樹高10ｍ、胸高直径60cmに達する落葉高木で、核果から蠟をとる目的で栽培される。環孔材で年輪も明瞭である。道管の管孔１～２列からなる孔圏があり、孔圏外の道管は平等に分布する。

３　カキ　*Diospyros kaki Thunb.*　カキノキ科　（図版19－３）

本州（西部）、四国、九州等暖帯に分布する。樹高20ｍ、胸高直径１ｍに達する落葉高木で果実は食用となる。散孔材で多くの放射組織は微細。道管の管孔は大きなものから小さなものまでばらつきがあり、密集はしない。４号溝から少し南にずれた位置で出土している。

４　サカキ　*Cleyera japonica Thunb.*　ツバキ科　（図版19－４）

本州（茨城、石川県以西南）、四国、九州、台湾等亜熱帯から暖帯にかけて分布する。樹高12ｍ、胸高直径30cmに達する常緑高木で、枝葉は神事に用いられる。道管は肉眼では確認できないが、顕微鏡で見ると極めて多数が全体に拡がっている。試料中からは２点確認されている。

５　スギ　*Cryptomeria japonica D. Don*　スギ科　（図版20－５）

日本特産で本州、四国、九州と温帯下部から暖帯にかけて分布する。樹高40ｍ、胸高直径２ｍに達し、湿気のある有機物に富む谷間に生育する常緑高木である。樹脂道は存在せず、心材は濃色である。３号溝を中心にして、クリに次ぐ９点が確認されている。

６　リョウブ　*Clethra barbinervis Sieb. et Zucc.*　リョウブ科　（図版20－６）

北海道南部、本州、四国、九州等温帯下部から暖帯にかけて分布する。樹高３～７ｍ、胸高直径25cmに達する落葉小高木で、若葉は食用となる。散孔材で木口面には比較的小さい道管が一様に拡がっている。

7　シダレヤナギ　*Salix babylonica L.*　ヤナギ科　（図版20－７）

本州、四国、九州と温帯から暖帯にかけて広く栽培されている。樹高17m、胸高直径70cmに達し、流水性の水湿地に育つ落葉高木で中国中部原産といわれている。散孔材で楕円形の道管は比較的密に分布している。

8　イヌブナ　*Fagus japonica Maxim.*　ブナ科　（図版20－８）

日本特産で本州、四国、九州と温体に分布する。樹高25m、胸高直径70cmに達する落葉高木でブナのような大群落はなく、ブナよりやや低いところに自生する。散孔材で広い光沢を持った放射組織を有する。組織、構造ともほとんどブナと同じである。試料中７点が確認され、４号溝東側に集まる。

9　ハクウンボク　*Styrax obassia Sieb. et Zucc.*　エゴノキ科　（図版21－９）

北海道、本州、四国、九州、中国等温帯に分布する。樹高10m、胸高直径30cmに達する落葉小高木で、種子からは油を取り蠟燭を作る。道管は木口面では肉眼で辛うじて認められ、それらがややまばらに散在している。試料中２点が確認されている。

10　ヌルデ　*Rhus javanica Linn.*　ウルシ科　（図版21－10）

北海道、本州、四国、九州、中国、インド等温帯から熱帯にかけて分布する。樹高10m、胸高直30cmに達する落葉小高木で山野に普通に生育する。環孔材で孔圏を形成する道管はかなり大きい。

11　シラカシ　*Quercus myrsinaefolia Blume*　ブナ科　（図版21－11）

本州、四国、九州、済州島等暖帯に分布する。樹高15～20m、胸高直径１mに達する常緑高木で、関東では生垣や防風樹とし、果実は食料となる。心辺材の区別は不明瞭で、道管の管孔はあまり大きくない。またこの属の材は土中で腐りにくい。

12　アラカシ　*Quercus glauca Thunb.*　ブナ科　（図版21－12）

本州(宮城県以南)、四国、九形、台湾、ビルマ等暖帯に分布する。樹高18m、胸高直径60cmに達する暖帯の山野に極めて普通な常緑高木でしばしばシイとともに優占する。管孔はやや大きめであるがまばらである。

13　アサダ　*Ostrya japonica Sarg.*　カバノキ科　（図版22－13）

北海道(特に日高、十勝地方)、本州、四国、九州、朝鮮等温帯に分布する。樹高15m、胸高直径60cmに達する山地に生える落葉高木である。散孔材で道管は単独あるいは２～４個接続していることが多い。

14　アカメガシワ　*Mallotus japonicus Muell. Arg.*　トウダイグサ科　（図版22－14）

日本特産で本州、四国、九州に自生する。樹高10m、胸高直径30cmに達する落葉高木である。１～４列で孔圏を形成し、孔圏内の道管は大きい。

15　エゴノキ　*Styrax japonica Sieb. et Zucc.*　エゴノキ科　（図版22－15）

北海道、本州、四国、九州、朝鮮、中国と温帯下部、暖帯、亜熱帯にかけて分布する。樹高10m、胸高直径30cmに達する落葉小高木で山地や原野の小川のふちに生える。散孔材で年輪界は明確。道管は木口面に拡がり、中には数個の管孔が連接しているものもある。

16　ツバキ　*Camellia japonica L.*　ツバキ科　（図版22－16）

本州、四国、九州等温帯に分布する。樹高18m、胸高直径50cmに達する常緑高木で海岸、山中に育生し、種子からは椿油がとれる。道管の管孔は微細で数多く存在する。試料中２点が確認され、種子も出土している。

17　モミ　*Abies firma Sieb. et Zucc.*　マツ科　（図版23－17）

日本特産で本州（秋田県から南）、四国、九州と温帯下部から暖帯にかけて分布し、日本海側には少い。樹高45m、胸高直径1.5mに達する常緑高木で、混交林を作り純林はまれである。年輪界の明瞭な針葉樹林で試料中２点が確認されており、いづれも加工木である。

18　アベマキ　*Quercus variabilis Blume*　ブナ科　（図版23－18）

本州、四国、九州、台湾等暖帯に分布する。樹高15m、胸高直径60cmに達する落葉高木である。有用な環孔材で心辺材の境はあまり明確ではない。

19　コナラ　*Quercus serrata Thunb.*　ブナ科　（図版23－19）

北海道、本州、四国、九州、朝鮮と温帯下部から暖帯にかけて分布する。樹高15m、胸高直径60cmに達する落葉高木で、乾燥や酸性の土壌にもよく生育する。孔圏には大きい管孔が１～３列に並んでいる。４号溝からは堅果も数点出土している。

20　ハンノキ　*Alnus japonica Steud.*　カバノキ科　（図版23－20）

北海道、本州、四国、九州、台湾等温帯から亜熱帯にかけて分布する。樹高15m、胸高直径60cmに達する落葉高木で、水湿のある低地によく生える。放射孔的散孔材で道管は多数散在している。試料中からは３点が確認されている。

21　トチノキ　*Aesculus turbinata Blume*　トチノキ科　（図版24－21）

日本特産で北海道、本州、四国、九州に自生し、特に東北、北海道南部に多く分布する。樹高25m、胸高直径２mに達する落葉高木で深山の谷間に多い。有用な散孔材で年輪はやや不明瞭。道管は全体にまばらに拡がり、中には半円形で接合しているものもある。試料中からは２点確認されているが、種子・果実は４号溝の上面から多数出土している。

22　カヤ　*Torreya nucifera Sieb. et Zucc.*　イチイ科　（図版24－22）

本州（宮城県以南）、四国、九州等温帯下部から暖帯にかけて分布する。樹高25m、胸高直径２mに達する直幹性常緑高木で山林に散生し、種子は食用、薬用となる。樹脂道のない針葉樹林で年輪は狭い。

23　ヤマウコギ　*Acanthopanax spinosus L. f. Miq.*　ウコギ科　（図版24－23）

北海道、本州と温帯から暖帯にかけて分布する。樹高２～４m、葉柄３～７cmの落葉低木で枝には刺があり、材としての用途はほとんどないが若芽は食用となる。散孔材であり、小さな道管が多数集まって接線方向に配列している。

24　イチイ　*Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.*　イチイ科　（図版24－24）

北海道、南千島、本州、四国、九州、シベリア東部等温帯上部に分布する。樹高18m、胸高直径75cmに達する常緑高木で深山の林に郡生する。樹脂道のない針葉樹材で、心辺材の境は明瞭で年輪は狭い。

第３表　採集樹木一覧表

No.	試料No.	グリッド	樹　　種	図版No.	分　布　帯	備　　考
1	K－1	C－2	クリ	19－1	温帯下部～暖帯	自然木
2	K－2	〃	ハゼノキ	19－2	暖帯～熱帯	〃
3	K－4	B－2	クリ	19－1	温帯下部～暖帯	〃
4	K－5	〃	〃	〃	〃	〃
5	K－3	C－2	〃	〃	〃	〃
6	K－6	B－2	〃	〃	〃	〃
7	K－7	〃	カキ	19－3	暖帯	〃
8	K－8	B－3	クリ	19－1	温帯下部～暖帯	〃
9	K－9	〃	〃	〃	〃	〃
10	K－10	C－3	サカキ	19－4	亜熱帯～暖帯	〃
11	K－11	B－3	スギ	20－5	温帯下部～暖帯	〃
12	K－12	〃	リョウブ	20－6	〃	〃
13	K－14	〃	クリ	19－1	〃	〃
14	K－16	C－3	シダレヤナギ	20－7	温帯～暖帯	〃
15	K－17	〃	イヌブナ	20－8	温帯	〃
16	K－18	〃	ハクウンボク	21－9	〃	〃
17	K－19	〃	〃	〃	〃	〃
18	K－20	〃	ヌルデ	21－10	温帯～熱帯	〃
19	K－21	〃	シラカシ	21－11	暖帯	〃
20	K－22	〃	アラカシ	21－12	〃	〃
21	K－24	〃	スギ	20－5	温帯下部～暖帯	〃
22	K－25	〃	アサダ	22－13	温帯	〃
23	K－26	〃	クリ	19－1	温帯下部～暖帯	〃
24	K－27	〃	イヌブナ	20－8	温帯	〃
25	K－28	C－3.4	クリ	19－1	温帯下部～暖帯	〃
26	K－30	〃	アカメガシワ	22－14	暖帯	〃
27	K－29	〃	エゴノキ	22－15	温帯下部～暖帯～亜熱帯	〃
28	K－31	C－4	イヌブナ	20－8	温帯	〃

No.	試料No.	グリッド	樹　　種	図版No.	分　布　帯	備　　考
29	K－33	D－4	サ　カ　キ	19－4	亜熱帯～暖帯	自　然　木
30	K－32	〃	ツ　バ　キ	22－16	温　　帯	自然木、種子出土
31	K－37	C－4	モ　　ミ	23－17	温帯下部～暖帯	加工木、厚さ5cm
32	K－40	〃	〃	〃	〃	〃　、厚さ3cm
33	K－42	〃	ス　　ギ	20－5	〃	〃　、厚さ2cm
34	K－44	〃	ア　ベ　マ　キ	23－18	暖　　帯	自　然　木
35	K－45	〃	ス　　ギ	20－5	温帯下部～暖帯	加工木、厚さ2cm
36	K－48	〃	ク　　リ	19－1	〃	自　然　木
37	K－50	〃	コ　ナ　ラ	23－19	〃	自然木、種子出土
38	K－51	〃	ク　　リ	19－1	〃	加工木、厚さ3cm
39	K－52	B－4	ハ　ン　ノ　キ	23－20	温帯～亜熱帯	自　然　木
40	K－53	〃	ク　　リ	19－1	温帯下部～暖帯	〃
41	K－55	〃	ト　チ　ノ　キ	24－21	温　　帯	自然木、種子出土
42	K－57	A－4	ハ　ン　ノ　キ	23－20	温帯～亜熱帯	自　然　木
43	K－59	A－5	ツ　バ　キ	22－16	温　　帯	自然木、種子出土
44	K－58	B－5	ト　チ　ノ　キ	24－21	〃	〃　　〃
45	K－60	〃	イ　ヌ　ブ　ナ	20－8	〃	自　然　木
46	K－61	〃	〃	〃	〃	〃
47	K－63	〃	〃	〃	〃	〃
48	K－64	〃	カ　　ヤ	24－22	温帯下部～暖帯	〃
49	K－71	〃	ス　　ギ	20－5	〃	加工木、厚さ6cm
50	K－74	〃	ハ　ン　ノ　キ	23－20	温帯～亜熱帯	自　然　木
51	K－73	〃	ヤ　マ　ウ　コ　ギ	24－23	温　帯　～　暖　帯	〃
52	K－75	B C－5	イ　チ　イ	24－24	温　帯　上　部	〃
53	K－77	C－5	イ　ヌ　ブ　ナ	20－8	温　　帯	〃
54	K－79	C－2	ス　　ギ	20－5	温帯下部～暖帯	〃
55	K－81	〃	〃	〃	〃	〃
56	K－80	〃	〃	〃	〃	〃
57	K－85	〃	〃	〃	〃	〃

種子（図版11）

樹木と同じように、種子もまた３、４号溝から数多く出土している。しかし、種子のサンプリングは掘り下げの途中に肉眼で見えたものだけを随時抽出したに止まっており、３、４号溝全体を網羅するには到底至っていない。同定の結果、トチノキ、オニグルミ、コナラ、ツバキ、モモが確認された。なお果実・種子・核の計測は残存率50％以上のものについて行った。

トチノキ　*Aesculus turbinata Blume*　トチノキ科

３、４号溝出土の果実・種子の計測総数65点のうち半数以上の33点を占めている。温帯性の植物で果実は３裂し、中の種子は赤褐色、下半部には大きいヘソがある。

オニグルミ　*Juglaus mandschurica Maxim.*　クルミ科

トチノキに次ぐ25点が出土している。核は2.4cm～3.4cmで大きさ、形にも変化がある。本樹は小川に沿って、または水分の多い土地に生える落葉高木である。

コナラ　*Quercus serrata Thumb.*　ブナ科

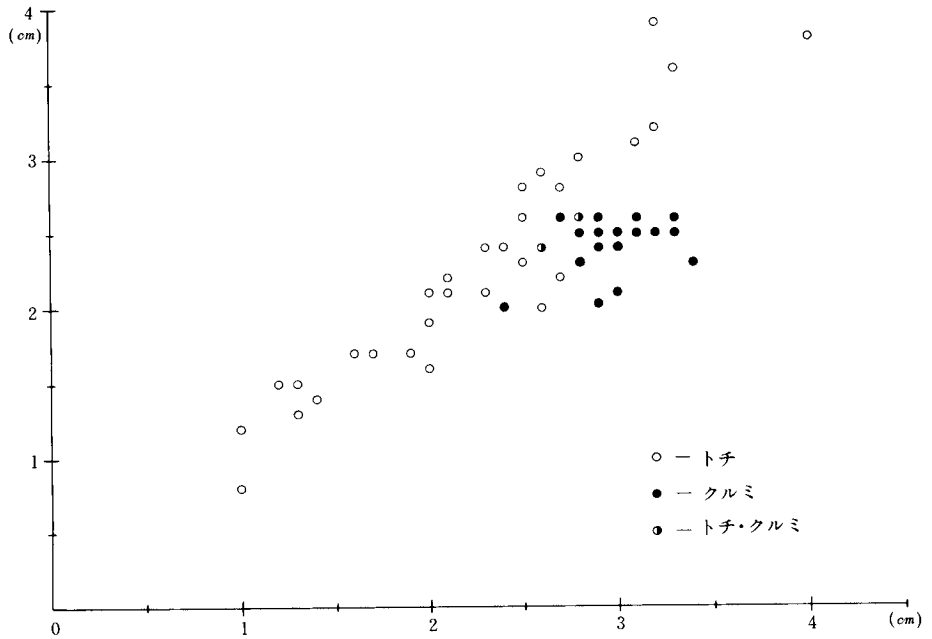
堅果は長楕円形、総苞は浅い杯形を呈す。４号溝から３点の出土がある。

ツバキ　*Camellia japonica L.*　ツバキ科

暖帯性の植物で、４号溝から果実・種子の２点が出土している。

モモ　*Prunus persica Batsch.*　バラ科

核は先の尖った卵形を成し、扁平で表面に深いしわがある。４号溝から２点の出土がある。



第28図　トチノキ、オニグルミの果実・核法量分布図

第４表　採集種子一覧表

番号	出　土　位　置	名　称	長(cm)	幅(cm)	遺存状態	備考
1	Ｂ３区　落ち込み下層	オニグルミ	2.8	2.3	完　形	核
2	〃　〃	トチノキ	2.3	2.1	〃	果実
3	〃　〃	〃	2.5	2.6	〃	〃
4	〃　〃	〃	2.6	2.9	1/3 欠	果皮
5	〃　〃	〃	1.4	1.4	一部欠	種子
6	〃　４号溝トレンチ内	コナラ	1.4	1.1	1/2 欠	総苞
7	〃　〃	オニグルミ	2.9	1.9	完　形	核
8	〃　〃	トチノキ	2.6	2.4	一部欠	果実
9	〃　〃	〃	2.5	2.8	1/2 欠	〃
10	〃　〃	オニグルミ	3.0	2.4	完　形	核
11	〃　〃	〃	2.9	2.6	1/2 欠	〃
12	〃　〃	〃	2.6	2.4	〃	〃
13	Ｃ３区　落ち込み下層	トチノキ	1.2	1.5	完　形	種子
14	〃　〃	コナラ	1.6	1.0	〃	堅果
15	〃　〃	オニグルミ	2.8	2.6	1/2 欠	核
16	〃　〃	ツバキ	2.6	2.0	完　形	果実
17	〃　〃	コナラ	1.6	1.0	一部欠	堅果
18	〃　〃	ツバキ	2.4	1.5	2/3 欠	種子
19	Ｃ４区　〃	オニグルミ	3.0	2.5	完　形	核
20	〃　〃	トチノキ	2.8	2.6	〃	果実
21	〃　〃	オニグルミ	2.9	2.5	〃	核
22	〃　〃	〃	2.4	2.0	〃	〃
23	〃　落ち込み下層、４号溝上面	トチノキ	3.2	3.9	一部欠	果実
24	〃　落ち込み下層	〃	2.7	2.8	〃	種子
25	C4･5区　〃	〃	4.0	3.8	完　形	果実
26	Ｂ４区　落ち込み下層、４号溝上面	オニグルミ	2.7	2.6	〃	核
27	〃　〃	トチノキ	3.3	3.6	1/2 欠	果実
28	Ｄ４区　落ち込み下層	〃	1.0	1.2	一部欠	種子
29	Ｂ３区　４号溝トレンチ内	〃	1.0	0.8	〃	〃
30	A･B4区　落ち込み下層	モモ	2.6	1.8	〃	核
31	Ａ５区　４号溝上面	トチノキ	2.0	1.6	完　形	種子
32	〃　〃	〃	2.0	1.9	一部欠	〃

番号	出土位置	名称	長(cm)	幅(cm)	遺存状態	備考
33	A 5 区　4 号溝上面	トチノキ	1.3	1.3	完形	果実
34	A・B5区 落ち込み下層、4 号溝上面	オニグルミ	2.9	2.4	〃	核
35	〃　〃	〃	3.3	2.5	〃	〃
36	〃　〃	〃	3.3	2.5	〃	〃
37	〃　〃	〃	3.3	2.6	〃	〃
38	〃　〃	〃	3.0	2.1	一部欠	〃
39	〃　〃	〃	3.0	2.5	〃	〃
40	〃　〃	〃	2.7	2.6	1/2 欠	〃
41	A・B5区 落ち込み下層、4 号溝上面	〃	3.1	2.6	〃	〃
42	〃　〃	〃	3.1	2.5	〃	〃
43	〃　〃	〃	3.0	2.5	〃	〃
44	〃　〃	トチノキ	2.5	2.3	完形	果実
45	〃　〃	〃	2.6	2.5	〃	〃
46	〃　〃	〃	2..	2.1	〃	〃
47	〃　〃	〃	2.1	2.1	一部欠	〃
48	〃　〃	〃	2.2	2.1	〃	〃
49	〃　〃	〃	1.9	1.7	〃	〃
50	〃　〃	〃	1.7	1.7	〃	〃
51	〃　〃	〃	2.3	2.1	〃	〃
52	〃　〃	〃	2.4	2.4	1/3 欠	〃
53	〃　〃	〃	3.2	3.2	〃	〃
54	〃　〃	〃	2.8	3.0	〃	種子
55	〃　〃	〃	2.3	2.4	一部欠	〃
56	〃　〃	〃	1.3	1.5	完形	〃
57	〃　〃	〃	1.6	1.7	〃	〃
58	〃　〃	〃	2.7	2.2	〃	果実
59	〃　〃	モモ	2.4	2.0	〃	核
60	B 5 区　落ち込み	オニグルミ	3.2	2.5	1/2 欠	〃
61	〃　〃	トチノキ	3.1	3.1	〃	果皮
62	D 2 区　3 号溝上層	オニグルミ	2.8	2.5	完形	核
63	〃　〃	〃	3.4	2.3	〃	〃
64	〃　〃	〃	2.8	2.5	〃	〃
65	〃　〃	〃	3.0	2.4	1/2 欠	〃

V　まとめ

本遺跡は弥生時代後期～江戸時代までの遺物を包含するいわゆる複合遺跡ではあるが、人々の生活を直接反映している遺構は少ない。遺構の中心を成すものは、調査区中央に横たわる落ち込みである。しかしこれは、人為的に構築された溝状遺構とは考え難く、自然の造形物として理解している。ここでは落ち込みを中心とした自然流水路及び遺構の埋没過程を時間的に追いつつ、簡単なまとめを行ってみたい。

第１期　３、４号溝

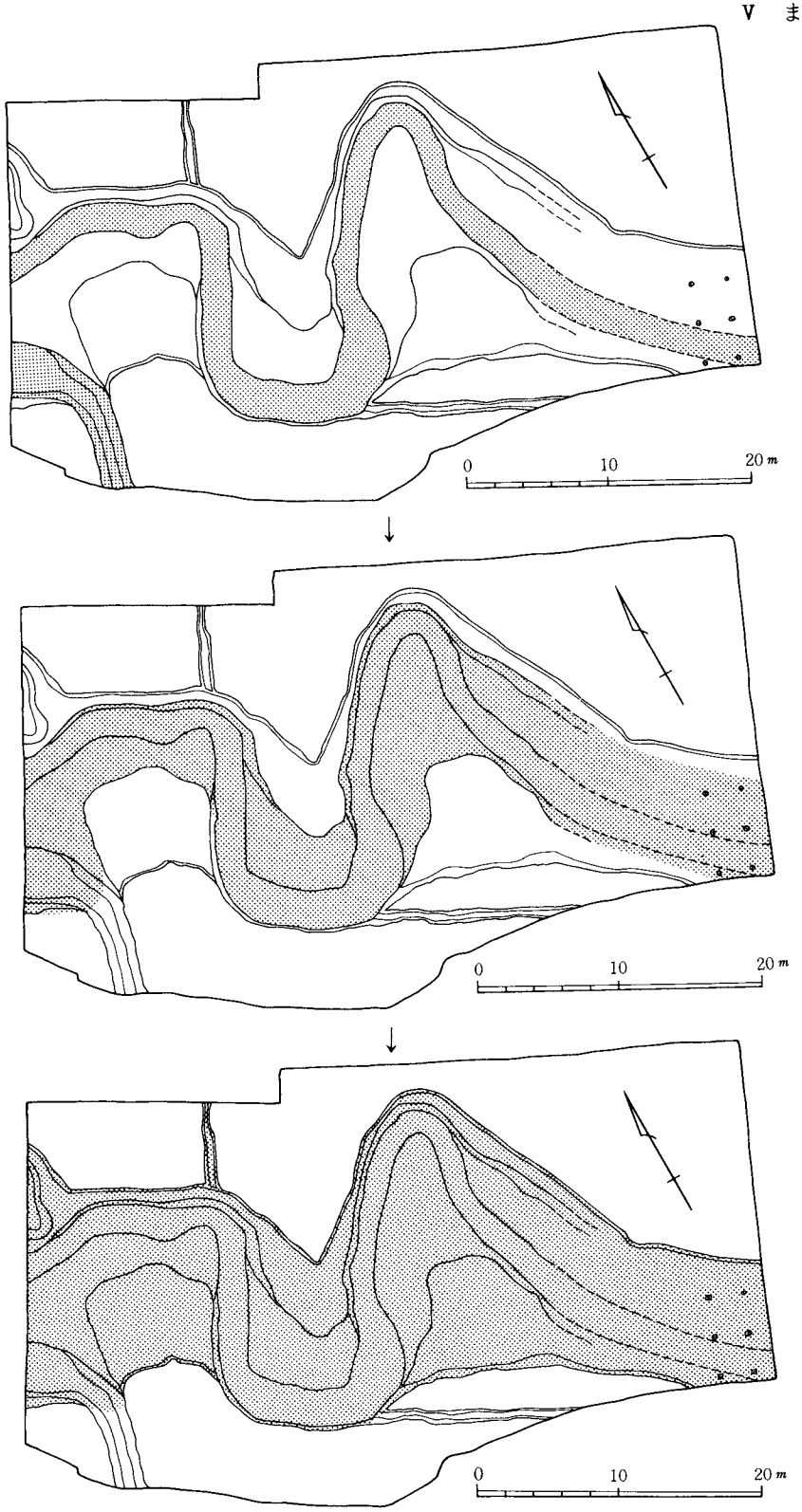
３、４号溝は、それぞれ砂質土、粘性の有機質土（植物遺体）を主体とする覆土を持つが、両溝落ち込み内直上層の堆積状況などから、ほとんど同時期に埋没したことが推測できる。３号溝最下層からは法仏Ⅰ式期～月影Ⅰ式期に比定される遺物が出土する（第24図１～９）が、最下層は溝内の一部でしか確認されていない。その点３号溝上層は山際から落ち込み内へと切れ目なく続いており、本来の沢的性格は当層に求められよう。出土遺物も大型樹木、オニグルミの核が検出され、４号溝トレンチ内及び上面からの植物遺体と共通性を持っている。これらのことより３号溝上層と４号溝は弥生時代末期以降には同時に機能していたことが窺えるが、古墳時代前期にどのような原因で埋没したかは定かではない。

第２期　落ち込み下層

３、４号溝が埋没した後に長い時間をかけて堆積した層で、大きく２層に分かれる。しかし、出土遺物を層序として捉えることはできなかった。土器は包含層に次いで多く出土し、須恵器ＭＴ15型式～ＴＫ10型式（第23図２、５、６）を下限とする。上限は月影式期から古府クルビ式期への移行期（第25図２、３、13）に求められ、３、４号溝の埋没年代を考える上での指標となる。全体に下層の土器は摩耗が激しく、一部を除いて接合できるものはほとんどない。このことは、落ち込みが３、４号溝の埋没後も流水路として機能していたことを意味している。その中で完形品または完形品として復元できた土師器（第26図19、20、21、27、28）、須恵器（第23図５、６）の全てがＢ２区、Ｂ３区、Ａ５区、Ｂ５区という調査区北側から検出されている。果たしてその場所だけが淀みであったのか、平野部からの人為的な土器の廃棄があったのかは明らかではないが、実用品としてよりも祭祀的性格が強いとされる丸底の小型手捏ね土器２点(27､28）の存在は興味が持たれる。時期的には21と５、６が６世紀前半頃に位置づけられ、19、20、27、28がそれらに先行するものと思われる。なお、本遺跡背後の「ガメ山」上に立地する亀山玉造遺跡の住居跡内からは４世紀～５世紀の遺物が出土しており、落ち込み下層と同時期に併存していたことが窺える。

第３期　落ち込み上層

落ち込みは浅くなり20cm～40cmの深さを持つだけになる。遺物は古墳時代の土師器、奈良・平安時代の須恵器（第23図９、19）を少量出土する。落ち込み下層とは時期を画するが、北側上場付近に細かく堆積する暗褐色の植物遺体は、水際に生える草本類の存在を示唆しており、９世紀の段階でも落ち込みはまだ水を湛えていたことが推測できる。



第29図　落ち込み埋没過程予想図（第１期→第２期途中→第２期～第４期）

第４期　落ち込み最上層

落ち込みはまだ若干凹みが残るが、堆積土は水気をあまり感じさせない。中世の遺物を少量含むだけで、はっきりとした遺構は検出できず、唯一最上面で認められた２号溝と掘立柱建物は背後の「ガメ山」の裾部を削って構築されている。そのため最上層は中世段階で埋めたてられた整地土の一部ではないかと見ている。遺物は珠洲、加賀（第21図５、13）、青磁、土師質土器（第22図１、20～22、25）を出土する。年代は13世紀～14世紀に当てられるが、その時期には弥生時代より続いた自然流水路は完全に姿を消してしまっていたのである。

第５期　包含層

中世の遺物を最も多く出土する。しかし軟質のものは大部分が細かく、また摩耗しているため梯川の氾濫に起因する２次堆積層の可能性が強い。軽海郷は古代から中世にかけての加賀国能美郡５郷の一つとして知られており、郷内にもそれに関係する遺跡、寺院跡が点在している。包含層の中世遺物を見ると古いものでは白磁玉縁碗（第22図７、８、10、11）が挙げられる。７、８は小さい玉縁を持ち、貫入がはいるところから大宰府編年[8]の白磁碗Ⅱ類に比定されよう。10は同Ⅱ類、11は削り出しの浅い同Ⅳ類の高台と思われる。時期的には12世紀前後を考えている。次の13世紀～14世紀にかけての遺物は包含層内では最も数が多い。青磁の蓮弁文碗、無文の小型碗、盤（第22図２～６）、白磁の水注（第22図12）はある程度の時期幅はあるものの、その範囲内に収まるものであろう。また珠洲、越前、加賀、そして土師質土器の多くもその範疇に含まれる。しかしそれが15世紀になると遺物の数は減少し、白磁の多角坏（第22図９）、瀬戸・美濃、土師質土器の一部が僅かに残るだけである。このように包含層中世遺物の中心期は13世紀～14世紀に求められ、同時期には軽海中世墓址群が営まれている。また武蔵国金沢称名寺領となっていた時期（1329年～1380年）にも重なり、軽海郷の中世における盛時の一端を裏付けている。

植　物　遺　体

本遺跡では、３号溝上層、４号溝内及びその上面を中心にして、多量の植物遺体が出土している。現在の軽海周辺は大部分が水田によって占められているが、一般に日本列島で原植生（自然植生）が維持されていたのは、人間が植生に手を加える以前の縄文時代末期頃までと言われている。[9] それ以降、人間の衣食住を中心とする欲求は周辺の植生を大きく変化させ続けてきた。しかしこのことは逆に、植生及びその変化を知ることが、当時の人間の生活空間を知る上で欠かせない作業の一つであることを示しており、植生研究の意義は大きいと考える。

当時の自然景観は、植生、古環境の復元によってある程度想定し得るが、その方法として植物遺体（樹木、種子、葉、実、化石など）研究や花粉分析などが通常行われている。本遺跡から得られたサンプルは樹木57点、種子他65点のみであり、質量ともに良好とは言い難く、また一部カキ、シダレヤナギなどの不確定要素が残る樹種も存するが、[10] その範囲内での古植生の傾向性を検討してみたい。

３号溝上層、４号溝は前述した通り、弥生時代末期を経て、古墳時代前期（古府クルビ式期）前後に埋没したと考えられる溝である。溝内には多数の根材が存在し、単層に近い層序、４号溝

最南部の様相などからは、遺跡周辺で生育した樹木が短期間のうちに埋没したという印象を受ける。また両溝より少し離れた位置からも若干の樹木が検出されている。57点の試料中、夏緑広葉樹林（落葉広葉樹林）が過半数以上の38点（66.7%）を占め、以下針葉樹林13点（22.8%）、常緑広葉樹林（照葉樹林）6点（10.5%）と続く。中でも夏緑広葉樹のハンノキ、エゴノキ、そして多量のオニグルミの核の存在は、本遺跡及びその周辺が、これらの種が生育しやすい水湿性の地であったことを示している。3号溝上層より出土したオニグルミは、おそらく背後の山合いをぬって流れてきたものであろう。一方、イヌブナ、ハクウンボク、ツバキ、コナラをはじめとする乾性、中性植物の数も多く、周辺の丘陵地、山裾、または溝が機能する以前の乾地に混在していたのかもしれない。次に加工木（板材）としては、4号溝内よりクリが1点、モミが2点、スギが3点確認されている。その中でモミは全試料中唯1点のマツ科であり、しかもその2点共が加工木であるところから、遺跡周辺の種ではなく、他地域からの搬入品である可能性も考えられる。またクリ、スギの加工木の存在は、当時既に周辺の樹木に人間の手がはいっていた事実を示すものであろう。

種子、核はトチノキ、オニグルミ、コナラ、ツバキ、モモなど数十点を検出したが、トチノキ、オニグルミは十分に食用に耐える大きさを持っている。疑問なのは樹木試料中最も数の多い13点を占めるクリの種子が確認できなかったことで、4号溝西側に樹木が集中していることなどとも併せて、栽培種としての可能性も提示しておきたい。

さて、では当時の植生と縄文時代末期頃の原植生との間にどれほどの差異が認められるのであろうか。今からおよそ2600年前の軽海周辺の原植生を見ると、シイ林、タブ林、ウラジロガシ林を主体としたいわゆる常緑広葉樹林の分布域となっていることが分かる。[11] これを本遺跡出土の樹種と比較してみると、既に当地はシラカシ、アラカシなどの厳しい環境変化に弱い常緑広葉樹林の占める割合いが低くなり、かわりにクリ、イヌブナ、コナラなどの夏緑広葉樹林が優占する二次林的な森林を構成していたことが推察できる。また当期は気温、海面水準とも現レベルに近づきつつあり、現在の汀線付近に点在する安原埋没林、打木埋没林など一連の埋没林が形成された時期でもある。[12] 埋没林の樹種の中には本遺跡から検出されたハンノキ、クルミ類なども存在し、古気候を考える上で何らかの関連性を想定できるかもしれないが、3、4号溝の埋没原因は周辺地域をも含めた全体の資料に乏しく、明らかにはし得ない。

なお、この後、人間の自然への働きかけがより一層進んだであろうことは本調査からも明らかであるが、現在の軽海町では大規模な宅地化が進み（図版2・3）、周辺の丘陵部はほとんどがコナラ林、アカマツ林、スギ植林によって占められている。そして本遺跡背後の斜面にも同様な植林スギが認められ、当時の植生を窺い知ることは、今では不可能な状況となっている。

以上、落ち込みの埋没過程と植物遺体について簡単に振り返ってみたが、植物遺体に関しての筆者の認識が浅く、樹種鑑定をして頂いた清水哲広氏の試料を十分活用することができなかったことをお詫びする次第である。

註

（1） 飛島市松　『軽海町史』　軽海町史協力委員会　1981

（2） 上野与一　「消へ行く遺跡」『石川考古学研究会会誌』　第1号　石川考古学研究会　1949

（3） 小松土地改良事務所　『県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区事業概要』　石川県　1983

（4） 四柳嘉章　『西川島・Ⅰ』　石川県穴水町教育委員会　1980

田嶋正和　『敷地町後方遺跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会　1982

（5） 田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966

『須恵器大成』　角川書店　1981

（6） 谷内尾晋司　「北加賀出土の布留系土器について―北安江遺跡出土の布留系甕の分析から―」『金沢市北安江遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985

（7） 註（6）に同じ

（8） 横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして―」　『研究論集』　4　九州歴史資料館　1978

（9） 石川県環境部自然保護課編　『石川県の動植物』　石川県　1981

（10） 一般にカキ、シダレヤナギは奈良時代以降に日本にはいってきたとされる。

（11） 註（9）に同じ

（12） 里見信生編　『石川県の植生』　石川県林業試験場　1975

（13） 註（12）に同じ

参考文献

柏野義夫編　『石川県の自然環境』　第1分冊　地形地質　石川県　1977

浅香年木・田川捷一他　『角川日本地名大辞典』　17　石川県　角川書店　1981

加能史料編纂委員会編　『加能史料』　平安Ⅱ　石川県　1985

小村茂・室山孝　『軽海中世墓址群―発掘調査概報―』　小松市教育委員会　1973

三上次男他　『貿易陶磁研究』　No.1・2　日本貿易陶磁研究会　1981・1982

上野与一・小村茂　『加賀古陶』　考古学ライブラリー22　ニューサイエンス社　1984

田嶋明人　「漆町遺跡にみる古墳時代土器の変遷」　石川考古学研究会研究発表会資料 1985

藤則雄他　「5、砂丘・埋没林」　『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975

中西哲・大場達之他　『日本の植生図鑑』　〈Ⅰ〉森林　保育社　1983

北村四郎・村田源　『原色日本植物図鑑』　木本編Ⅰ・Ⅱ　保育社　1971・1979

貴島恒夫他　『原色木材大図鑑』　保育社　1977

島地謙他　『木材の組織』　森北出版　1976

鈴木三男他　『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書―自然遺物編―』　埼玉県教育委員会　1982

辻誠一郎他　『中里遺跡』　発掘調査の概要Ⅰ・Ⅱ　中里遺跡調査会　1984・1985

古野毅他　『島根県埋蔵文化財調査報告書第X集』　島根県教育委員会　1983

図　　版

（図版４～６　　西芳寺遺跡
図版７～24　　軽 海 遺 跡）

（図版中の遺物番号は本文挿図中の遺物番号に一致する）

ＥＷ第１トレンチ土層断面

ＮＳ第３トレンチ検出遺構

図版5

EW第3トレンチ(東方より)

EW第3トレンチ(西方より)

EW第3トレンチ2・3号溝

EW第3トレンチ4号溝

9－1

9－2

9－4

9－5

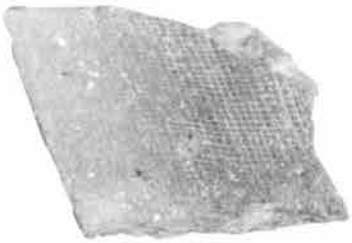
9－6

9－9

9－8

出土土器(第9図)

9－11

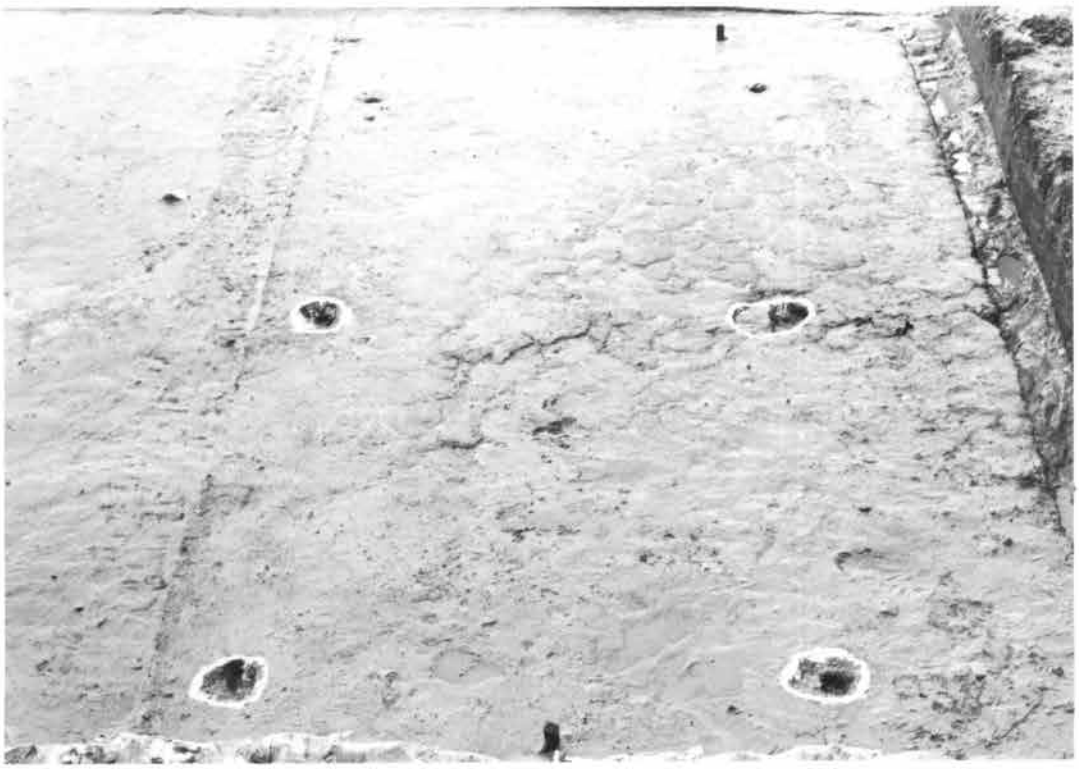

9－12

9－10

9－13

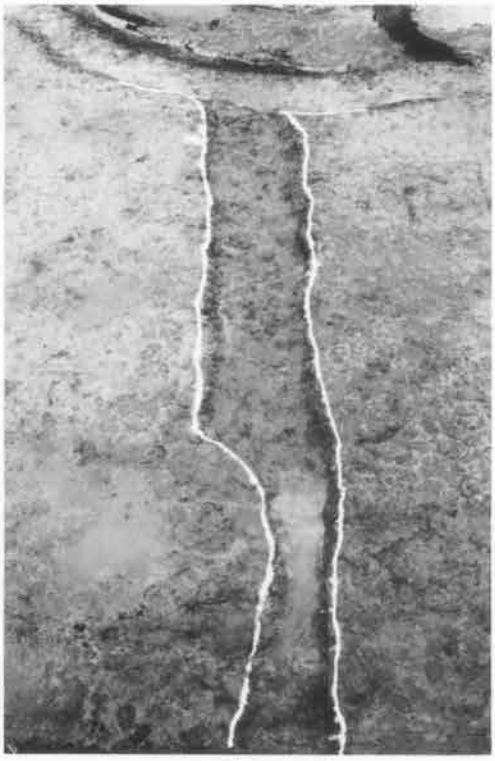
出土瓦片(第9図)

調査前全景(南より)



掘立柱建物(南より)

図版8



1号溝(北より)

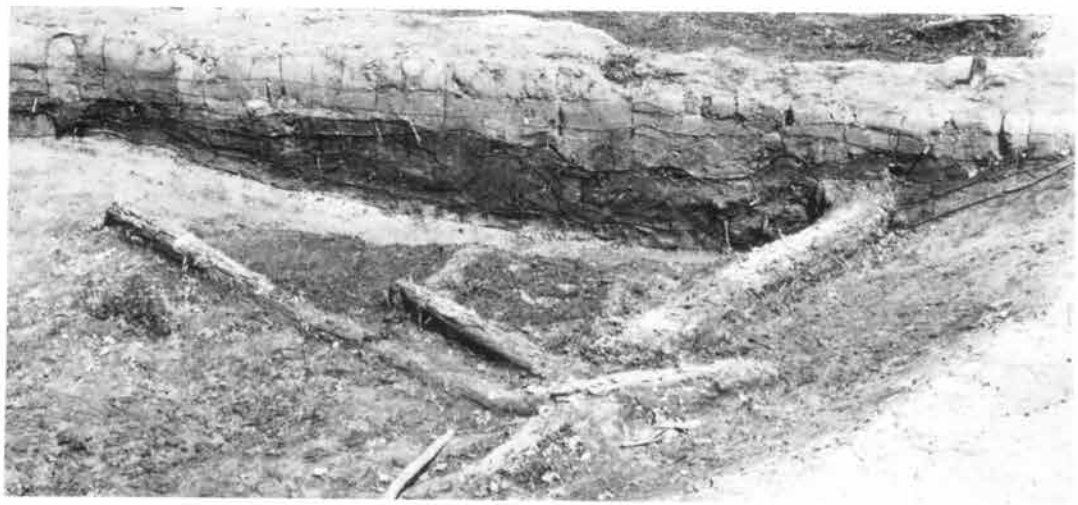
2号溝(東より)

3号溝(南より)

4号溝樹木(クリ)出土状況(西より)

2号溝土層断面(西より)

3号溝土層断面(北より)



4号溝土層断面(西より)

図版10

手捏ね土器出土状況(26－27)

甑形土器把手出土状況(26－30)

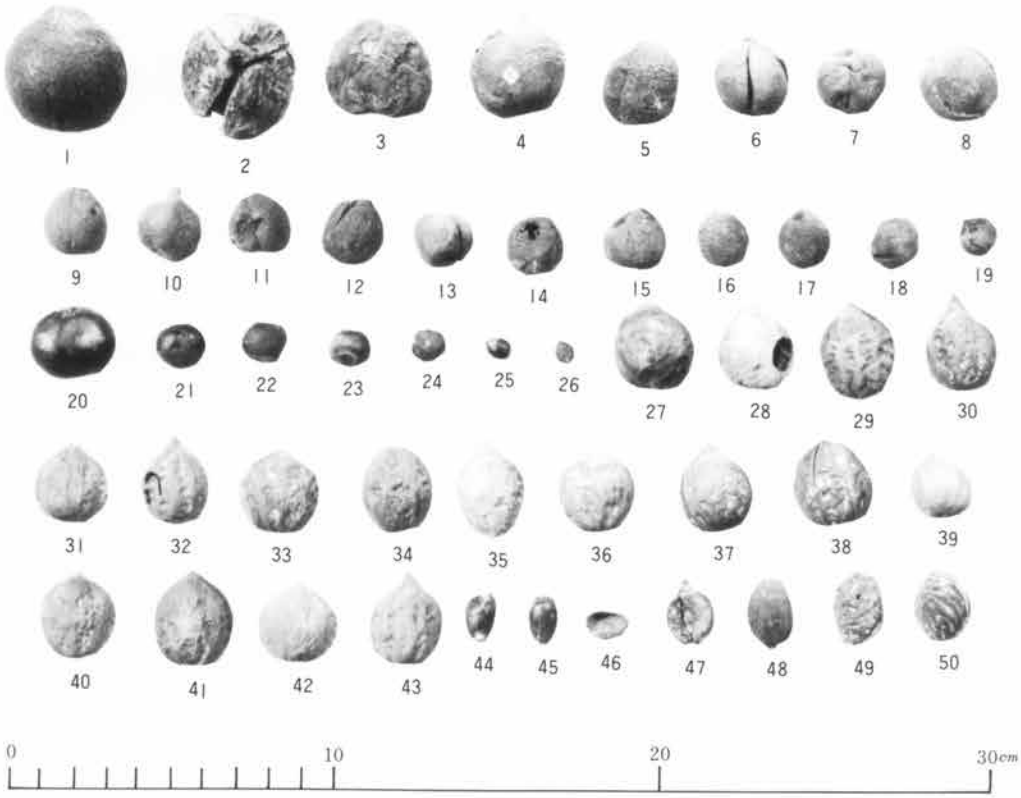
甕形土器出土状況(26－19)

甕形土器出土状況(26－20)

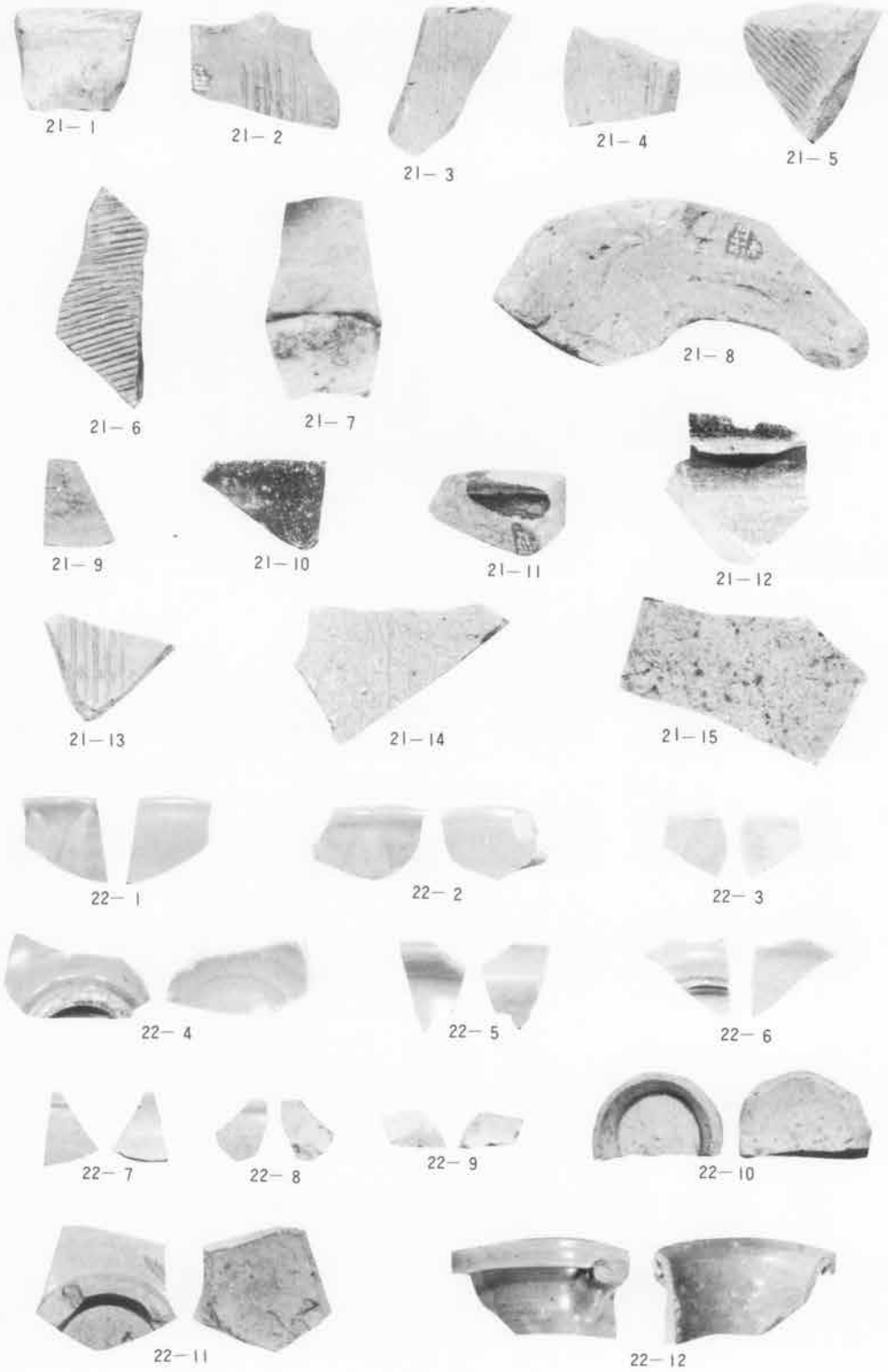
須恵器出土状況(23－5)

須恵器出土状況(23－6)

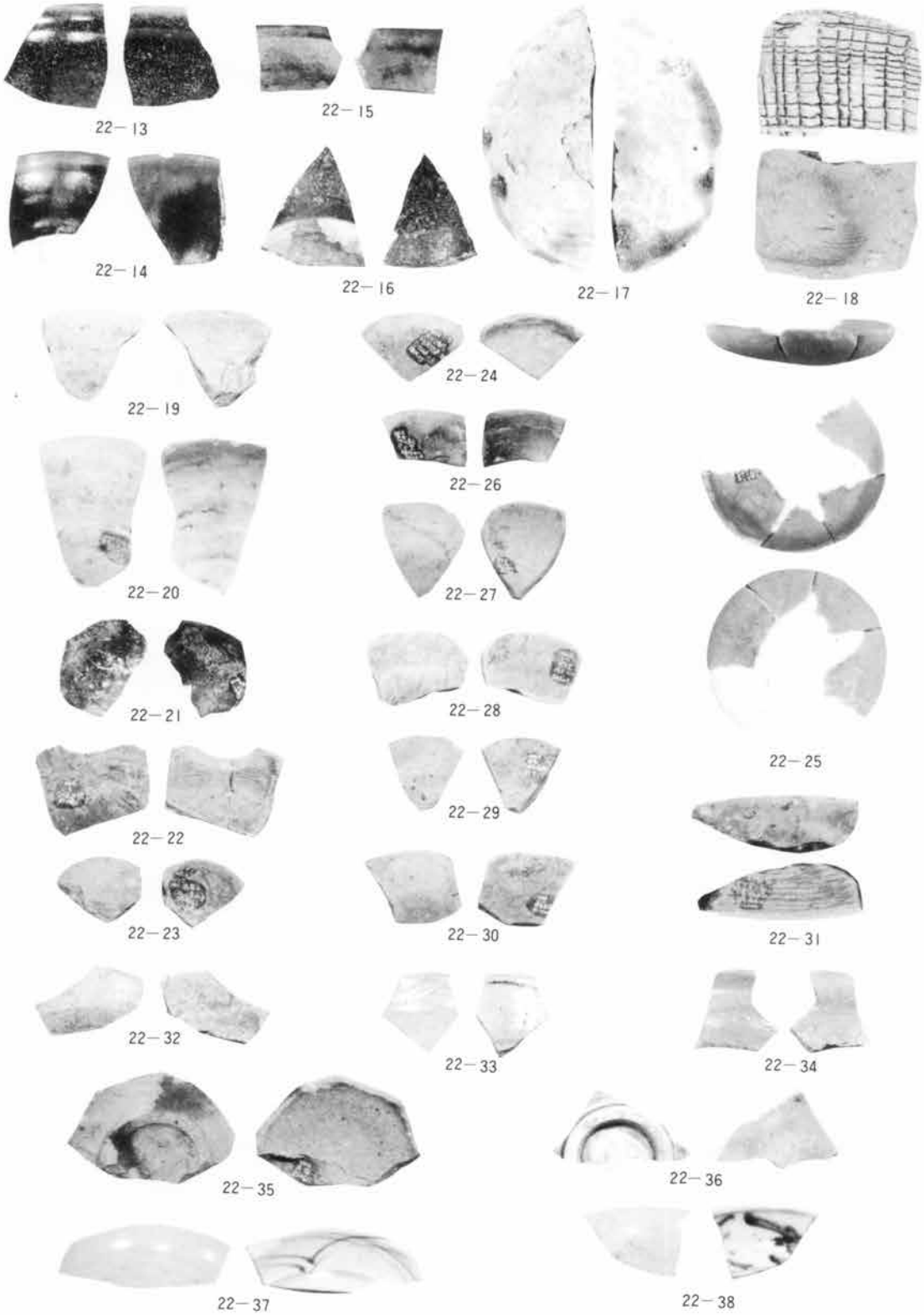
4号溝樹木出土状況(南より)



トチノキ(1～26)、オニグルミ(27～43)、コナラ(44～46)、ツバキ(47、48)、モモ(49、50)


21－1
21－2
21－3
21－4
21－5
21－6
21－7
21－8
21－9
21－10
21－11
21－12
21－13
21－14
21－15
22－1
22－2
22－3
22－4
22－5
22－6
22－7
22－8
22－9
22－10
22－11
22－12

出土土器（第21、22図）

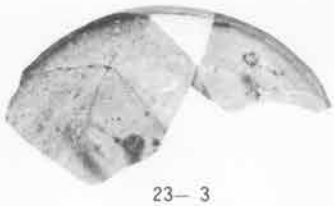

22－13
22－15
22－14
22－16
22－17
22－18
22－19
22－24
22－26
22－20
22－27
22－21
22－28
22－25
22－22
22－29
22－23
22－30
22－31
22－32
22－33
22－34
22－35
22－36
22－37
22－38

出土土器（第22図）

図版14

23－1

23－2



23－3

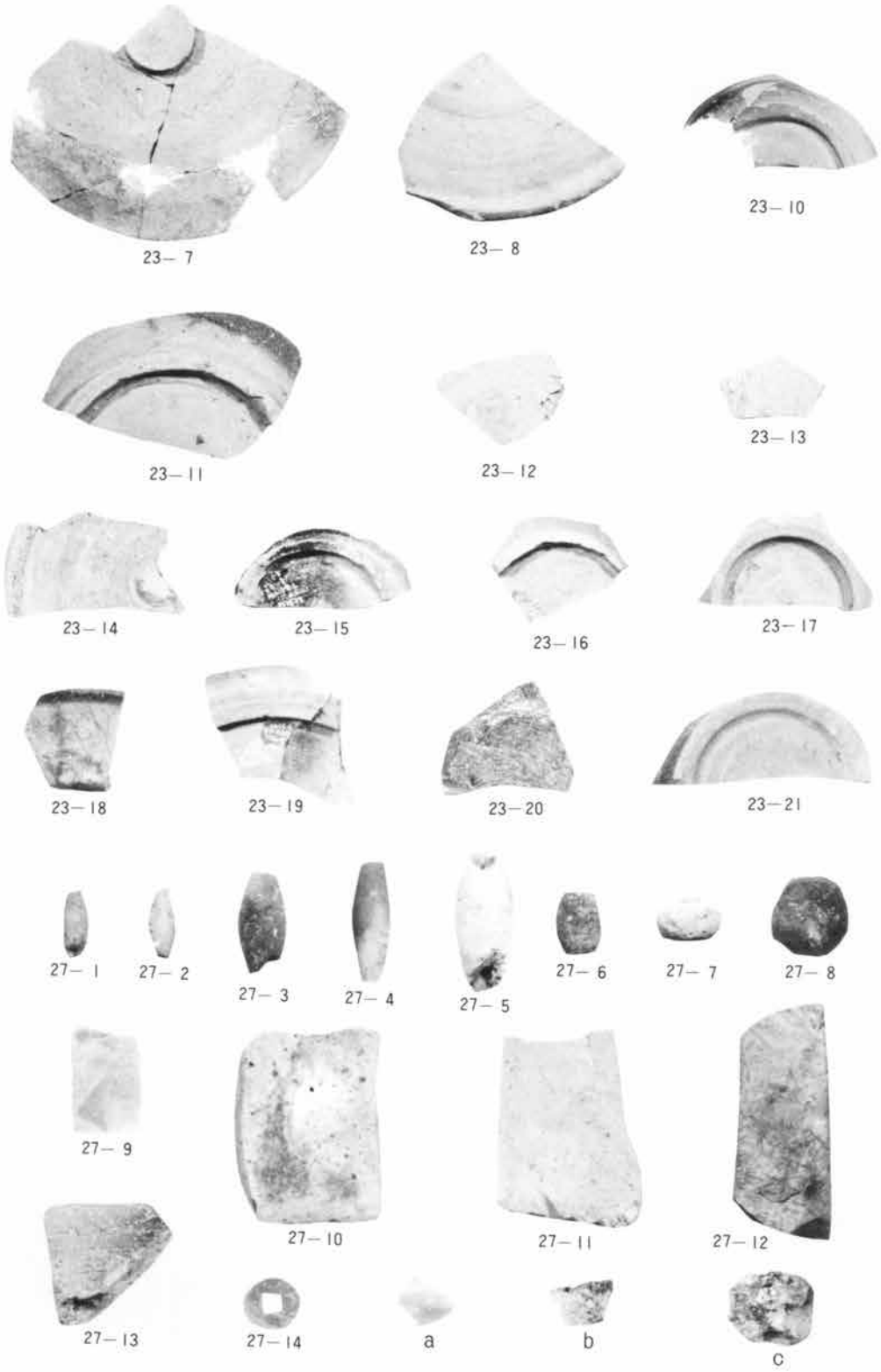
23－4

23－5

23－6

23－9

出土土器（第23図）



出土土器、石器、銭貨（第23、27図）a・緑釉陶器、b・cフイゴ羽口

24－1

24－2

24－3

24－4

24－5

24－6

24－7

24－8

24－9

25－1

25－2

25－3

25－4

25－5

25－6

25－7

25－8

25－9

25－10

25－12

25－11

25－13

25－14

出土土器（第24、25図）

25－15

25－16

26－19

25－17

25－18

26－20

26－21

出土土器（第25、26図）

26－22

26－23

26－24

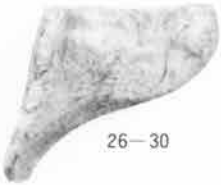
26－25

26－26

26－29

26－27

26－28


26－30

26－31

26－33

26－32

26－34

26－35

26－37

26－38

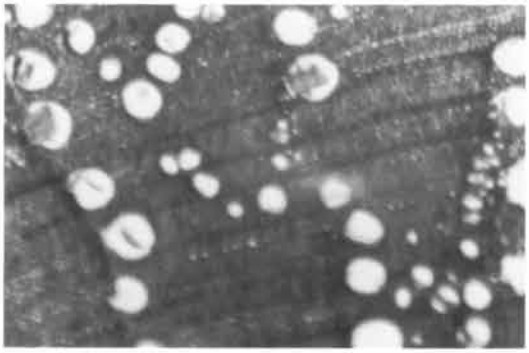
26－36

26－39

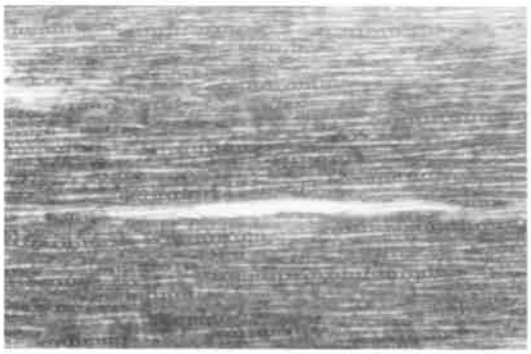
26－40

26－41

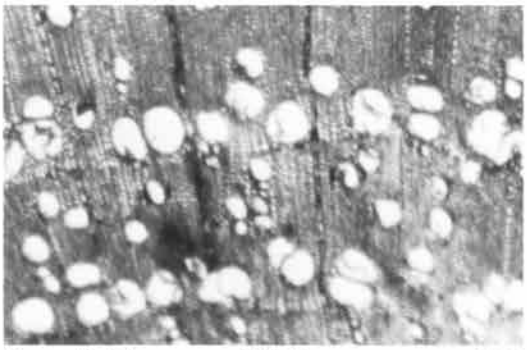
出土土器（第26図）



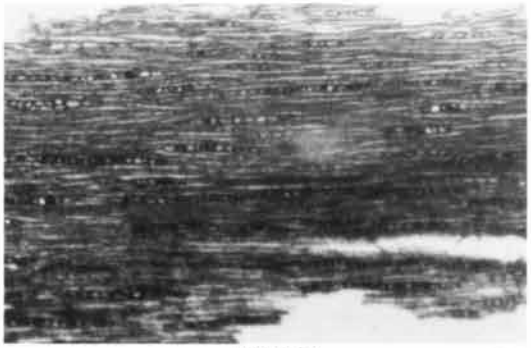
1．クリ　横断面　40×



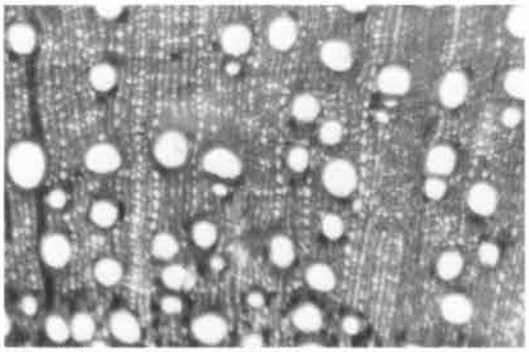
接線断面　40×



2．ハゼノキ　横断面　40×

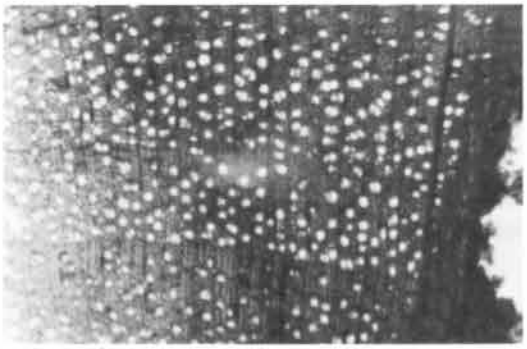


接線断面　40×



3．カキ　横断面　40×

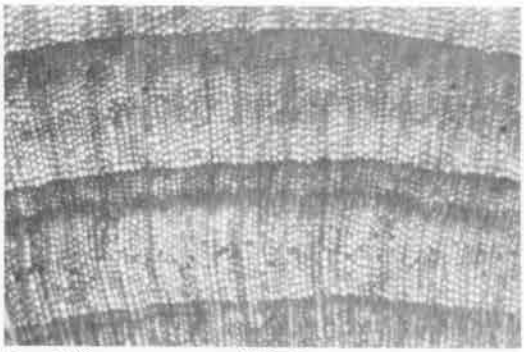
接線断面　40×



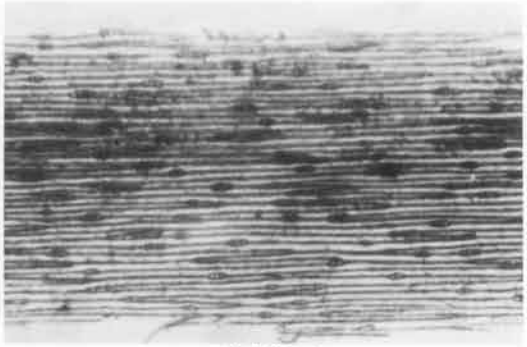
4．サカキ　横断面　40×

接線断面　40×

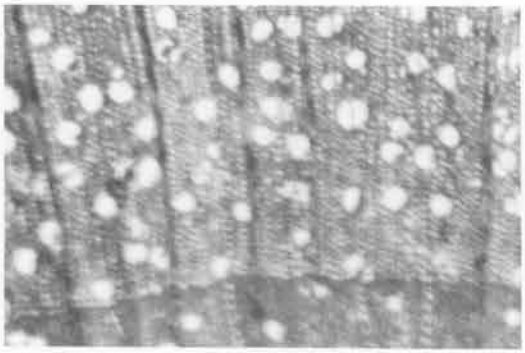
図版20



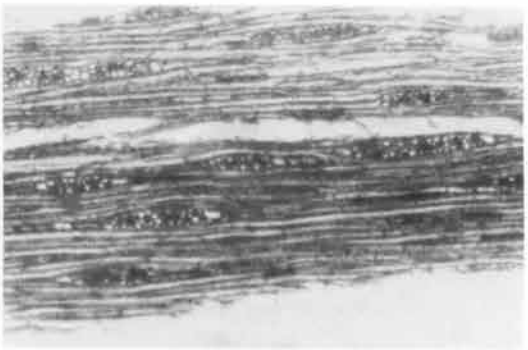
5．スギ　横断面　40×



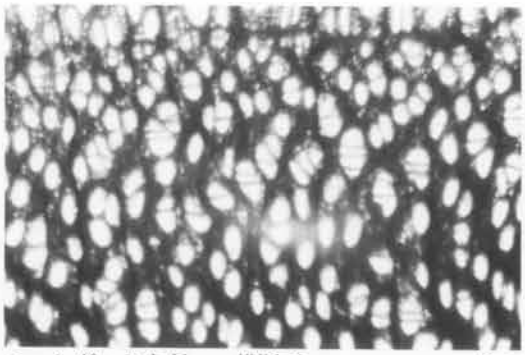
接線断面　40×



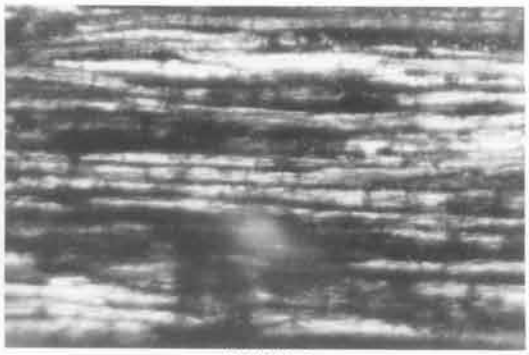
6．リョウブ　横断面　40×



接線断面　40×

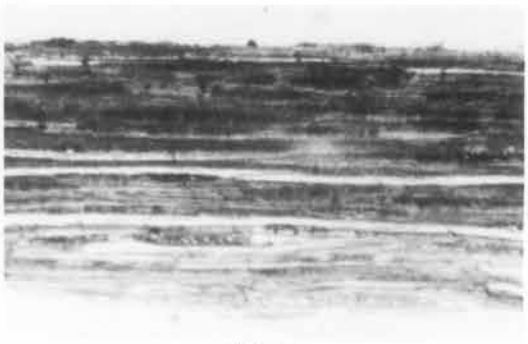


7．シダレヤナギ　横断面　40×

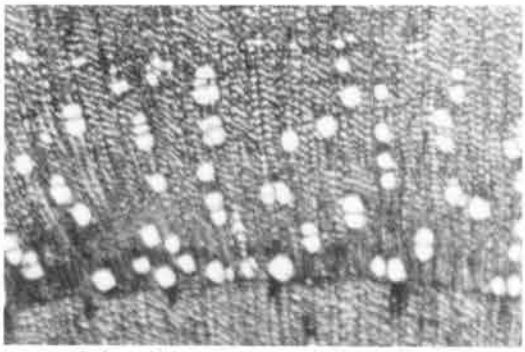


接線断面　40×

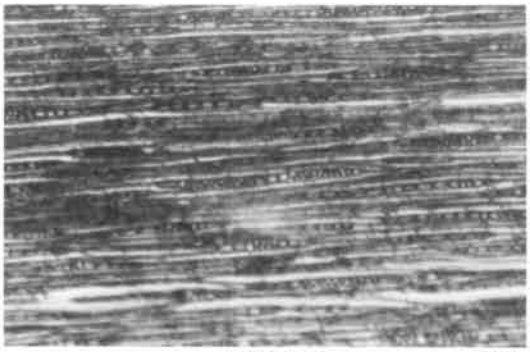
8．イヌブナ　横断面　40×



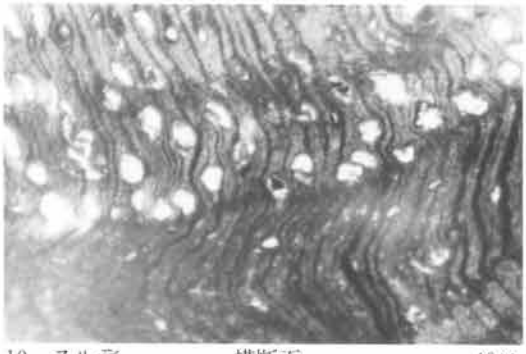
接線断面　40×



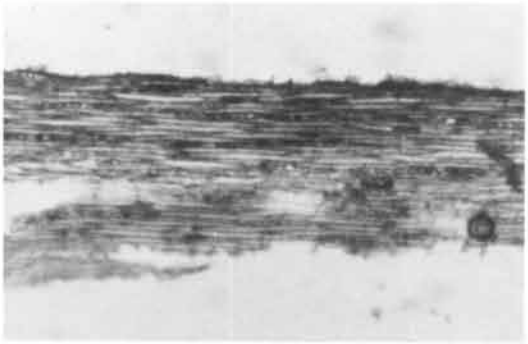
9．ハクウンボク　横断面　40×



接線断面　40×



10．ヌルデ　横断面　40×

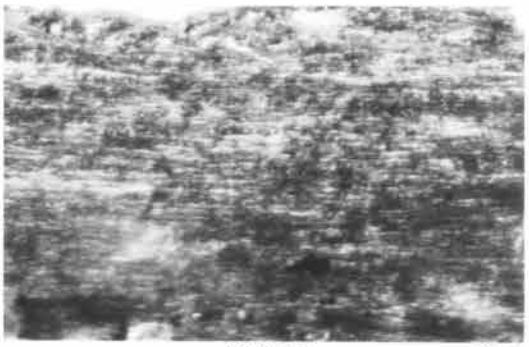


接線断面　40×

11．シラカシ　横断面　40×

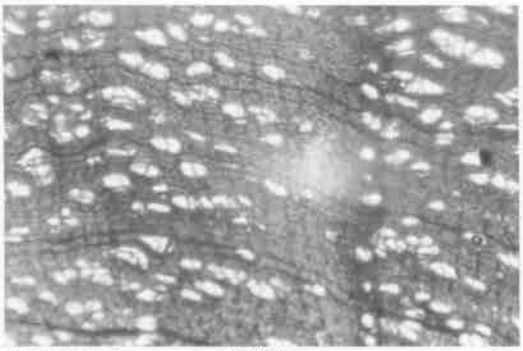
接線断面　40×

12．アラカシ　横断面　25×

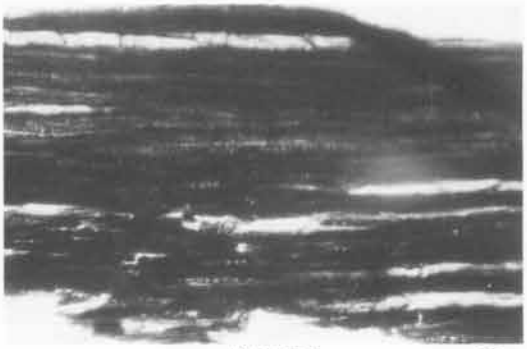


接線断面　25×

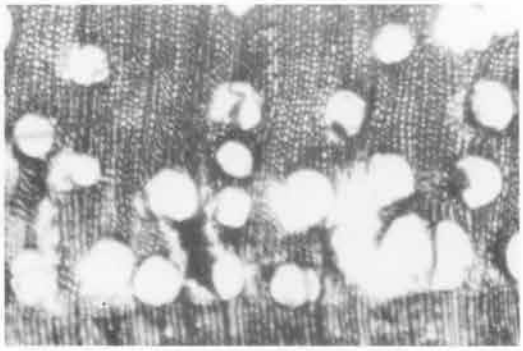
図版22



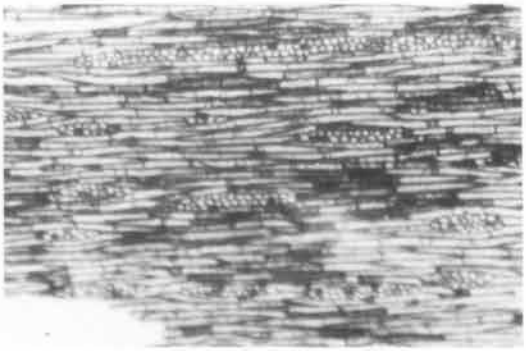
13．アサダ　横断面　25×



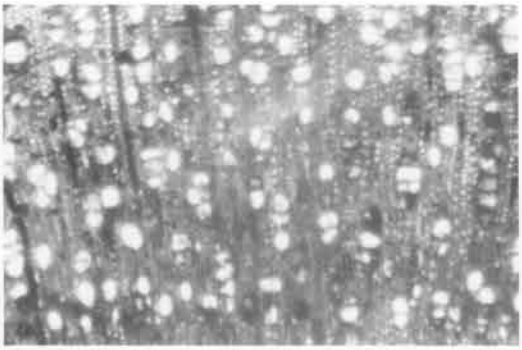
接線断面　25×



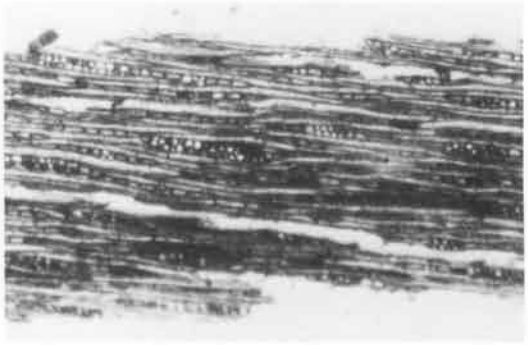
14．アカメガシワ　横断面　40×



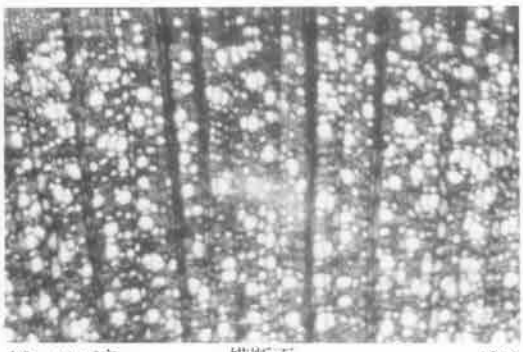
接線断面　40×



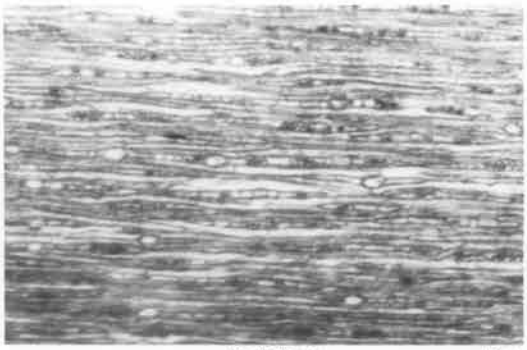
15．エゴノキ　横断面　40×



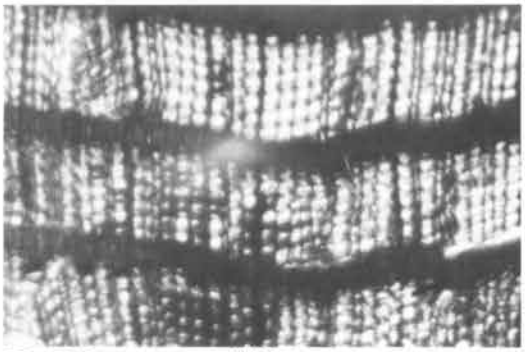
接線断面　40×



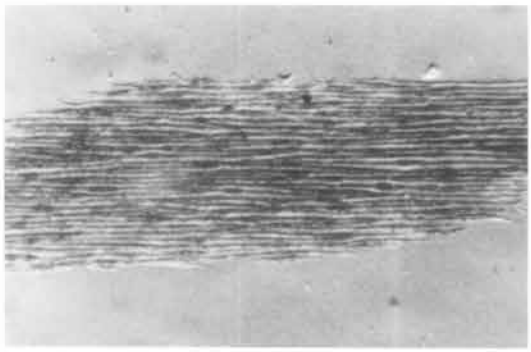
16．ツバキ　横断面　40×



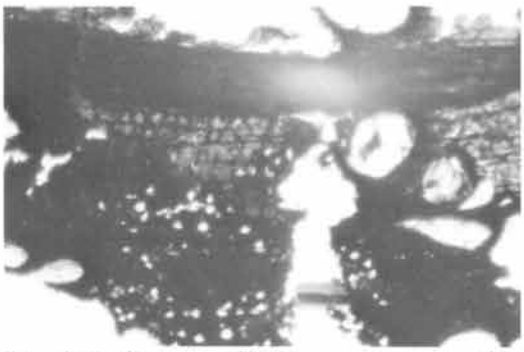
接線断面　40×



17．モミ　横断面　40×

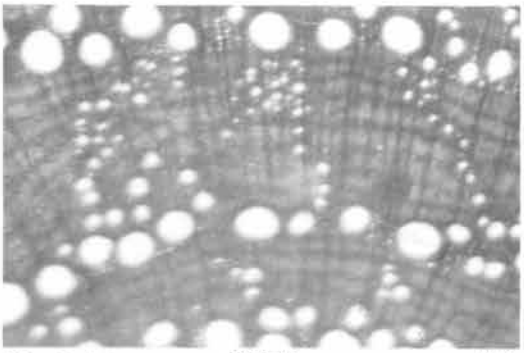


接線断面　40×



18．アベマキ　横断面　40×

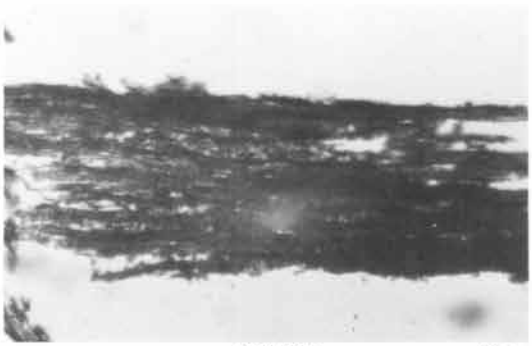
接線断面　40×



19．コナラ　横断面　40×

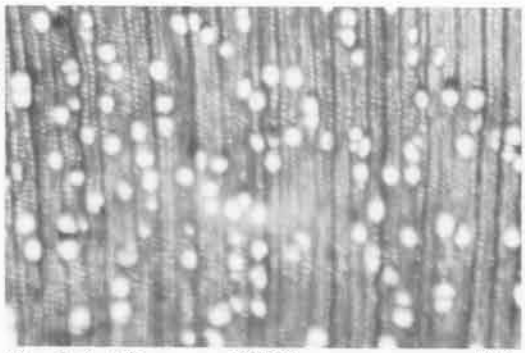
接線断面　40×

20．ハンノキ　横断面　40×

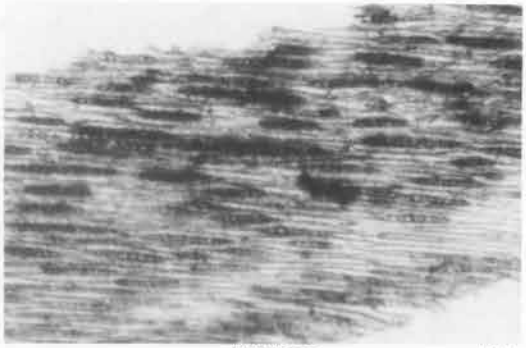


接線断面　40×

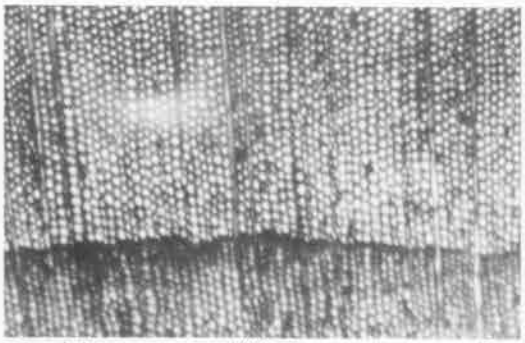
図版24



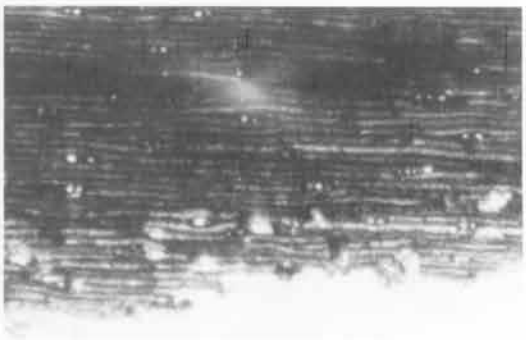
21．トチノキ　横断面　40×



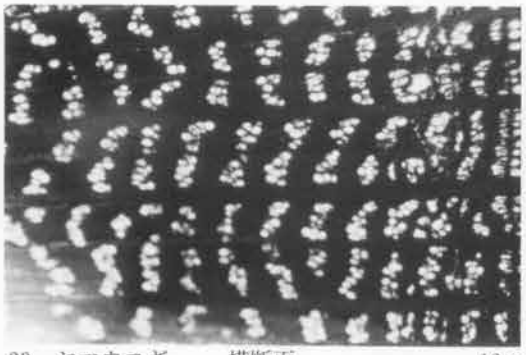
接線断面　40×



22．カヤ　横断面　40×

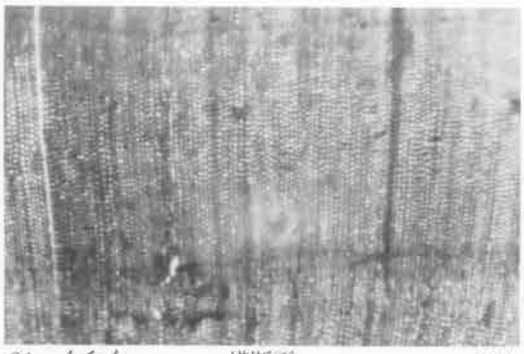


接線断面　40×

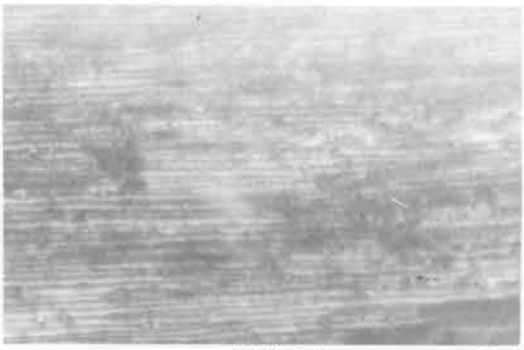


23．ヤマウコギ　横断面　16×

接線断面　40×



24．イチイ　横断面　25×



接線断面　40×

軽　海　遺　跡

県営公害防除特別土地改良事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

昭和61年3月20日　印　刷
昭和61年3月31日　発　行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話（0762）43－7692番

印　　刷　北国書籍印刷株式会社
石川県金沢市泉本町2丁目155 番地